
レッツゴー仮面3 極・スピンオフ！ ショート茶番劇場2011

仮面3 Mark?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッツゴー仮面3 極・スピノフ！ ショート茶番劇場2011

【コード】

N9896U

【作者名】

仮面3Mark?

【あらすじ】

仮面3の作品の一部である『東方翠鬼音響 Lost Time Life...』 『仮面ライダー龍騎 闘いの火種は幻想の都へ』。この2つの作品のオリキャラ、原作キャラ達がショート茶番劇場に挑戦っ！ キャラ達のカミングアウト！？ あの人がアルバイト！？ あの人が就職活動！？ あの人が漫画家を目指す！？ あの人が皆の為に相談所を作る！？ それに止まらず他作品のキャラ達ですら仮面3の毒牙にっ！！ やりたい放題のショート茶番劇場に、どうかお付き合いください。基本的にセリフだけです。

第一回ザ・カミングアウト！ by文

文

「ザ・カミングアウトオ〜〜！」

パチパチ〜。

文

「さあ始まりました！ ザ・カミングアウト！ このコーナーは、カブキ達を始めとする様々な人達に、さまつざまな事をカミングアウトしていただきます。拒否などできません。兎に角その人の胸の内に秘めた想いを言っていたいただきます」

カブキ

「流れる様な説明だな」

文

「ショート茶番だからね。サクサク行かないと。因みにこの場には、カブキ、慧音さん、妹紅さんの三人がいます。今回はこの中から1人カミングアウト。それにメタ発言もたまにあるから。そこツッコムなよ！」

慧音

「ズバズバいくなあ」

妹紅

「連載第一回目で目立つ役だからテンション上がってるらしい」

カブキ

「ちょ、妹紅！ いきなりメタは止める！」

文

「サクサクいこうっ！ ホントサクサク！ 時は金なりおいなり
さんって言うからね」

カブキ

「言わねーよ！ 言ったとしたら、先人は何考えてるんだよ！」

文

「さあ、第一回目のザ・カミングアウトの餌食となるのはあゝ……」

カブキ

「ツッコミ無視するなよ！ リアクション返せよ、ちょっとさみし
いだろ！」

文

「今回はカブキがザ・カミングアウト！」

カブキ

「オール無視な上俺かよ!？」

文

「ほらサクサク行こう！ 早く準備して」

カブキ

「わーたよ。……なんか言う事あるだろうか……」

妹紅

「……なあ慧音。カブキは何言うかな？」

慧音

「うーん、幻想郷に来て、縫物や洗濯等が神業的に上手くなったとか？」

妹紅

「あー確かにあれ凄いなあ。穴を塞いだり、ボタンを付け直すのは瞬く間にやってしまうし。前なんかルーミアの寝間着を5分くらいで作ったし。未恐ろしいよ……」

慧音

「洗濯だって、染みを染みと思わせない程だからな。カレー染みをあんなに綺麗に落とすとは……」

妹紅

「あいつクツキン。パパ的な存在になれるよね、冗談ぬきで」

慧音

「いやー、それはどうか？ カブキって結構浪費家だし」

妹紅

「漫画…か」

慧音

「カブキはえらく漫画を気に入ったからな。月に何冊買っているやら…出費が激しいよ。はは……」

妹紅

「『現代の素晴らしき文化、漫画を俺から奪えると思うなよっ！』とまで言ってたしなあ……」

慧音

「あと漫画のネタを熱く語られるのも止めてほしいな。私は男組読んでないから分からないんだよ。誰だよ、流の兄貴とか神竜とか堀田さんとか南條さんとか」

妹紅

「高柳とか大田原とかも言ってたね。素晴らしい漢（おとこ）達らしいけど……」

慧音・妹紅

「分かん……」

文

「貴方方少し黙っててくれませんか!? カミングアウトなくなっちゃうでしよう!」

カブキ

「……よし、決まったぞ」

文

「結構言われてたのにネタあったの!? まあ、いいか……。じゃあ言ってみましょう!」

カブキ

「応っ!! えゝ私（わたくし） カブキは……同居人である藤原妹紅さんに……」

妹紅

「私?」

カブキ

「一度、本気でムラムラした事がありますっ!!」

一同

「ええっ!!?」

妹紅（赤面）

「えちよっ、ままままマジか!?!」

カブキ（爽やか顔）

「ああ、マジだ」

慧音

「言えてすつきりしたのか爽やかな表情になってる!?!」

文（爆笑）

「か…カブキ詳しくオフフ説明をぶふうっ!!」

妹紅（赤面）

「おい天狗! なに爆笑してんだ! 笑うところあった!?!」

文（W笑W）

「ちよ、どんな状況でム…ムラムラ…ぶはっ、し、したの?」

妹紅（SEKIMEN）

「ウエルダンの焼き鳥にしたるかこの天狗!」

カブキ

「いやな? 妹紅ってほら、慧音に比べると男勝りじゃん。だから

ガードが薄くてよ」

妹紅（赤面）

「止めて！ 聞きたくない……聞きたくないっ！！」

カブキ（ニヤニヤ）

「最近暑いからさ、妹紅もだらけて気が抜けてたのかな？ 風呂上がりに来てた寝間着をさ、おもいっきりはだけててさ。久しぶり頭に浮かんだよ。？性？って字がな……」

妹紅（半泣き）

「止めてよ！ 本当に止めてよ！」

文

「その時の妹紅さんってどんなだった？」

カブキ

「胸元と脚が露出して凄かったな。あと風呂上がりで頬が紅潮してて、よりエロかった。それに肌が思ってたより綺麗だったぜ」 親指を立ててサムズアップ。

妹紅（逃亡ダッシュ）

「いやああああああ！！！！」

慧音

「妹紅おおお！！！！ カブキ、お前どうした！？ いつもの大人数カブキはどこにいった！？ 今のお前、魅空みたいだぞ？」

カブキ

「慧音よ……なにもムラムラするのは思春期の少年だけじゃないん

だぜ？ 大人だつてムラムラする」

慧音

「止めてくれ！ ホンットにどうしたカブキ!？」

カブキ

「大人だつてムラムラするっ!!」

慧音

「なぜ二回言った!? しかも強調するな!」

カブキ

「俺だつてボケたいんだよおお!! 魅空とかジョージとかその他諸々にツツコミ続ける毎日…もう疲れたんだっ!! もうハジケてはっちゃけるボケの世界に閉じこもりたい」

慧音

「私だつてツツコミ入れてばかりだぞ」

カブキ

「お前はホラ、なんか似合うじゃん」

慧音

「簡単に片付けなくてくれるか!？」

カブキ

「五月蠅い五月蠅い五月蠅ーい！ 俺はここだけでいいからボケに生きるんだああ!! うひよひよひよひよ」

慧音

「一回永遠亭に行こう!! 付き添いしてあげるから、私一緒に永遠亭に行こう、お願いだから」

カブキ

「俺はどこも悪くない! だから行く必要は無い?」

慧音

「おかしいよ! 主に頭が!! あと最後の疑問符は何なんだ! 自分でも分からなくなってるじゃないか!! もう末期だよ!!」

カブキ

「お前だって…お前だってボケたい時だってあるだろ! どうなんだ!?! 正直に言いなさい!」

慧音

「……………」

文

「なんで沈黙?」

カブキ

「ほら言いなさい! 正直に言ったらプリン上げるから!」

慧音 (悩み)

「……………」

文

「え? プリンで悩んでる? プリンで悩んじゃってるの?」

カブキ

「さあ!」

慧音

「……………あ…あります」

カブキ

「じゃあやってみよう！　一回ボケてみよう！　病み付きになるから！」

慧音

「でも……………いざやると言っても……………どうやったら」

カブキ（暴走）

「自分を捨てるんだ！　プライドを捨てる事が真のプライドであるように、自分（プライド）を捨てればボケができるようになるっつー！！」

慧音（混乱）

「そ…そうなのか？」

カブキ（暴走）

「そうだっ！　ここは俺達の脱ツツコミの場！　ここだけでもボケに生きるんだあー！！」

慧音

「お…おおー」

カブキ（暴走）

「声が小さあーい！！　最も腹の底から声をだせえい！！」

慧音（場に毒され）

第一回ザ・カミングアウト！ by文（後書き）

この作品ではご要望があれば、あなたのキャラでもショート茶番劇場を仮面3は作ります。ご要望の場合は感想へ。思いつき次第書きますので。では次回。

常識人って肩書きは…以外と面倒だぞ？ byメルカバ（前書き）

今回は魅空でやるつもりでしたが、いろいろあってリュウガとメルカバのコントにしました。ごめんなさい。

常識人って肩書きは…以外と面倒だぞ？ byメルカバ

リュウガ

「ねえねえバードさんバードさん」

メルカバ

「む、どうしたリュウガよ？」

リュウガ

「いきなりだけど、私、アルバイトをしようと思いましたっ！」

メルカバ

「あ、うん。なぜ私に宣言した？ 私にではなく、同居（勝手に住み着いている）している彼女らに言えばいいだろうに」

リュウガ

「そりゃ勿論言ったよ。だけどね……」

以下、皆さんのリアクション。

紫

『あら、そう。頑張ってるね（笑）』

狼夜

『ワロスワロス（笑）』

将斗

『明……日は、硫酸……の雨が降る……な』

詩織

『精神に異常有り、か。根っからNEET思考のリユウガが働こうなんて…師匠に報告しておかないと』

藍

『……………ふ』

リユウガ

「どちくしょおおおおおおお！……！」

メルカバ

「これは…酷い」

リユウガ

「根っからNEET思考ってなに！？ 私そんなじゃないもんっ！！ 昔はそりゃ、血反吐出すまで働いてたけどさあ！ ここがすごしやす過ぎるんのが悪いんだよ！ ここが過ごしやすいから、私はどどん部屋からでなくなっで行く。最近の外出の理由はストーキングとライダー関係ばかりだ」

メルカバ

「黒龍騎士自宅警備員の二つ名は…いや、暗黒龍騎士自宅警備員の二つ名は伊達じゃないな」

リユウガ

「ジョブランクアップしてるう！？ カッコいいけど嫌だよ！」

メルカバ

「何はともあれ、働くと言う気持ちを持つのは善き事だ。今の時代、無気力に部屋に閉じこもる若者が増えている。だが、お前は自分を

守る殻を砕き、荒れ狂う大海の社会の一辺に身を投じる事を決意した。その志しの在り方は、称賛されるべきもの。私ができる事なら、何か手伝おうか？」

リュウガ

「いやー、私ってまともな所で働いたことないからねー。そーゆーの助かるよ。流石の私も、引きこもりとか言われても悦べないし……」

メルカバ

「まともな所で働いたことがない？ ……まさかりユウガ！ お前水商売に手を出していたのか！？ いかん！ いかんぞリュウガアアア！！ その歳で水商売は駄目だ！ 水商売自体を否定するわけじゃないが、未成年が手を出したら危うい道を歩む危険性がある！ 水商売はもつと、腐敗しながらも儂い希望が存在する社会を知ってからだっ！！」

リュウガ

「違うよ！？ そういう意味じゃないからっ！！ 私が住んでた所がって意味だから！ うわっこいつメンドクセっ！！ 仮面3作品一の常識人（イマジン）って肩書き持つてるけど、バードさんが一番めんどくさいかも」

メルカバ

「……すまん。ちょっと興奮してしまった。ところで……声からして大体分かるのだが…お前は今何歳なのだ？ 若いというのは見当がつくのだが…」

リュウガ

「それは秘密」

メルカバ

「どんな仕事にする面接はつきもの。年齢を明かす必要があるし、履歴書を提出しなければいけない所もあるかもしれない」

リュウガ

「あーなるほど…」

メルカバ

「どれ、一度練習してみるか？」

リュウガ

「練習？」

メルカバ

「ああ、履歴書や面接を練習して本番を迎えたほうが、確実にいいはずだ」

リュウガ

「うーん…だよねえ。じゃあやってみよう！」

*

メルカバ

「……………なんだこれは？」

リュウガ

「なについて、はじめて書いた履歴書ですが？」

メルカバ

「ぱつと見たがツッコミどこ有りすぎだろおおお！……！」
履歴
書を床に叩きつける。

リュウガ

「ええっ！？ 真面目に書いたのに!？」

メルカバ

「まず字が汚過ぎる!！」

リュウガ

「最近書ける様になったからしょうがないじゃん!！」

メルカバ

「学業履歴はなんだこれっ!? 早稲田大学に入っていた………て夢を見たんだ……。お前は夢じゃなくて現実を見るおおおお!！」

リュウガ

「今は私はバードさんに怒られてる………という夢を見てるんだ。きつと」

メルカバ

「早速現実逃避しちゃってるよ!! お前は本当に働く気あるのか!？」

リュウガ

「働く気あります! 絶対絶対、働いてみます!! あまり部屋からでない仕事をしてみせます!……!！」

メルカバ

「自宅警備員スキル発動するなよ！ 部屋からでない仕事って内職じゃないか！ アルバイトする気じゃなかったのか！？」

リュウガ

「働く気はあるしい！ ただ自分の部屋の中が落ち着くだけだしい！ まだ本気だしてないだけだしい！ 私が本気を出したら景気がひっくり返るしい！」

メルカバ

「ああだつたら本気だしてもらおうかつ！ 景気をひっくり返してもらおうか！？」

リュウガ

「落ち着くわあ！ 自分の殻の中、めっちゃ落ち着くわあ！！」

メルカバ

「殻に引きこもるな！ さっきの私の誉め言葉を返してくれ！」

リュウガ

「何はともあれ、働くと言う気持ちを持つのは善き事だ。今の時代、無気力に部屋に閉じこもる若者が増えている。だが、お前は自分を守る殻を砕き、荒れ狂う大海の社会の一辺に身を投じる事を決意した。その志しの在り方は、称賛されるべきもの。私ができる事なら、何か手伝おうか？」

メルカバ

「まんま返してきた！？ というか今までツッコまなかったが、この証明写真はなんだ！？ これ紅魔館の紅じゃないか！」

リュウガ

「可愛い女の子かと思った？ 残念！ リュウガちゃんでしたっ！」

メルカバ

「そんな事聞いてないからっ！」

リュウガ

「愛する人を……思い過ぎて……」

メルカバ

「そういうセリフ止めろっ！ ガールズラブと間違われるからああああ！」

くメルカバ息切れの為暫し休憩

リュウガ

「（* ^ ^ *）」

メルカバ

「分かりやすく笑ってるんじゃない！！ もう面接の練習をしよう、そして直ぐ終わらせよう……」

リュウガ

「あり、なんで疲れるんでこわす？」

メルカバ

「しえからしか！ 誰のせいだと思ってるんだ！」

リュウガ

したままアルバイトの面接を受ける事になる。いつかに続く。

因みに、メルカバはこのまま帰り、将斗を含めた同居人全員を震え
上がらせたそうさだ。

常識人って肩書きは…以外と面倒だぞ？ byメルカバ（後書き）

……次回から地文も書こう。セリフだけべらべら書いてると苛々する。セリフだけ書き続けられる人って凄い。いやマジで。

次回はタスクさんキャラで茶番。その次はフロストさんキャラで茶番予定。その次はリュウガの続き…と思いきや、米倉（セキハン達）家の話をやると思う。セキハンとハクマイ、そして二人の父親が全力でスイカ割りをする。あー、早くハクマイの名前決めなきゃ……。

次回も宜しく御願います！

少女と召喚とタイヘンなヘンタイbYリュウガ（前書き）

今回はタスクさんが執筆している『仮面ライダー リバース』のキ
ャラでショート茶番。キャラ崩壊が半端ないです。

だから最初に言おう。

タスクさんすんませんでしたあああああああ！！

少女と召喚とタイヘンなヘンタイb yリユウガ

浜永市。

この街には他の街とは違うところがある。それは他の街なら都市伝説の一言で済ます様な出来事が、実際に起きているのだ。人間を襲う怪人達、テロリストと呼ばれるが高い志を持っていた怪人達、そして人々を護る『仮面ライダー』。仮面ライダーは個体名称として人々からこう呼ばれていた。

?リバースライダー?と。

本来ならリバースライダーが活躍するこのお話。だが今回は少し時間をさかのぼって、恋愛に悩む1人の少女の身に起きた出来事を記そう。

*

浜永の街の一角に存在する本屋の店内。様々な厚みのある本や文庫本、コミックスが陳列されている。まあまあいる客の中に、ポブカツトの黒髪に眼鏡をかけた少女が居た。真面目そうな雰囲気を出す中学二年生の少女、浅井薫が今回の主人公である。特に意味もなく、ぶらりと立ち寄った本屋であるが、薫の表情は暗い。ぼーっ、として陳列された本達を無気力に見つめる。

彼女は今、中々に重い悩みを持っていた。いや別に、架空請求だとか脅されているとかではない。この年齢の悩みと言ったらアレだ、

恋愛関係である。

想い人は従兄である伊吹健。しかし彼は恐らく轟茜という女性に恋している。あつちは大人の女性。だが自分はどうか？ 妹とでしか見てもらえていないだろう。恋愛では勝負にならない……。敢えて分かりやすくするなら、G3でコアに勝負を挑む様なものだ。

この考えを再度頭で構成した時、薫の表情は憂鬱の色に染まった。

「はあ……………」

そして、ため息を吐いた。幸せが逃げて行ってしまいそうな、虚しさが混じるため息。何かいい指南書などは無いだろうか。何せ薫は14歳。青臭い青春を謳歌している若者には、勢いででしか恋愛を表せないものである。大人の女性の、一手二手先を読むような恋愛には勝てない。頭痛がしてきそうな悩みに頭を下げると、ふざけたタイトルの本を見つけた。

『イタンへなンヘイタ』

「なにこれ……………」

誰もがそう思うタイトルである。因みに逆から読んではいけない。絶対に。地味に厚みがある変な本を手取る。表紙は変なタイトルの他に、『前回あの後、私はキ 肉ドライバーを喰らって、チョークスリーパー三時間の刑を受けてました』と書いてある。なんだこれは……。呆れながらも本を眺める。著者名は『リュウガって本名じゃないのに、リュウガ以外ろくな呼ばれ方がないから妥協しました』。薫は言葉が出なくなりました。呆れ過ぎて。こんな本、誰が買ったんだろうと思ったが表紙の一番下に眼を引く言葉がある。『こ

の本に書いてある事を実行したら、86.5%恋が実ります』。

「…………マジ？」

一瞬、本気で買おうか迷った。だって数値がリアルだったんだもん。財布の残金チエックの後、深呼吸。冷静になれ私、と自分を落ち着かせる。落ち着かせた結果、

「ありがとっございやしたー」

買ってしまった。店員に、痛い子を見るようなで見られたのが辛かった。

*

家に直行し、自室に籠もった薫は、本を開いて絶句した。何故なら本の2割が、何か怪しい者を召喚する方法だったからだ。なんでも召喚された者が、恋愛を指南してくれるとかしてくれないとか。残りの8割が、『実録！ リュウガの正体！』。薫は興味が無かったから読まなかった。取り敢えず、信じたわけではないが1,685円（税込み）を無駄にしたいくないので召喚儀式に挑戦してみる事にした。母親と従兄、同級生に見られたら生きていけなくなるが、召喚の手順は以下の通り。

1. まず大きめの紙に、半径1Mのカゴメ（籠目の形、すなわち六芒星のことである）を書きましよう。

2・カゴメに合わせるように蠟燭を六本立てましょう。

3・カゴメの中心に、供物として夜のお相撲大会を描いた大人の絵本（エロ本）を置きましょう。

「　　って、なんでやねん!！」

薫は自分のキャラを忘れて、本を床に叩きつけてツッコミを入れた。

「なんで最初はそれっぽかったのに、急におかしくなるかなあ!？
急に小学校低学年の男子が考えた様な供物を求めるの!？　そも
そも私の部屋にエッチな本無いし!！」

これは実話である。女子は男子よりも大人の事情を知るのが早く、彼女の部屋に行つて悪戯心で捜してみたらごっそりエロ本が…なんて事もあるものだが、薫の部屋に無かった。何故かって？　それは薫が真面目ちゃんだからさ。興味があるけど踏み込めないそんなジレンマにとらわれているのだ。

冷静になって本を拾い、ページをめくつた。冷静になれ。どたばたと音を出したら、母親が様子を見に来るかもしれない。

4・大人のエロ本が無ければ、美少女or美女のパンツを置きましょう。それで召喚が成功したら、貴女は美少女or美女ということです。ヤッタネ!

「喜べないよっ!!　素直に喜べないから!!　ナニコレ、この召喚もしかして女の人限定!？」

とツッコんだ後、薫は注意書に気付く。

その通り。女性でなければ召喚されません。

「なんで会話が成立してんの!? これホントに本!?!」

まあまあ、召喚成功したら一応イケメン出るから。自称野上良太郎以上、天道総司以下だつてさ。ウソクサ　〇　　^　　〇　　〇　　。
。私からみたらあいつは、大樹の兄ちゃんレベル　(　　、　　)　　。

「だからなんで会話できてるの!? しかも馴れ馴れしくなってるううう!!　あと大樹って人のお兄さん分らないから、リアクシヨンのしようがないよ!」

息を荒げながらも、声を押さえてツツコミを繰り返す。意外と彼女にはツツコミの才能があるのかもしれない。

流石の薫も儀式を続行しようか悩んだ。うら若き乙女の下着。もし本当に何かでたら下着で何をされるか……。

「ううう……」

まあ続行したが。真面目な性格のため、途中で止めるのを深層心理に存在する薫自信が許してくれないのだ。真面目ってたまに損だね。

下着をカゴメの中心に置いて、次のページをめくる。そこには呼び出しの呪文が書いてあった。ここまで来たらなんだつてやってやる。羞恥心があるから、できればやりたくないが。深呼吸をして心の準備をする。

「アイツが」

本に書いてある通りにポーズをした。両手を広げ、言葉を発する度に軽く腰を振る。

「浅井家に」

そして右手に拳を作り頭の上で掲げ、顔の横まで下げた。

「クル〜〜〜〜！！」

言い切った。言ってやった。やりきった薫の顔は堂々としたものではなく、羞恥に顔を赤く染めていたが。呪文を唱えて数秒後、カゴメを書いたなんちゃって魔方陣からボンツと煙が出た。

「！？ な、なにが……」

「がはっ、ごほげべほお！！ けむた！！」

煙に包まれた部屋の中央、つまりは魔方陣から若い男の声がした。何故自分の部屋に男が居るのか、恐ろしさを感じながらも部屋の煙を晴らすために窓を開けた。

「ぐぞお……あの野郎お……女だけあの野郎お……ちょっと嫌がらせに腐った生卵とゆで卵と温泉卵を投げつけただけで、魔方陣の術式に封印しやがって……。フヨウまで一緒になって……なにが『頼まれちゃったから、ごめんね？』だよ。頼まれたからって封印すんなよコンチクシヨ」

煙がだいぶ晴れてきた事で何事か確認できた。なんちゃって魔方陣

に膝をついて青い顔をしている青年がいた。整っている顔（薫曰く、従兄の健にはかなわならしい）と首の後ろで束ねた長い金髪に眼がいく。美形であるが薫の女の部分が告げている。こいつは危険だ、と。だがそれよりも一番気になったのは、青年が、自分の下着をさも同然といった表情で懐にしまっているという事。

「！！！」

「ぶっぢん！！！？」

薫が下着を盗もうとしている青年に、声にならない悲鳴を上げながら本を投げつけた。青年の額には本の角が突き刺さった。

*

「と、いう事なんです、はい」

青年は自分は〇〇〇の方の魅空、初代魅空だと名乗った。だから自分の事は魅空か1号と呼んでくれと言ってきた。1号という事は、他にも居るのだろうか？

今は自室にある小さいテーブルを挟んで座っている。ちょうど経緯を聞き終わったところだ。なんでも常にコスプレ（変身）している人に悪戯をしたら封印されたいらしい。俄かに信じがたいが、目の前で起こってしまったのだから信じるしかない。ちなみに下着は回収済みである。

「そうですか、大変でしたね」

自業自得だろう、と内心思った。

「そうなんだよー。あつ、これ俺が封印されてた本？」

「はい」

ペラペラと本をめくる魅空。薫は正直、直ぐに帰ってほしかった。本能が語っている、この男は危険だ。自分貞操とかなんやらが、危うい気がする。

「なんでこの本、8割がたあいつ（リュウガ）の自伝なの？」

「知りませんよ」

「うわ、あいつ昔こんな事あったんだ。だから味覚を感じないのか……。なんだろ、このレッツゴーだけでいいから、優しくしてやるうかな……」

レッツゴーだと、だいぶ丸くなっている魅空。そんな事はどうでもいい。今は魅空にどうやって帰ってもらうかである。あまり相手を傷付けずに帰ってもらい方は……。

「ところで嬢ちゃん」

本から目を離して薫の事を呼んだ。穰ちゃんと呼ばれたことに一寸ムツとした。

「穰ちゃん今は、K O Iしちゃってる感じ？」

「なっ!？」

「あーこりゃビンゴだな。ええ、おい？ 色気付いちゃってまあ。だけど嫌いじゃないわ!」

見破られた薫の顔は、直ぐに赤くした。何故バレた!? と心中で強く思いながら。

「ななななななな、な、にやんでそりを…!」

「分かりやすい動揺、ゴチソーサンです。簡単な推理さ。こんな事書いてる本を買うなんて、自分ら堂々と告白できず相手が気付いてくれるのを待つ様な恋愛ベタのウブちゃんしかいないから。出会ってまだ数百文字だけど、相談してみ? 一応俺、恋愛経験あるのよ。え、なにその顔。妄想じゃなくてマジだからね!? 現実に居るからね!? 本編の都合上、別れちゃったけども!! 本当に愛し合ってた仲なのよ!! 精神的にも肉体的にも」

最後はいらなかった気もするが、そこは魅空クオリティ。

対して薫は魅空に本を見せた事を後悔した。あんなところに下着を放置していた自分も悪いが、さり気なく盗もうとした魅空はお断わりだ。絶対に相談したら失敗する。今だってほら、アホの子みたいな顔をしながら薫のダンスを平然と開け……………え?

「ちよつとおおおお!!!？」

勿論止めに入った。

「え、なに!？」

「なに！？ じゃないですよ！ こっちのセリフ！ なんで私のダンスを勝手に開けてるんですか！？」

薫の必死なツツコミも、魅空はケロリとした表情で返した。

「ダンスチェックは常識でしょ？」

「どこの世界の常識ですか！？ 非常識って言葉の存在を認知します！？」

「ふっ、甘いな穰ちゃん。非常識ってえのは、こーゆー事さああああああああ！！！！！！！！！！」

ポリウームを考えた大声を上げて、無造作にダンスから薫のパンツを取り出して、頭に被るといふ犯罪行為をやつてのけた。その見た目からして、女の敵とはこの男の為にある様なものだ。タスクさんごめんなさい。勿論薫が行つた行動は、

「いやあああああ！！！！！！」

タイヘンなヘンタイの顔にビンタを喰らわせる事だった。一瞬、魅空の顔がギャグ顔に歪んだ。

「ぶべらっ！！！！」

ビンタの衝撃で吹っ飛び、ダンスに後頭部をぶつけた。体重が乗った、なかなかいいビンタである。魅空自身には結構なダメージ受けた筈なのだが、その表情は明るかった。後頭部をぶつけた事で床に倒れてピクピクと痙攣している魅空ヘッドから、すかさず下着を回

収めた。後で三回洗おうと心に決めて。

「ぐぶう… ナイスピント。まあまあ感じたぞ……」

「あんまり言いたくないですけど、もう嫌です！ 帰ってくれませんか!？」

「嫌だ！ 久々の若い女の部屋なんだから堪能させろっ！ 嗚呼、若い女の部屋の空気はやっぱいいなあ……ハアハア」

そう言つて深呼吸する魅空の顔は、警察が見たら即逮捕だ。薫の母親が見たら、橋から河川に落とされるだろう。薫の従兄が見たら、大らかな彼でも薫の危機を感じて殴り掛かるだろう。

「そんな表情で部屋の空気吸うの止めてくれませんか!? できれば呼吸しないでください」

「それひでえぞ!? まあ無呼吸なら6時間はいけるけど」

「貴方は陸に上がった鰻ですか!？」

「もぉー！ ちょっとくらい良いじゃん！ おらぁ若い女に飢えてんだよ。見た目が若い奴でも妥協すつけど、カザリ（星に憑依）

はガード堅いし骨折ってくるし、ガメル（天子に憑依）は純粹過ぎて手を出せないし、フヨウはアंकが独占してるしいい！

ガメルはなんだあれ!? 純粹過ぎて手を出せないってどんだけキラキラしてんの!? キラキラ世界過ぎて俺灰になりそうなんだけど。っーかレッツゴーだけでもフヨウとイチャコラしたいのに、アंकがゴラアアアア!!!」

己の欲望を吐き出す魅空の姿に、何故か虚しさというか、哀れみを

感じてしまう。それと同時に、魅空と関わった人は苦勞してるんだろ？な、とも思った。何はともあれ、このグリード（貪欲）な男をどうすればいいのだろう。早く帰って頂かなければまた何をされるかわからない。だがお願いしても帰ってくれないだろう。

ふと、魅空が何かに気付いた様な仕草で立ち上がった。

「あつ、ページの的にそろそろ俺、不幸にあつて強制退場だから言いたい言つさね」

さつきから数百文字だとかレッツゴーだとかページとか、何を言っているんだろうかこの男は。

「ありきたりだが、後悔はすんなよ」

「……………は？」

「どんな風になつても後悔はすんな。例え好きな野郎が別の女とくつついても。好きな野郎が女にフラれても後悔すんな。野郎の恋愛が成就して有頂天になつても、フラれてカビーンつてなつても、手前の後悔しない行動をしるよ。野郎の尻蹴つ飛ばして喝いれんのもよし、甘つたるい言葉で慰めるのもよしと来たもんだ。なんにせよ、お前がした後悔しない行動は、お前が好きな野郎に響くからよ。なんだろうか、このセリフは。まるで未来を見透かしているような。しかし、地味に勇気付けられるような……………」。

「俺がなんで穢ちゃんにこれと言つたのか気になつた人は、『仮面ライダーバース 第二十一話 心、つないで』をチエケラ！」

台無しである。それが魅空クオリティ。まあそれ程あれな空気では無かったのだよとしよう。ただ薫はポカーンとしてしまっているが。

「さてと、そろそろか。この本もらって行くぜ」

「え、あはい……」

「しっかしあいつ、結構重要な事を書いている本を、店に出しやがったな」

愚痴を言いながら本を手取る。というか、何故魅空を封印した本がこの街に？ とか考えてはいけない。思ってもいけない。思わんとして。お願いだから。魅空が体内に本をしまつと同時にドアがノックされた。体内に本をしまつというふざけた芸当にギョツとしたが、ノックにもかなり焦った。

「薫ーどしたー。さつきからバタバタと騒がしいよー」

「やばっ……お母さんだ！」

「マジ？ 穰ちゃんのおふくろさんって、べっぴんさん？」

こんな状況で何を聞いてきているんだ、この男は。

「た……多分。って今そんな事言ってる場合じゃないですから！」

「娘が娘だからなあ……恐らく・ではなく+。つまりは当たり前！
ウホッ！ 御挨拶しなければ！」

「なに言ってるんですか貴方は！？　頭とか色々大丈夫ですか！！」

自らドアを開けて薫の母親を拝みに行こうとする馬鹿を、少女は必死に引き止めようとす。阿呆はそれを振り払った。

「例え頭がおかしくても、例え我が身に不幸が降り注ぐ事が判っていてもオ！　俺はブレない曲がらないいいいい！！」

「もう黙っててくれませんか！？」

自分のキャラを貫かんとする変態馬鹿を引き止めようとする薫。こいつを母親に会わせたら、大変な事になる。恐らく母親も自分と同じように、魅空に女としての危機を感じるだろう。そしたらどんな行動に出るか。因みに薫の母親は亡夫・浅井恭介と二人で自警団活動をしていた事もあり、暴走族を二人で壊滅、解散させたこともあったのだ。そこらの人間ではまず勝てない。ギャグ暴走モードの魅空が勝てるわけない。そんな事を危惧している薫は、必死そのものだ。どんな人間も、自分の部屋で変態の血で花を咲かせたくないのは当たり前だ。

「薫ー？　男の声が聞こえてくるんだけど。入っていい？」

「ちよちよ、ちよっ！！　ちよっと待ってお母さん！」

藻掻く魅空、必死に止める薫。そのうち努力が実ったのか魅空がふらついた。心中でやった！　とガッツポーズをとったが、直ぐにコレが間違いだっと思ひ知る。ふらついた魅空が自分に向かって倒れてきたのだ。体重は魅空の方が重いので、そのまま押し倒された。

「うわっ！」

ドスンという音がした。

「薫！？」

何事かと、啞えタバコが似合いそうなポニーテールをした美人、薫の母親である浅井亮子が部屋に入ってきた。そこに広がる光景。それは、見知らぬ青年に押し倒されている我が愛娘。

「……………」

「……………」

「…………… あっ、これが今回の不幸か」

自称、空気の読めるKYのその後起こった出来事は、皆様容易に想像できるであろう。

その日の夜遅く、亮子似の女性が金髪の青年を橋から河川に落とす姿があったとか無かったとか。

少女と召喚とタイヘンなヘンタイb yリユウガ（後書き）

うーん、やっぱり地文ない方がいいかもしれない。だって全然ショートじゃないんだもん。というわけで、次回から地文無し。あつたとしてもちよつとだけ。

さて今回はフロストさんのキャラで茶番……と思いましたが、ちよつと頭をブレイクさせる必要ができましたので、自分のキャラで茶番したいと思います。毎度毎度申し訳ありません。

取り敢えず、魅空やフヨウと言ったオーズバースグリード達で、オーズ本編で分かってきた事をツツコンで行こうと思っています。そして、魅空、フヨウ、アंक、カザリ、ガメルに質問したい事がありましたらぜひどうぞ。

Qリユウガは何歳？

Aまだピチピチの19歳。

まさかこれを当てる人がいるとは…結構予想外なところ突いたつもりだったのに、タスクさん恐るべし。だけど、嫌いじゃないわ！

最後に、

！
タスクさんとフロストさんすんませんしたあああああああああ！

「昔俺が復活した時、一時期魅空と行動していたが、こいつが人の為に行動しているところ見たことないぞ。フヨウは人の為に行動し過ぎて、軽くやつれた」 昔、現在フヨウに憑依。

魅空

「確かにフヨウの人助けを手伝ったらやつれるな。昔2日で体重が3キロ減った」

カザリ

「凄っ！？ 例えば何やったの？」

魅空

「山下さん家の草むしりから始まり、田中さん家のスズメバチ駆除、里仲さん家のおばあちゃんの荷物運び、島崎さん家の雨漏り直し、後藤さん家の大根を引き抜き、津上さん家の家庭菜園の手入れ、門矢さん家の写真の被写体、紅さん家のバックコーラス、火野さんの明日のパンツ探し、橘さんにスパゲッティを作り、天道さん家に豆腐を届けるエトセトラ」

フヨウ

「男手が無いと大変な仕事だからホントに助かったよ。アレ？今思ったら魅空、人の為に働いてるよね？」

魅空

「任意じゃないじゃん。無理矢理じゃん」

カザリ

「アंकは何やったの？」

アंक

「フヨウの家に侵入したゆっくりれいむを燃やし、ゆっくりまりさを燃やし、ゆっくりありすを燃やし、ゆっくりぱちゆりーを燃やし、ゆっくりちえんを燃やし、ゆっくりみよんを燃やし、ゆっくりれみりやを燃やし、ゆっくりふらんを燃やしエトセトラ。あと魅空同様エトセトラ」

カザリ

「なんでゆっくり大量虐殺してんの!？」

アंक

「フヨウは馬鹿が付くほどのお人好しだ。それがゆっくり達にも伝わって、あいつなら簡単にやれると思っただらしいな。おうち宣言する奴ばっかだった。こいつどんなゆっくりにも優しくするからなあ。でいぶとかしんぐるまざー (笑) とかにも。ゆっくりは調子にのりやすいつてのに」

フヨウ

「いやーゆっくりって可愛いから、私潰す事できなくて。アंकに何とかしてもらってたの」

カザリ

「(あんな奴らが…可愛いだと…!!?)」

フヨウ

「でも二人共私の我儘ばかり聞いてくれて、本当にごめんね?」

カザリ

「でも、捻くれた二人がそうやって願いを聞くのって凄いいよね。そこまでフヨウに惚れてたの (笑)」

魅空

「いや別に……」

アंक

「そんなんじゃない……」

アंक・魅空

「（実は断ろうとするたびフヨウに涙目で泣き付かれたなんて、カザリとこいつには絶対言えない……！！）」

フヨウ

「？」 天然。

例えば欲望が満たされたと感じるツールの一つ、感覚。見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れる。つまり人間の五感。グリード達が見る色はくすんでいます。音は濁っている。君もそろそろ何かを感じている筈です。いや…感じなくなっていると言った方がいいですかbyドクター真木。

魅空

「ガメル！ お菓子は！？」

ガメル

「食べ物！ 美味しいもの……！」

魅空

「けん玉は！？」

ガメル

カザリ

「おい止めるおおおおおお！！ 何食べさせようとしてんの！？
ガメルは一応オスだからねっ！」 星に憑依中

魅空

「今は美少女でしょおおお！？ だから問題無しっ！！ 大人の
階段を二人三脚するだけだから！！」

カザリ

「それが問題なの！！ それが問題だって言ってるの！！ ほらガ
メルも、もう離れなさい！」

ガメル

「いゝやゝ！」 魅空に抱き付く

魅空

「オフウ！！ 俺のマグナムがマスタースパーク」

カザリ

「させるなああああ！！」

魅空

「もう、さつきから何なんだ。お父さん知ってるんだからね！」

カザリ

「誰がお父さんだっ！？」

魅空

「お前このイライラ感からして、あの日の二日目だろ！！」

カザリ (赤面)

「なっ!?!」

魅空

「フハハハハハ！ まさかグリードも、女に憑依すれば生理がくるとはなあ！！ ガメルも言ってたぞ！ 月に一度お腹が痛くなるってなあ！！」

カザリ

「ガアアメルウー!!」

ガメル

「ひう!?!」

魅空

「ハツハツハツ！ ガメルは悪くないぞお！ 正直なのは良いことだ。それに俺は女の生理日がだいたい分かる！（ドヤッ）」

カザリ

「君ってホントに最低だよね!!」

因みにカザリは本当に二日目。

紫のメダルのグリーイドッ!! b y 鴻上会長

アंक

「そういえば……俺達の時代にも居なかったよなあ。紫のグリード」

カザリ

「確かに……アレは最初から黒ずんでたし。そもそも僕らって、なんで幻想郷に居たんだろう?」

ガメル

「みあ、しってる?」

魅空

「んー? そうだなあ、俺も詳しくは……。八雲紫の家に、昔幻想郷を巻き込んだ闘いで使われたロストアイテムが有るって噂を聞いて、忍び込んだら変な石の箱が有ってな。それを弄ってたら、コアメダルが飛び出してきてって感じた。箱に残ってたオーストライバーと、タカ、ライオン、シャチ、カマキリ、バッタ、ゾウ、そして紫のメダル9枚を手にしたんだ。そんなんだから、お前らが幻想郷に来た理由は分かん」

アネク

「結局分らずじまいか、しかし、なんで紫のメダルと緑のメダルのグリードは居ないんだ?」

カザリ

「……………え?」

魅空

「あー確かに。なんで紫と緑のグリード居なかったんだろうなあ?」

カザリ

「え、ちよっ」

ガメル

「うーん……………」

カザリ

「ちよっとガメル。一回グリード皆の名前言ってみて」

ガメル

「え？ えーとね、アंकでしょー、カザリでしょー、俺でー、メズールう？」

アंक

「なんで居ないんだ……？」

カザリ

「（ウヴァの存在が抹消されたああー！！！？）」

ウヴァ

「……………なんで俺の扱い……こんななんだ……」

メズール

「本編に出る予定がまったく無いからでしょ」

紫のグリード

「アッハハハハ！ 無様だねー」

カザリ完全復活！ ……と思いきや。「カザリ君、結局暴走しない君に用はありません。良き終わりを」byギル

カザリ

「なんでだよおおおおおおお！！！！！！！！？　なんでえええええ！！！！？　なんで僕がこんなめいいいい！！！！！！　僕が何をしたって言うんだよおおおおお！！！！！！」

アंक

「（オーズ本編で）　メダルウヴァいまくった。暗躍し過ぎ」

魅空

「俺からカマキリ・コア盗んだ」

カザリ（泣）

「数ある二次創作での僕は不遇な扱いばかりで、魅空にセクハラされたりして大変で、やっと完全復活したと思ったらああああああああああ！！！！　おのれキヨちゃん！！！！！！」

アंक

「キレル相手違うだろ」

魅空

「あーあ、泣いちゃったよ」

カザリ（号泣）

「ぼくだっでびっじにがんばりだのに！！　なじめえええええ！！！！」

アंक

「ろれっ回ってねーよ。びやってなんだよびやって」

魅空

「カザリい、ちょっとニヤーって言ってみ」

カザリ（ガチ泣き）

「にゃあああああああああ！！！！！」

アंक

「ホントに言ったよ。どんだけ消滅した事ショックだったんだよ」

魅空

「おーよちよちカザリたんかわいちょうでちゅねー」 危ない目でカザリに接近

カザリ

「るっづい！！！！」 カザリの右ストレートが冴え渡る！

魅空

「ぱぶう！！！！！！」

アंक

「あー、そこは正常だったか」

魅空へ、自分でこれはきつと思った思い出はある？ b y l y i

ジ（鳴神 ソラさん）

カザリ（復活）

「君みたいな性癖の持ち主が、きつと思ったことあるの？」

魅空

「……………あるっちゃある」

カザリ

「へえ、そうなんだ（笑）興味あるね。教えてよ」

魅空

「……………あれは今から」

フヨウ

「駄目だよ魅空。それは……………駄目だよ」

魅空

「言わなきゃいけないんだフヨウ、止めるな」

フヨウ

「でも、本当に辛い事だったんだよ!? それを……………こんな所で……………」

魅空

「しょうがいだろっ!! このコーナーはこういう事しなきゃいけないんだから! 例え辛くとも、アレが俺の人生で一番きつかった……………それが事実なんだからよ……………」

フヨウ

「でも……………でもでも!」

魅空

「フヨウ! 聞き分けの無いこと言っくんじゃねーよ……………」

フヨウ

「でもお……………」

魅空

「大丈夫だって。いざとなったら、昔みたいに慰めてくれよ?」

カザリ

「うん、なんかごめん。安易に聞いたり、（笑）付けちゃったりして本当にごめん。ごめんなさい」

カザリに質問、楽しいと言う時はどう言う時? b yギル（鳴神 ソラさん）

魅空

「はい来ましたあああ!！ こーゆー時の為にバツタカンドロイドにカザリの楽しそうな動画&画像集を集めといたぜ!」

カザリ

「僕のアレなのになんで魅空が仕切ろうとしてんの!？」

魅空

「お前の事だからちゃんと答えないだろう! だからだよ! まず
はこれ!」

No.1、子猫と戯れるカザリ。

魅空

「見てくださいこのカザリの表情。いつもの不敵な笑みではなく、
頬を紅潮させて瞳をランランと輝かせ子猫と戯れる。まさしく純粹
な少女そのもの。これに萌えない男はいるんでしょうかあ!？」

カザリ（赤面）

「僕の本当の姿を見てみなよ、その萌え直ぐに無くなるから！」

魅空

「続きましてコレ！」

No.2、日向ぼっこしてうとうとしてるカザリ

魅空

「猫は日向ぼっこが好きと言いますが、今のカザリがやると本当にヤヴァい。もう効果音にふにゃーって聞こえそう。ショートパンツからのぞく太股も、ちょいエロを醸し出していてグウートツ！」

カザリ（赤面）

「読者には分からないだろうけど、僕には君がハアハアいつてるの聞こえてかなり恐怖を感じてるんだけど」

No.3。魚を釣るカザリ。

魅空

「魚を釣る」

カザリ

「もーいいよおお！！ もう自分で暴露するよ！ もうこれ以上盗撮されてる真実を知りたくないっ！！」

A・魚が焼き上がる瞬間。理由：美味しいものは待つのも楽しいから。

ガメルに質問、今現在魅空にしたいことは何？ b y タスクさん。

魅空

「ヘイガメル。よっぽど無理じゃなければ、なんでもこいだぜメ
ーン」

ガメル

「うーんと、じゃーねー……かいたいしよーやりたい！」

魅空

「ワツツ？ かいたいしよー？」

ガメル

「うん、かいたいしよー」

魅空

「……………んー、カアザリイ？」

カザリ

「ああ、かいたいしよーって、解体シヨ一の事でしょ。最近ガメル
と一緒に、マグロの解体シヨ一行ったんだよね」

魅空

「なんつーとこに行っただお前ら！？ つーか俺で解体シヨ一？
無理無理ムーリ流石に無理だっただそれ。死ぬから、確実に死から」

ガメル

「だめ？」

魅空

「いや駄目だつて！ 俺でも死ぬるから！ 俺解体して楽しい！？」

ガメル（純粹な笑顔）

「うんー！」

魅空（引きつった笑み）

「楽しくないねー俺は。そもそもやる道具がないねー。諦めてねー」

カザリ（笑顔）

「はい」 メダジャリバーを差し出す

魅空

「なんでお前がジャリ剣持つてんのおおおおお！？ しかも何？ これでやれつてか、これで魅空解体ショーやれつてか。だれが切り分けるんのか！？」

アंक

「俺がやってやる」

魅空

「あん？ なに出しゃばつてんだよ鳥ヤロー」

アंक

「お前みたいな奴に触れるのも嫌だ、仕方なくやってんだ。感謝しろ」

魅空

「あーはいはいアザスアザス」

アंक

「あ？ なにやるか？ あ？」

魅空

「おーやってやんぜ。ちょっと便所来いや」

アंक

「今やったやあここでやったらあ、ああん？ お前なんか5秒でのしたらあ！」

魅空

「こっちは3秒じゃあゴラァ！」

カザリ

「せいっ」

魅空

「むぐ!?!」 IN クロロホロム。

（以下、解体風景）

アंक

「せりゃ」

魅空

「ぎゃあああああああああ……！！！！！！腕が…腕があああああ……！！！！」

カザリ

「うわっ、顔に血がついた……」

ガメル

「ちのうみー！」

魅空

「えちよっ、これくつつく!? 俺の腕くつつくのこれ!?!?!?」

カザリ

「アロン ルファでなんとかなるんじゃない?」

魅空

「なんとかならないiiiiiiii!?!?!」

その後、半グリードである魅空の馬鹿げた回復力と、えーりん先生の手術で一命をとりとめた。

純粋な奴の、純粋なセリフや行動って、怖いんだなあb y 魅空

下着は隠す物。そして水着は……見せる物ナリ！！ by サカキ（前書き）

最初考えたネタがあまり面白くなかった為急遽ネタ変更しました。
申し訳ありません。

そしてフロストさん、申し訳ありません。

下着は隠す物。そして水着は……見せる物ナリ！！ byサカキ

サカキ

「下着ドロボウ？」

鍊矢

「ああ、そつだ。最近女子水泳部から相談があったワケ。先月頃から被害が出てるらしい。そこで善良で人望が有る先生No.1の俺に、頼み込んできたんだよ」

サカキ

「鍊矢よ、多分その相談者はお前の悪魔的なパワーを動物的感で感じ取り、頼っただけだと思うんだが」

鍊矢

「細けえこたあ気にすんなよ」

サカキ

「つーか、うちの学校って女子水泳部、それ以前にプールあったっけ？」

鍊矢

「細けえこたあ気にすんなよ」

サカキ

「そもそも何で俺を呼んだ？」

鍊矢

「そりゃあ、手伝わせる為ですよ。下着ドロボウを御用するために

な。いやな、他にも頼もうかと思ったんだけど、御坂双子は用事があり、淳一は新作マヨ・ネーズの開発、ソラはなんかこう……ヤクザ的ロマン?」

サカキ

「ヤクザ的ロマンってなんだよ。ネタ知ってる人がぎりなく少ないぞ。というか、他にも人居るだろ」

錬矢

「メンドクサカッタ、オケイ?」

サカキ

「ノーオケイ。ユーオンリー、ゴートウプールオケイ?」

錬矢

「ノーノー、ヘイカモン。カモン、カモン!」

サカキ

「ノー! アイドンノー! ユーオンリーゲラウト!」

錬矢

「ノーノーノー……。ヘイルックルック」 自分の唇を指差す

サカキ

「アハン?」

錬矢

「ユー、シャラップ。ユーシャラップ&カモン!」

サカキ

「ノーシャラップ！！ ユークレイジー！！」

錬矢

「ノークレイジー！！ ってかいい加減このノリめんどくせえ！

もういいから一緒にプールへゴー！！」 サカキの腕を無理矢理掴む

サカキ

「アウチ、アウチ！」 掴まれてる自分の腕を指差す

錬矢

「シャーラップツ！！！！」 問答無用に引きずる

*

サカキ・IN・THE・プール

サカキ

「This but teacher! Terrible!」

錬矢

「お前、プールサイド来る迄にどんだけ発音良くなってんの？ ま

あいいや、こちら被害者の1人、真田さん」

真田

「どもです」

サカキ

「ああ。（ウホッ！ 良い太股）」 スクール水着から見える
太股凝視

錬矢

「じゃあ真田さん、このバカにも被害報告よろしく」

サカキ

「お前が説明すればいいじゃん」

錬矢

「メンドイッ！！」

サカキ

「オイコラ、バッド教師コノヤロー」

真田

「アハハハ……。えと、被害が出た始めたのは先月からなんですけど……部活でも可愛いって評判の娘の下着が盗まれ続けてるんですけど、しっかり戸締まりしてるんですが、必ず開けられてしまっ……南
京錠を試してみたりしたんですが、なにか鋭利な刃物で斬られてしま
ったかのように壊されちゃって」

錬矢

「聞いたところ、プロの犯行だな」

サカキ

「下着ドロボウのプロとか」

錬矢

「いや、空き巣のプロかもしれんぞ」

サカキ

「どっちでもいいわ！ ……下着ドロボウを見た奴とかいんの？」

真田

「あつ、チラッと見たって娘がいました。束ねた長い金髪って事しか分からなかったそうですけど……」

錬矢

「情報が少ないな……」

真田

「すみません……あ、そういえば！」

錬矢

「おっ、どした」

真田

「見た娘が、チラツとしか見てないけど、自分の女の部分がアイツは危険だっ！ って告げる様な人だったそうです」

錬矢

「そうか。ふーむ……」

この時、サカキの頭の中である考えが浮かんでいたっ！！

可愛い娘が被害を受けている＝美少女狙い。

美少女好き＋長い金髪＋女が危険を感じる存在＝あの変態。

サカキはかぎりなく答えに近づいた。

錬矢

「うーむ…いつたい誰が……」

サカキ

「おい錬矢。多分犯人分かったぞ」

錬矢

「えっマジか!？」

真田

「ホントですか!？」

サカキ

「ああ、恐らく錬矢も知ってる奴だ。つーかコラボった奴ん中に居たる。ちゃらんぽらんと書いて変態と読む奴が」

錬矢

「……………?」

*

THE 女子更衣室

錬矢

「おい、犯人って誰だよ」

サカキ

「ここまでヒントあって分からない奴はいないだろ。読者も全員分かってるぞ。つーかお前も分かってるだろ、絶対」

錬矢

「ワタシ、ニホンゴワツカリマセン」

サカキ

「ヤツロオ……?」

錬矢

「あつ！ 今あつちから物音がしたぞ！」 急に走りだす

サカキ

「おい待てゴラア!!」

ダツダツダツダツダツ!!

錬矢

「あつ犯人居た!!」

サカキ

「なに!？」

魅空

「あつ」

サカキ

「つてやっぱりお前かいいいい!!!!!! 予想通りにも程があるわ

あ!!!!!!!!」

鍊矢

「くっそー、お前が犯人だったのかー（棒読み）」

サカキ

「棒読みて！ やっぱお前知ってただろっ！！ つーか約1703文字（空白・改行・タグを除く）で犯人発見ってどんだけハイペース！？」

鍊矢

「そっつえばリュウちゃん（リュウガ）から、魅空がまたこっち来たって聞いてたんだっ！」（棒読み）」

サカキ

「確信犯じゃねーか！！ そもそも魅空お前、なんでまた来た！？」

魅空

「美少女がいつぱい居るガッコがあるって聞いて」

サカキ

「確かにうちの学校、何故かいつぱい居るけども！ それは魔法少女の世界だからしょうがないじゃない！」

鍊矢

「まあ最近、魔法少女達あんま出ないけどねっ！」

サカキ

「それいつちやらめえええ！！！」

魅空

「そろーりそろーり…」

サカキ

「おい待て、何逃げようとしてんだ」

魅空

「えーいーじゃん見逃せよう、下着ドロの100件や1000件」

サカキ

「どんだけやってんだあああああ!!!? お前先月からやってんじゃあねーね!?!」

魅空

「ふっ、俺程のレベルになれば1ヶ月で1000件は行ける!! 更には本編、2号の犯行、リバースんとこでやった奴を合わせれば、10000件行ってんじゃね!?!」

錬矢

「よし、警察呼ぼう」 オーガフォンを取り出す

サカキ

「Y A R E」

魅空

「ツッコミはあああ!?! ガチなりアクション止めるよホント!」

サカキ

「いやだって…」

錬矢

「今のはガチで引いた」

魅空

「加減って難しい！」

錬矢

「さてこいつどうする？」

サカキ

「女子達に差し出して体罰って訳にはいかないよな。こいつ悦ぶだけだし」

魅空

「おいちよつと、なんでこれ……ガチな感じなの？　ここあれだよ
ね？　茶番劇場だよな？　コメディなかんじやないのコレ!？」

サカキ

「警察に突き出しても、こいつルン三世の如くプリズンブレイク
しそつだからな……どうすれば」

錬矢

「おつと、そつだ。こんな時の為にリュウちゃんからある物を貰っ
てたんだ。チャラチャツチャー『魅空歴史書』」(ダミ声)「

魅空・サカキ

「なにそれ？」

錬矢

「これはねサカ太くん。魅空のどーでもいゝいゝ過去から恥がしい過去が綴ってある本なんだよ（ダミ声）」

サカキ

「いやもうダミ声のレベルじゃないじゃん。軽くむせてんじゃん。読者には分からないけど、俺には聞こえてるからねしっかりと。つかそんなのあるなら、さっさとだせよ」

錬矢

「まあそう言うなよ。サカキ、魅空を逃げない様に押さえとけ」

サカキ

「ラジャラジャ」 後ろから羽交い締め

魅空

「え、ちよ、こいつ無駄に力強っ!!」

錬矢

「魅空歴史書。著・リュウガ、情報提供・仮面3」

魅空

「おいそれガチじゃねーか!! やめるおおお!!!!」

錬矢

「魅空5歳、この時母親から自分の名前は、母親の師匠的な人の名前から貰ったと教えて貰えたが、魅魔を？みみゃ？としか言えなかった。魅空8歳、初めてフヨウと出逢い、一目惚れする。実はフヨウが二歳年上の為、この時はフヨウねーちゃんと呼んでいた。魅空9歳、オネシヨのシーツをフヨウに見られ、恥ずかしさの為ガチ泣きする。そしてお姉さんのフヨウが慰めてくれた為、ますます惚れ

る。魅空10歳、満を持してフヨウに告白する。しかし、12歳であつたフヨウは魅空のは子供の行動と判断し、「冗談と考える。受け流された魅空はショックで3日引きこもる。魅空11歳」

サカキ

「錬矢ストップ」

魅空

「ん？」

サカキ

「こいつ、途中で絶叫して気絶したぞ」

錬矢

「……マジか」

魅空は自分の過去を暴かれたり、冗談半分に語られる事を極端に嫌います。今回は気絶で済みましたが、やり過ぎると1週間は人前に姿を現しません。気を付けましょう。でも、フヨウが慰めると案外簡単に復活します。しかしそれを冷やかすと、冷やかした奴を本気で殺そうとします。ご注意ください。

この後魅空は、錬矢に脅され下着を返却。その後警察に引き渡されました。

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『うちのギルについてどう思うっ?』 b y マリオ (鳴神 ソラサ
ん)

魅空

「うーん…どうだろうっ?」

カザリ

「なんで? オーズ本編よりましでしょ」

アंक

「どっかで見たとある性格だけだな」

ガメル

「ぶとていらー」

魅空

「いやだって、ギルってアレじゃん。口が、ウル ラマンみたいじ
ゃん。口とかその他諸々ゴツイじゃん。とあるとこのプティラは
ディフォルメされてる感がして読めるけど、ギルにされるとなあ…
…」

カザリ

「君はギルになんかされたのか? ギルを敬遠するような事された
のか?」

魅空

「だってギルって、どう妄想しても美少女に擬人化できねーもん」

アंक

「そんな理由かよっ!」

『内のグリード達についてどう思う?』 b y フォックス (鳴神
ソラさん)

カザリ

「へーいいよね、そっちのグリード集。大変? まだ和やかじゃないか。僕の扱いなんて大変って言葉じゃすまされないよ? このメスの躰にされてから、セクハラされるは、コスプレさせられるはエトセトラ……。一応ガメルとは前より仲良くなったけど、ガメルが魅空にされるかと思うと気が抜けないよ。あーあホント昔に戻りたい……。味覚とか感じなくなるの嫌だけど、魅空にセクハラされるよりマシさ。つか、なんでこの躰耳弱いのか? 耳攻められた日には自殺したくなるよ。もうホントに……」

下着は隠す物。そして水着は……見せる物ナリ！！ byサカキ（後書き）

【宣伝】

『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』

戦国時代で戦った九人目の鬼、その名は逆鬼^{サカキ}。彼は戦国時代で死んだと思い、気付いたら現代に居た！？そこで、逆鬼は少女達と出会う……。現在好評連載中！！

錬矢

「どうよ！（ドヤア）」

詩織

「面白いですねえ。杉田智和さんはどこが見所と思えますか？」

錬矢

「……………」 イメージCV・杉田智和

詩織

「？」

錬矢

「え、何？ そんな感じで行く？」

詩織

「え？ 僕、何か間違ってますか杉田智和さん」

錬矢

「ん、んん？ なに、もしかして怒ってんの？ コラボの時お嬢ちやんって言ったの、まだ怒ってんの！？」

詩織

「杉田智和さんが活躍し、仮面3キャラがコラボした事もある『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』！ 是非どうぞー！」

鍊矢

「詩織さんちょっとおおおおー！！！！」

私の事、覚えてる人って何人いるスかねえ…by若葉(前書き)

今回はオリキャラ+その他キャラの解説? です。

私の事、覚えてる人って何人いるスかねえ… by若葉

月見狼夜ノジヨブ・仮面ライダーヴォルフ

仮面3第一のオリキャラ。それなりに重い過去と、19歳無職ホムレスというそれなりに重い現在を生きている。幼児退行の気有り。最近出番が少ない事を悩んでいる。ゆっくりに囲まれてプチハールム。足が速い事が自慢だけど、それが生かされる描写が少ない。動物に極端に好かれ、人間に極端に嫌われる性質を持っている。しかし、獣に近い感性を持っている詩織や、基本的に何も考えていない将斗とは仲が良い。

時森将斗ノジヨブ・仮面ライダー鎧王

癩癩持ちのオリキャラ二号。時森だからって、烏森に居る境界を張る術者じゃないし、鎧王だからって鎧鋼力服ヨロイスーツを装着する頑駄無とは関係ない。それなりに重い過去を持つ。寝癖多し。最近丸くなつたが、昔は気に入らない奴や面倒な奴を、ガイライナーで引いていた。何故か本編が進むと、片言が酷くなっているが、気のせいではない。最近、赤ん坊がどうやって生まれるか知った。寝ても基本的に夢は見ない。睡眠を邪魔されると、邪魔した奴をガイライナーで引こうとする。

メルカバノジヨブ・イマジン

ピーコックイマジンであり、歩く常識バイブル。作品中一番の苦勞人。最近、将斗がコラボしてからマヨラーに目覚めかけていたり、リュウガ関係でストレスが溜まり、羽根が生えてる部分に10円禿げが出来た事にショックを受けた。ストレスを発散させる為にカラ

オケボックスによく行く。最近ストレスのせいもあり、よくキレる。キレた時は口調が乱暴になる。将斗との契約は簡単に言っと、『ずっと傍に居て話し相手になる事』という、軽くBLじみたものである。将斗の父親的存在であり、母親的な存在。

ゴクウノジョブ・モンキーイマジン

最近コラボで将斗に憑いたイマジン。サル、お調子者、前田慶。あとは特に無しという、不遇なキャラ。モチーフは西遊記の孫悟空。

楯神詩織ノジョブ・仮面ライダーリオン

それなりに重い過去を持つキャラ三号。出番が結構多くて天狗に成ってる。ガイアメモリを使って直ぐラリる。狂気の仮面ライダー。って曲が作れそうなキャラ。

りおんの ふくがんのいろが かわった。ざんさつほんのう はつ どう！

的な仮面ライダー。本能を武器にするという、厨二臭溢れる存在。というか仮面3キャラは大抵厨二病やDQNネーム。フーかDQNって、新作のドラクエかと思ってた。ドラゴンクエストネクスト的なの？ 話がそれた。過去に仮面ライダーWとアクセルに敗北した事がある。基本的にツツコミ、ボケをすると止まらなくなるからツツコミをするけど、ボケをかます日は必ず来る。そう、必ずね……フフ……。『恐怖を感じさせる程度の能力』という能力を持つてるが、最近オリ主人公の東方の小説を見て、やっべこれ被ってんじやん！？ と作者は焦った。でもパクったワケでもないし、あんま使わないから大丈夫だよな。

リュウガ (本名・ミ???.???) / ジョブ・仮面ライダー
リュウガ&暗黒龍騎士自宅警備員

まだ証されてないが、それなりに重い過去を持つオリキャラ零号。
愛すべきオールマイティな HENTAI、SM、百合、縛りプレイ、どんとこい。愛読書は『どんとこい超常現象』。何故ベストを尽くさない！実は現在の様な性癖や強い性欲はある事件をきっかけに、自己暗示をして得た。自称ナイスバディ。応用力と、脳的にも肉体的にも記憶力が良く、戦闘術等は直ぐ覚え我が物とした。まともな勉強は16歳から初め、持ち前の記憶力と応用力で現在19歳ではライダーシステムに近い物も開発できる様になった。……とハイスペックなリュウガだが、色々子供っぽく引き籠もり思考である。

Q・何故働きたくないんですか？

リュウガ

「えつとお、働いたら負けかなって思ってるんで、はい。負けたくない……負けたくないんだ！ 私は！！」

言い訳乙。

魅空 (本名・霧雨魅空) / ジョブ・仮面ライダーオーズ&変態戦士

魔法が使えない落ちこぼれの魔法使い。フルネームで呼ばれるときれる。昔いじめられていた。憎まれる変態であり、リュウガと双壁をなしているが、リュウガとは犬と猿な仲。今一番食べたい物はフグ鯨。ノリが軽く美少女or美女大好きで、セクハラなどよくする変態。だが、本性は腹黒くコアメダルを使って幻想郷を破壊しよ

うと目論む。しかし発言やしよつとしてる事で、読者に小物臭がすると言われて久し振りに凹んだ。基本的にボケ担当だが、周りにツッコミが居ないと不遇ツッコミな立場に変わる。美少女or美女相手ならSとMどちらもいける。リュウガとは仲が悪いが、オリキヤラ達の中では唯一リュウガの本名を知っている。リュウガの本名を知っているのは、紫、藍、幽々子、魅空、あとフロストさんとの鍊矢だけである。過去を暴かれたりするのを嫌い、やり過ぎると1週間人前に現れなくなる。なので鍊矢はある意味トラウマ。下ネタ関係ばかり口に出しているが、実際男女の営みをしたのは一回だけである。最近の悩みはカザリをどう落とすか。基本的にグリードはガメル以外、魅空の事を毛嫌いしてる。因みにに現在の好感度（MAX10）

・アंक × 0

・ウヴァ × 0

・カザリ × 3

・ガメル × 10

・メズール × 0

と、カザリもあと一押しで恐らく落ちるだろう。

フヨウ・マーガトロイド/ジョブ・仮面ライダーバース（詳しくはアंक）

おっとり系で人助けが生き甲斐な娘。実は22歳で魅空より2歳年上。魅空が悪玉なら、フヨウは善玉。アングの憑依先で、昔からの付き合い。アングとの出会いは、魅空が封印を解いて飛び散ったコアメダルの、アングの意志が有るタカ・コアがたまたまフヨウの中に入った為。結構勢いよく入った為、少しの間痛みで苦しんだ。唯一アングをコントロールできる存在である。アングも最初フヨウを疎んであったが、メダルが集まり躰が構成できる様になってフヨウの躰を抜けても、彼女の事を心配していた。そんなワケで結構良い仲であるフヨウ×アングであるが、魅空がアングに嫉妬し仲が悪くなったのはこのせいである。昔フヨウは魅空と付き合いっており、男女の仲にまでなった事がある。魅空も好きだが、アングも好き。好きなゲームは魅空に教えてもらったオセロ。

犬崎若葉ノジョブ・白狼天狗&仮面ライダーブレイド

盲目だが、能力によって？視れる？人。オリキャラで一番出番が少ない悲しい娘。重い過去や初登場が好評であったり、短編で過去まで描かれたのに出番が少ない虚しい娘。作者に関しては『こいつ何歳って設定だっけ？』状態なので、年齢が定まっていな哀しい娘。身体的特徴は、長い白髪、犬耳、巨乳、尻尾、伸長高め。性感帯は犬耳。触られると喘ぎ声を出して立てなくなるといふ、隠れたエロ要員。出番はもう少しで来るのに、龍騎本編が更新ストップ中の為出番が遠い。タイトルの様に一体何人が覚えているのか、予想できない。最近欲しい物は、深夜特撮で出ていたくすんだ銀色の喋る魔導輪。

キバットバット・ルネサンスノジョブ・厨二病の鎧の管理者。

破壊神でありながら恵みを与える神の名を持つ鎧、シヴァの鎧を管

理する者。通称ルネ。キバットバット・ルネサンスは海東大樹が適当に付けた名前。シヴァやルネは再生（ルネサンス）と破壊と創造を司る。シヴァは作者が中二の頃、テスト中に暇だったからテスト用紙に描いて生まれた。なので厨二病全開。あれはなかなか力作だった……。

他にも居た様な気がするけど、龍騎おしまい。次は歌舞鬼言ってみよう。

カブキノジヨブ・音撃戦士歌舞鬼&主夫

オリキャラじゃないけど、もうオリキャラっていつても許されるんじゃないかなと思う程、キャラ崩壊。みよんな理由で幻想郷に来てヒモ生活。最近、子供達から『プーた：カブキさん』と呼ばれてガチで凹んだ。ヒモ生活の中で知ったが、縫い物や洗い物等の家事スベックが高い。現代の漫画文化にどっぷりはまり、最近オタク化。技の名前も厨二病っぽくなってきた。SD武者ガンダムや、男組、魁男塾、北斗の拳等の熱血系が好き。逆に萌え漫画等を毛嫌いしている。幻想郷に来て軽くモテている為困惑しているが、悪い気はしておらず優越感に浸っている。魅空2号、射命丸は相手にすると疲れるからあまり相手にしたくない。妹紅のさりげないエロが、カブキの心のオアシス。

黒文字掩樹ノジヨブ・カブキの弟子

ぶつちやけ小説ならどこにでもいる少年。強くなりた理由も単純。唯一の特色は『生み出される運命（フラグ・メーカー）』。たまにどうでもいいフラグから、命に関わるフラグまで乱立させる日がある。魅空2号の数少ない親友。

雨崎魅空ノジョブ・オープン変態戦士&魅空2号

殆ど魅空と同じ。違うところは18歳、一回り小さい、腹黒くない。友達が少ないが女友達（魔理沙・美鈴）が二人居る事が救いである。バレンタインチョコは掩樹のお情けでしかもらった事がない。完全なポケ担当で、どこにでも現れる。今の願いは『純粹に一回、慧音のパイオツを揉んでみたい』である。

櫛ノジョブ・不思議ちゃん

一人称が定まっていない不思議ちゃん。掩樹が彼女の名付け親である。なかなかワイルド。これ以上はネタバレになるのであまり言えないが、話が進めば掩樹とゲフンゲフン。実はカブキと関わりがある、オッドアイの色がヒント。

おばちゃん（世紀末子）ノジョブ・オリキャラ最強

オリキャラ最強なおばちゃん。セキハンとジョージの師匠。

セキハン（米倉赤音）ノジョブ・ラジオ（笑）のポケ担当

オリキャラ二番目に最強。趣味は家庭菜園。悩みはツルペタと低いしんちよ……うわっ何をやるやめっ。赤い髪は染めていない、アニメとかによくある地毛である。運動能力が高く、流しで100Mを7秒26で走れる化け物。男口調と男勝りな性格だが、小動物が好き。動揺すると限りなく分かりやすく、やり過ぎると口調が変わる。実は素の口調がそれであり、今の口調は昔父親にツルペタをからかわれ女らしくないと言われた為、男口調になった。母親が父親のせいで出ていった過去がある為、父親に厳しい。

ハクマイ (米倉飯純) / ジョブ・ラジオ (笑) の不遇ツツ
コミ

赤音の双子の弟。こっちは白髪。名前はタスクさんから頂いた物を採用。いや最初は、フロストさんのを採用しようかと思ったんだ、実際面白かったし。でも、タスクさんのに凄く惹かれたんだ。こんな作者でごめんなさい。洞察力の高さと、ご飯を美味しく炊けるのが自慢。家庭の家事担当。双子の赤音に顔が似ている為女顔。さらに、肩まである白髪の前髪を上げて結んでいるので、ますます女っぽく見える。この髪型をしているのは、出ていった母親が好きであったからこうしている。父親にはしっかりして欲しいと思っている。

ジョージ・ホーリングノジョブ・魅空の同類

グラスンスーツスキンヘッド。魅空の同類だけで説明が終わる。どっちかというと、ボイン好き。常にカタカナ言葉だから、作者も読者も読みにくい。禿げと言われると凹む。グラスンを外すと本気モードになり、普通に喋れる。銃やトラップを得意としており、最近のお気に入りには回転式拳銃の S & a m p ; W M 5 0 0 である。

そのうち出るキャラ (主にレッツゴー) 名前だけ発表。

カラスノジョブ・カブキの相棒。こいつは歌舞鬼に出る為、レッツゴーの出演が遅れる

河城こめりノジョブ・にとりの親戚河童

荒川重雄ノジョブ・戦場のカリスマ

米倉虎代ノジョブ・コダイマイ親父

段々増える予定。

【番外編】

仮面3ノジョブ・カオスメーカー

毎度お馴染み、カオスな世界を生み出すお馬鹿さん。好きな小説の種類は、仮面ライダー、コメディ、熱くなれる、シリアスの中にほがらかさあり、バッドエンド。嫌いな小説、転生最強主人公、主人公やりたい放題、主人公に？弱さ？が無い、中途半端な？弱さ？は逆にいらぬ、無駄なチート。因みにうちのカブキはネタバレになるけど、転生したわけでも詳しくは生き返ったわけでもない。

仮面ライダー好きっていったけど、オリジナルライダーで主人公クルール（笑）なのは嫌い。仮面ライダーは泥臭さの中に格好良さを見いだすもんでしょ！ オリジナルライダーで良い例を上げるとすれば、逆鬼とかリバス。特にライダーシステムすらオリジナルであるリバスは良い！ 改造人間、熱くなれる、2号ライダーとの関係、過去の敵との共闘！ これこそ仮面ライダー！！ 主人公気取ってないのが好感もてるし。最近のなるうの仮面ライダーは、カッコいい（笑） ライダーばかりだと言うのに流石だぜ。最近伸びを感じる作者さんは、ベルトさんや竜王の白翼さんとかかな……。1話から連続で見れば、本当に文章力が上がってると思う。最後に、最近の悩みは体重の変動が激しい事。クソツ……：体重増えにくいのに……。

というわけで、これからも宜しく御願います！

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『最近キヨちゃんが可愛くて仕方ないんだけど共感する人いる？』
by 竜王の白翼さん

魅空

「ほーらガメルー、キヨちゃんだぞー」

ガメル（泣き）

「びええええん！！！！ 怖いいい！ 主に顔と謎のポージングが怖いいい！！」

魅空

「ほーらカザリー、キヨちゃんだぞー」

カザリ

「ちよつとそれ近付けないでよ！ ちよつとしたトラウマなんだから！！！」

魅空

「ほーらフヨウ、キヨちゃんだぞー」

フヨウ

「え…えつと…うーんと…あつ！ 個性的！ 個性的な顔だね！」

魅空

「ほら、クソ鳥。キヨちゃんだコノヤロー」

アंक

「失せる羽虫」

魅空

「（^ ^ #）ビキビキ、うーむ……なんで皆嫌がるんだろうなあ。結構愛嬌ある顔してるのに、なーキヨちゃん」

キヨちゃん

「しょうがないよ、私の顔万人受けしないもの。でも嬉しいわ。貴方がそういつてくれるだけで……」

魅空

「なんか照れるぜ」

アंक・カザリ・ガメル・フヨウ

「（しゃ…喋ったああー！！！！！！！？ キヨちゃん喋ったああー！！！！！！？）」

『そっちの俺は魅空がない時どうしてるの？』byガメル（鳴神 ソラさん）

ガメル

「お菓子買いに行くんだー」

魅空

「俺が金やってな。つーか行方不明者の躰使ってるから、あんま出歩いて欲しくないんだけど」

『俺達がそれぞれのコンボに変身出来る＋黒狼が前、魅空が狙って

いたフロストの所の悪魔系コンボになれると聞いたらどう思うっ？」
byウヴァ (鳴神 ソラさん)

魅空

「うーん……すげえって思うし、コンチクショーっても思うけど、俺の目的ってコアメダル集める事であって、コンボをしたってわけじゃねーのよ。つか俺って、コンボの耐性弱いし。昔慣れてない頃なんて、コンボ使ったら3日寝込んだし。今だって約4分ぐらいしか耐えられねーよ。コンボ使った後、大抵気絶するし。あいつのメダルだって、かなり強いみたいだから使ったらどうなるか。俺ってばコアメダルに嫌われてんだワ」

5人そろって！ カメンジャイ！！ b y ヴォルフ（前書き）

やあ、つい先日色々あって左手が血で真っ赤にそまりヌルヌルになった、仮面3だよ！

前口上をちょっと変えてみました。因みに前口上は全部実話です。今までのも今回も。ヌルヌルするほど血を出すのは2年ぶりです。性格が丸くなってからアレするのはホントに久しぶりゲフンゲフン。

今回はゴレンジャイパロディ……なのか？

5人そろって！ カメンジャイ！！ b y ヴォルフ

犬崎自宅

若葉

「あー今日も疲れた。ま、出番なんて全くないんだけどねー」

魅空

「オコンバンワー」 デイフォルメした髑髏のお面装備。

若葉

「ひいいいいい！！？ な…なんなんスカ！？」

魅空

「ちよいちよい待て待て待て待てえ！ 今回違うから、そーゆんじやないから。俺が女性キャラからそんな眼で見られてるのは分かってるから、落ち着けもちつけ」

若葉

「いや無理っス！」 盾と剣装備

魅空

「落ち着け、落ち着けって、な？ 確かに若葉ちゃん見るたび、『あーあの巨乳揉みしだきてーなあー』って思ってるけど、今は落ち着いてくれ」

若葉

「開始早々二百数十文字でセクハラ発言した人が家に居て、どう落ち着けと！？」

魅空

「いやホントに！今日は営業できたから。そーゆーやらしい事じゃないか。この眼を見てみ。これがいつもの、俺の濁った眼じゃないっしょ？」キラキラ

若葉

「ぶっっちゃけ気持ち悪いです」

魅空

「それでもいいから落ち着いて。ほら、ろくなところじゃないけど座って落ち着こ、な？」

若葉

「ここ私の家なんすけど……？それで、営業ってなんすか？」
それでも取り敢えず座る

魅空

「いやね、ゴレン ヤイってコントあんじゃない。今回そのパロディイネタでさ」

若葉

「はあ……」

魅空

「ところで若葉ちゃん」

若葉

「はい」

魅空

「若葉ちゃんってバージン？」

若葉

「ぶっ！！！？ ななななな、なにいつてんスカ！？」

魅空

「どっち？ したことあるの？ ないの？」

若葉

「……………そ、そりゃあ……………無いです…」（小言）

魅空

「ほう……………」 眼がギラーンと輝く

若葉

「へ？」

魅空

「ならばそのバージン、私がいただく！！」 ルパンダイブ

若葉

「わわわっ！？ 急になんスカ！？ 予想はしてましたけども！！」

緊急回避

魅空

「フハハハ！ 私の名前は鬮體お面。今日からお前は営業の関係で、私のセレになるのだあ！！」 ジリジリと接近

若葉

「ちょ、やっぱり!? 誰かああ!! 助けてえええ!!」

魅空

「フハハハ! そう都合よく助けなどが……」

????

「まてえーい!!」

魅空・若葉

「!?!」

ヴォルフ

「仮面ライダー! ヴォルフ!!」

リオン

「仮面ライダー! リオン!!」

鎧王

「……………いだっ……………」 転んだ

歌舞鬼

「音撃戦士! 歌舞鬼!!」

掩樹

「木!!」

ヴォルフ

「5人そろって!!」

ヴォルフ・リオン・鎧王・歌舞鬼・掩樹

「カメンジャイ！！！！」

ヴォルフ

「さあお嬢さん！！ 早く逃げるんだ！！」

若葉

「……………え……………ええ……………？」

ヴォルフ

「早く逃げるんだあ！！」

若葉

「あの、警察呼んでいいですか？ 今私の家に、約6人の仮装集団が居るんで」

ヴォルフ

「早く！ 早く逃げる」

若葉

「……………」

ヴォルフ

「……………もうなんだよ！ ノリ悪いなあ。今回ゴレン ヤイパロディだからって、久々に変身したってのに一気にサゲばよくなんだけど」

若葉

「狼夜さん、本編ストップ中にだいぶチャラくなりましたっスね」

ヴォルフ

鎧王

「いだっ」 蹴られた

魅空

「んで？ 掩樹、お前なに？ なに木つて。ゴレン ヤイらしく変な格好しようつてか？」

掩樹

「はい！ 自分なりに全力でやりました！ 全力でやりましたっ！
！ 全力でやりましたっ！！！！」 大事な事なので三回言った

魅空

「おかしいと思えよ。みんな仮装、いやコスプレパーティーみたいになってんのにお前だけ小学校の演劇みたいんだけど。お前だけ人間の役をもらえなかったのに全力で取り組む健気な子、みたいなんだけど。っーかその木の着ぐるみ自前？」

掩樹

「徹夜で作りました！ 朝の8時から、翌日の朝8時にできました！！！」

魅空

「丸一日かかるってどういう事？ っーかお前いつから、全力少年になった？ どー思う若葉ちゃん」

若葉

「私ならアレ、2時間弱で作れると思います」

魅空

「だよ。思いの外低クオリティな事に俺と若葉ちゃんと読者の皆様に謝れ」

掩樹

「すみませんでしたあっ！！！！」 全力木土下座

魅空

「で、リオンこと詩織さんよお。基本ツツコミのオメエーが、なんでツツコミを入れずコイツラと一緒に来た？」

リオン

「……だって狼夜が『イけるイけるチヨイけるって！』、将斗が『頭……空っぽにし……てい……こ』掩樹さんが『頑張って木作ったからお披露目したいんだ！』カブキさんが『俺にボケる場を提供してくれ！ 50ルピー上げるから！』って連続で行って来るから……」

魅空

「つまり周りの奴らに流されたと。50ルピーで何買った？」

リオン

「……デクの盾を……」

魅空

「このヴァカチンが！！ そこはルピー貯めてハイラルの盾買えよ！！」

若葉

「そこ！？ ここハイラルじゃないからどっちも売ってないっすよ！！」

魅空

「まあ盾のアレは置いて、お前なんだよ。ツッコミはアレだぞ。ボケの場を何気に支配し誘導する大切にな立場なんだよ。それを前、放棄するとか……若葉ちゃんコイツどー思う？」

若葉

「責任能力の無い無価値野郎だと思うっス」 家にズカズカ入られて苛々してる

リオン

「そこまで言わなくても」

魅空・若葉

「黙れよ。エセライオン野郎」 詩織ことリオンの全てを見下す眼

リオン

「……………」ごめんなさい」 ちよつと涙声

魅空

「おいお前ら。今回はこの後オー・Sの収録あるからこれで勘弁してやつけどよ、次こんなだったらアレだからな？ 知り合いの別作品ライダー全員からライダーキックだぞ分かったか？ あー！ あー！ 久しぶりの悪役だったから気合い入れてたのになあー！ テンション下がるなあー！ かー、ぺっ！」 ヴォルフに唾を吐きかけた

ヴォルフ・リオン・鎧王・掩樹

「はい……………」

若葉

「だったらさっさと出てっつてくれませんか？ 空気が汚染されますから」

ヴォルフ

「ちよっ！？ それ酷い！！」

リオン

「僕らだって読者さんを笑わせようと必死でぶっ！」 若葉にマスクを掴まれた。そしてメキメキと力を込められる

若葉

「喋らないでくれます？ その舌ひっこ抜いて塩焼きにした後、牛タンと入れ替えて濃硫酸を飲ませますよ？ 因みにひっこ抜いた舌は貴方が食べるなりして処理して下さいね。捨てたら地球に悪いですから」 本格的に苛々

リオン

「……………ずびません」 もう泣いた

若葉

「喋るなって日本語、理解できません？ 喋るなって言ってるんですよ」 リオンのマスクに罅を入れた

リオン

「……………（泣）」

魅空

「じゃ、もう俺行くわ。今回は仕事関係であんな事しちゃったけど、

悪かったな」

若葉

「いえいえ、ある意味仕事ですから。お疲れ様でしたー」

歌舞鬼

「ちよいちよいちよいちよい！　ちよっと待って下さいよー！　俺
いじって無いじゃないすかー！！　ノーツッコミ酷いっす」

若葉

「ウザいきモい」

歌舞鬼

「そりゃ無いっすよ！　もっとこつ色々なツッコミが」

若葉

「主に全てがウザいきモい」

魅空

「お前ボケたいって言うてるけどさあ、ぶっちゃけツマンネーよ。
下手くそなんだよ。感想で面白いって言われたのはお前じゃねーか
ら、雰囲気だから。勘違いしてチョーシに乗ってるとかマジキモい
ワ」

歌舞鬼

「……………すみません。生きててすみません」

その後カメンジャイ達は追い出され、魅空は別の営業に向かい、若
葉は部屋の除菌に使いきったファブリーズを買いに行った。

ヴォルフ

「…若葉ってあんなキャラだっけ」 遠い眼

リオン

「知らないよ。……もう、出来ればあの娘と関わりたくない」 無意味な願いである

鎧王

「……………（ガタガタ」 本編で若葉と関わりを持つので色々と危惧している

掩樹

「もつと時間を掛ければよかったのか…！」 着ぐるみを握り締めて

歌舞鬼

「そっかあ…ポケダメかあ……………（ホロリ）」

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『僕へ、あの日や魅空関連以外で苦勞している事はある？』byカザリ（鳴神 ソラさん）

カザリ（赤面）

「お願いだからあの日とか言わないでえ…！」

魅空

「んで、苦勞してる事あんの？」

カザリ

「うーん……服の調達とかかな」

魅空

「あ？　なんでヨ」

カザリ

「僕の着てる服って、幻想郷で手に入りにくいじゃない。だからそういう販売ってる店リサーチしたり、誰よりも早く手に入れたり」

魅空

「へー、面白くない苦労だね！」

カザリ

「面白くない苦労がどれだけ幸せか、君には分かんないだろうね！」

『こつちにしかないコンボがあると聞いたらどうする？』 b y ア
ン
ク（鳴神 ソラ）

魅空

「俺の欲望を叶える為、コアメダルは大切なピース。コンボあるとこ
ろにコアメダル有り！　エロスとコアメダルあるところに魅空の
称号を持つ者は現れる！！　つまりコアメダルあるところに俺有り
！！　別作品という壁を越えて俺参上！！　フハハハハ、H E N T
A I に不可能は無いのですよ、カザリントン君！！！」

カザリ

「カザリントン君って誰？　ワトソンなの？　僕でありワトソン君
なの？　あと迷惑という言葉を辞書で調べて赤ペンで目印つけて、

そのページに折り目をつけとけなさい」

『魅空へ質問です。リボルケインを装備したヤンデレガメルと、嫌いじゃないわ状態の泉京水。迫られるならどちらがいい？』byタスクさん

魅空

「なん……だと…？ なんてあの人、リバースの作風では考えられないエグイ質問してくるんだ！？ いやおいしい質問だけでも！ え、リボルケイン！？ リボルケインってアレだろ、リボルクラッシュって技がアレ過ぎて外国版では変えられた武器じゃねーかあ！ おまつ、そんな危険な武器をヤンデレガメルに装備させるとかどんな鬼畜だよ！ タスクさんちよつと仮面3の過去の活動報告を読み直してきなさい、ヤンデレガメルいっから。仮面3のヤンデレ知識薄いのによっちゃったから、ただの危ない奴になったヤンデレガメル居っから！！ それに京水ってあいつだろ、ベルトさんの作品に似た奴いたから知ってけど、ぶっちゃけ天敵みたいな奴だよあいつううう！！」

ヤンデレガメル

「みあー、どこー？」ヤンデレ眼でリボルケインを引き摺る

京水

「美少女好きのどうしようもない残念イケメン？ そんなんでも嫌いじゃないわ！ 私の愛を分けてあげちゃう！！」

魅空

「ぎゃあああああ！！ マジもんきたあああ！！ 俺はまだ社会的に死にたくないいい！！」 社会的に生きる為に逃走ダッシュ

京水

「逃がさなくってよ!!」

《Luna!》

ルナ・ドーパント

「えいつ!!」

魅空

「止めるお離せええ!! 俺はガチムチホモにアツー される事も、ヤンデレガメルに愛毒で死ぬ事も望んでいないっ!」 捕獲

ヤンデレガメル

「なんで逃げる? そっかあ、その足だ。その足が悪いんだ。俺からみあを遠ざけるその悪い足……切っちゃおっか」 リボルケインを構える

ルナ・ドーパント

「私が抱き締めてあげる。そしてイケメンエキスを吸い付くしちゃうっ!」

魅空

「いやあああ!! ツーかりボルケインは切る武器じゃねーよ!」

その時魅空にふしぎなことがあった。

魅空の頭のなかに、今まで楽しいと感じた数少ない記憶が巡ったのだった。

魅空

「いやそれ死亡フラグ!!」

ルナ・ドーパント

「いやもいやも好きのうち！ 分かってるわ、貴方ったらツンデレねえ。でも嫌いじゃないわ！」

魅空

「己はゆっくりありますか!？」

その時魅空にふしぎなことがおこった。

ふと頭が真っ白になり、目の前にカザリが立っていた。そのカザリは表情は、今までに見せたことのない優しく愛らしい、少女の笑みであった。そして『不遇ざまあwww』と。

魅空

「こんな時に人の頭ん中出てきて馬鹿にするとか!!」

A・どつちも嫌。できればデレデレカザリor甘えん坊カザリorツンデレカザリか、ノーマルガメル、ノーマルフヨウに迫りたい。分かったらこんな質問したタスクさん、廊下に立ってなさい。じゃなければ女性キャラをペロペロしに行くぞコノヤローby魅空

5人そろって！ カメンジャイ！！ byヴォルフ（後書き）

はい、ゴレンジャイパロディと見せかけて、若葉と魅空がキャラ達にダメ出しをする話でした。若葉は本当はあんなキャラじゃないんだ。本当はもつところ、無駄な努力を続ける可哀想な娘なんだ。どうしてこうなった！？

あつ、ちよつとしたアンケートをしようと思います。その名も『現実に住たら絶対嫌だわこいつ、だから不人気投票しようぜ！』くルールは簡単。1人の読者様に5ポイント差し上げます。そのポイントを仮面3のキャラ（見てるならいいけど、現実に居たら絶対嫌だ、近づかないでくれと思う奴）に振り分けてください。

例）

魅空・2ポイント

リュウガ・1ポイント

仮面3・2ポイント

の様に感想に書いて頂ければ嬉しいです。できる方は理由等もお手数ですが宜しくお願いします。因みにランキング上位3位に入った者は三回に分けて……

若葉に罵倒されます。

では次回も宜しく御願います！

セリフのちょい足しって結構難しいb yアंक(前書き)

今回はセリフのちょい足しに挑戦。面白い回答かどうかはわかりませんが頑張りました。そしてタスクさん、ご許可ありがとうございました！

セリフのちょい足しって結構難しいb yアंक

魅空

「おーい、お前等集まったかあ」

カザリ

「今回はなに？ 急に呼び出して」

ガメル

「？」

アंक

「何故俺なんだ……」

魅空

「よし、鳥ヤロー含めて全員そろったな。今回は集まってもらったのは、アレだ。セリフのちょい足しに挑戦してもらおう」

カザリ

「ちょい足しって……あの深夜番組にあるコーナー的な？」

魅空

「そのとおーり！ 今回のお題はコレ！ タスクさん著『仮面ライダー リバース』！ 完結おめでとございますー！」

アंक

「やるって言うってねえだろ。馬鹿か？」

魅空

「黙れ鳥頭」

アング

「黙れ変態行動に定評のある変態」

カザリ

「というか許可取ったの？ 無許可だったら良くてID抹消、悪くて訴えられるよ？ 作者学生だから、訴えられたらソッコイ負けるよ？」

魅空

「大丈夫。ちゃんと許可とったし、ID抹消されても直ぐ仮面3R（かめんさんりたくん）で帰ってくるから。オラやるぞゴラー！」

ガメル

「おー！」

カザリ・アング

「（やるって言ってねえ……）」

魅空

「まずはコレ！ 『俺は災いを押し返す者、仮面ライダーリバーズッ！』。これはリバーズライダーの代名詞とも言えるセリフの一部だ。これにちよい足ししなさい」 フィリップを配る。ただし、アングには投げつける

アング

「甘いっ！」 ナイスキャッチ！

魅空

「ちっ！」

カザリ

「でもさあ、いきなりやれって言われてもなあ。手本なんかやってよ」

ガメル

「俺も分らない」

魅空

「欲しがりだね。グイグイ来るねえ」

魅空・ガメル

「グイグイ！」 同タイミングで両手を縦に振る

カザリ

「練習したと思うほど息ピッタリ！」

魅空

「まあいいか、やってやるよ。例えば……『俺は災いを押し返す者、仮面ライダーリバーズッ！』 まず災いを押し返す為に政治世界に飛び込もうと思う！』」

カザリ・アंक

「なぜそう思ったし!？」

カザリ

「なんでそうなった!? 押し返すなら災い (敵) と闘えばいいじゃないか！」

魅空

「いやね、政治世界からアプローチして、圧力を…」

アング

「社会的に抹殺するつもりか!? 権力を使って敵を倒す仮面ライダーって、斬新すぎるわああ!!」

魅空

「とまあ、こんな感じにツッコミくる答えができれば、挙手しましょう」

ガメル

「はい! はいはい!」

魅空

「お、早いねえ。ではガメル!」

ガメル

「はあくい。えつと…『俺は災いを押し返す者、仮面ライダーバースツ!! 災いをもたらす者よ…お前は、腰を千切れる寸前まで捻ったあと逆に捻り、爪の間に針を合計32本挿入し、一時間に二本つつ骨を砕き、痛点を麻痺させながら目の前で自分の皮を剥ぎ、肉を裂いて持ち主に無理矢理喰わせて、ここまできたら死にかけてるだろうから一旦回復させてから、顔に注射器で食用油を注入、それから』」

魅空

「はい自主規制」

ガメル

「え〜！？ なんで!？」

魅空

「えーとねガメル。こんなやり方で敵を倒すヒーローは、ダークヒーローでもかなりレアだよ。実際リバーズでやってみ、多分別の小説になるから」

カザリ

「やったら色んな感想来て大変な事になりそうだね」

ガメル

「普通なんだけどなあ…」

アング

「こいつってこんな奴だったか？」

カザリ

「純粹無垢と書いて残忍と読む」

アング

「純粹無垢（残忍） ってか？」

魅空

「とある猛獣王（ガメル）の純粹無垢（残忍ヤンデレ）。
おお、怖い怖い。さて次はないか次！」

カザリ

「はい」

魅空

「おっ、意外にカザリか。どんなん？」

カザリ

「『俺は災いを押し返す者、仮面ライダーリバーズッ！！ こんな三角関係は災いしか呼ばない！ だから君！ 早く彼女らのどちらかを選んでやるんだ！ 早くしなければスクール イズみたいになるぞー！！』」

アंक・魅空

「どーゆー状況だ！？」

カザリ

「こーゆー状況だ！！」

男 鈍感

女1 鈍感男に惚れている。 ややツンデレ

女2 鈍感男に惚れている。 お嬢様で初恋愛

カザリ

「僕はハーレムなんて認めない！ 男と女、一対一で恋愛し、ぶつかりあったりして愛を育むべきだ！！」

魅空

「意外とロマンチストなのね！！」

カザリ

「だってそつだろう！？ 今の男や女は恋愛を甘く見過ぎている！

女だってロマンチックな恋愛したいとか言いながら、がつつり金とか顔で選んでるじゃないか!? 男は交尾の事ばかり考えてるし! そういう仕組みなのは分かってるさ!!! だけでも、甘さと苦さ、どちらも経験して二人で乗り越えていくのが恋愛だと思うんだ僕は!!!」

アंक

「カザリも変わったなあ……」

魅空

「ああ、乙女思考になってる……。つーかアंक、お前は？」

アंक

「……………」

魅空

「おいこっち見れや」

アंक

「フック」 魅空の顔面目がけ右フック

魅空

「うおっ!? いきなりなにしやがんだ!」 緊急回避

アंक

「……………」 また視線をそらす

魅空

「いきなり攻撃しやがって何すんだ!? お前それ、フヨウの躰だから反撃できねえんだぞ!!! つーか目を逸らすな!」

アंक

「 躰を左右に揺らす

魅空

「 な、なんだよ?」 合わせる様に躰を揺らす

アंक

「 ハアツ!」 フェイントをかけてダツシユ

魅空

「 なぜ逃げる!?!」 捕まえようとタツクル

アंक

「 トウツ」 それを馬跳びの要領で回避。そのままダツシユ

魅空

「 あゝクソツ! 逃げられた!! なんなんだあいつ!」

カザリ

「 今までにないくらいキレのある動きだった!」

魅空

「 何故逃げたし」

ガメル

「 ねーねー」 魅空の服の裾を引っ張る

魅空

「 ん? なに?」

ガメル

「これ」 アンクのフィリップを渡す

魅空

「なんでえ、あいつちゃんと答え書いてんじゃ……あつ違う！ これ愚痴だ！！」

アンク

『クソツ……なんでガメルやカザリはあんな早く思いつくんだ……。俺は災いを押し返す者、仮面ライダーリバーズッ！！』つて、簡単に思いつかないぞ！？ ガメル、カザリ、順番的に次は俺だ。やべえよやべえよ……あいつらできてなのに、俺だけできないとか絶対笑われる！！ ガメルやカザリならまだなんとかなるが、魅空だけは絶対に嫌だ！！ くっ、どうする？ どうする！？ ……よし、逃げよう』

魅空

「あんな短時間でこんなに書けんだつたら絶対一個は思い付くだろう！！」

カザリ

「最終的に逃げる選択をするとか……へタレたな……アンク……」

魅空

「はあ……まあいい。続けるぞ」

カザリ

「1人減ったけどいいの？」

魅空

「まあ……猫でも犬でも鳥でも猿でもゾンビでもなんでもいいが、流石に直ぐ呼び出すのは無理だからなあ」

カザリ

「いや犬とか猫とかならいるけど、仮面3キャラにゾンビなんていないでしょ」

魅空

「その気なればだせるぜ、ゾンビ。名前は…サクリファイス・A（アングレー） ・ジャグレーとか？」

カザリ

「名前長っ！？ というか本当にださないでよ！ 多分スッゴいめんどくさい事になるから！！」

魅空

「ちっ。じゃああいつ呼ぶか」

カザリ

「あいつ？」

魅空が連絡して数分後。やってきたのはカザリですら息を飲む美女であった。高い身長にスラリと伸びた足、淡いクリーム色の長髪には軽いウェーブがかかっている。スタイルも申し分ない。だがしかし、強い違和感がある。何か恐怖的な物も感じる。ガメルもカタと小刻みに震えていた。

魅空

「いよお、悪いな呼び出しちまって」

???

「別に構わないわよ。魅空と私の仲じゃない」

カザリ

「え…魅空誰？この人」

魅空

「誰ってお前、アレだよ」

カザリ

「どれだよ」

魅空

「分かんない？こいつ、？キヨちゃん？だぜ」

キヨちゃんだぜ

キヨちゃんだぜ

キヨちゃんだぜ

キヨちゃんだぜ

カザリの中で反響する音の如く言葉が繰り返された。

カザリ・ガメル

「うそおおおおー！！！！！？」

カザリ

「えなにこれ？なにこれ！？あの人形がこんな美人ってどんな

イリユージョン!？」

ガメル

「あわわわわ…… (ガタガタ)」

魅空

「バツカお前ら、ここは茶番劇場だぜ? なんだってありだ」

カザリ

「やりすぎだろ!! 僕らも読者もビツクリだよ!!」

魅空

「これぞキヨちゃん」

魅空・キヨちゃん

「擬人化形態!!」

カザリ

「君らの頭の中に無茶苦茶って言葉はないのか!? たぶん今回の感想の殆どにカオスって書かれるよ!？」

魅空

「それだっつていいじゃない」

キヨちゃん

「カオスがうりだもの。貴方しらないの? これ裏では『レッツゴ
ー仮面3 極・スピンオフ! ショートカオス劇場2011』つて
言われてるのよ」

魅空・キヨちゃん

「ねー」

カザリ

「なんだこいつら超仲いいんだけど!？」

カオス劇場は仮面3の妄想です。

魅空

「さーて擬人化形態キヨちゃんも加わった為、最後行ってみよー」

ガメル

「えーもう終わりー？」

キヨちゃん

「ページの問題だからしょうがないわよ」

カザリ

「（大人の都合を把握してる!？）」

魅空

「さー次はリバーズ最終回のセリフ、『……この街に生きる命が、それを望まなかった。それだけだ!』。作者が好きなセリフだな。じゃあ行ってみよー」

ガメル

「お手本はー？」

キヨちゃん

「大人の都合（この作品子供が書いてるけどね）だからね。我慢しようねー」

ガメル

「じゃあ、はい！」

魅空

「はい、とある猛獣王の純粹無垢（ガメルって意味だよ）！！」

ガメル

「『……この街に生きる命が、それを望まなかった。それだけだ！ つーわけでアレな！ 望まれなかった一部のお前アレだかな！ 死刑、ゼツテー死刑だかなー！ もう謝ってもゼツテー許さねー、バアーカバアーカ！！』」

カザリ

「リバーライダーめっちゃ軽くなって！？ というかノリが子供の喧嘩レベル！」

魅空

「うーん、最終決戦でのリバーライダーの消耗がわか」

カザリ

「らないよ！！ あー、そっかー激しい闘いで消耗して言葉使いがアレになってるのかあああってヴァカ！！ なるやつはコント中の志村か加藤くらいだよ！」

キヨちゃん

「じゃ、次は私が」

カザリ

「大人の都合が分かる人は自主的にくるね！」

キヨちゃん

「『……この街に生きる命が、それを望まなかった。それだけだ！
そしてお前もめちやくちや眼の辺りをリアルに作りこんだ日本人
形にしてやるうか！』」

魅空・カザリ

「なんでそうなったっ!？」

魅空

「いやいやいやキヨちゃん！ これは流石に分かんないわ!! な
んでそんな風になったか皆目見当がつかないわ!!」

キヨちゃん

「読者の皆さんの、予想の斜め上を目指したかったの」

魅空

「うんだったら成功だねえ!! これを予想できる人いたらもの凄
い人だわ!!」

カザリ

「コメディなれてない人? って恐ろしい……」

魅空

「ならばラストはカザリだ！」

カザリ

「えー……『……この街に生きる命が、それを望まなかった。それ

ただだ！ 生きる命と言えば、彼らに子供ができたらしい。ふふ、まさか俺のお節介である二人が結婚するとはな」

魅空

「うん、これはこれはまったく意味わかんね。彼らって誰だよ」

カザリ

「さっきの三角関係の人達が結ばれたんだよ！」

男×女2

カザリ

「えつとね、リバーライダーがさっきアドバイスしたあと、女1が不治の病にかかって入院してしまった。男も女2も素人なりに必死に病を治す方法さがしたけど結局見つからなくて女1は亡くなってしまっんだ。その時女1が言った一言に勇気付けられた女2は面と向かって男に告白するんだ。その告白内容に」

魅空

「いやもう分かった。もう分かったから、お前が寝る前に恋愛小説もどきを妄想しながら眠りにつくタイプだと十分分かったから」

カザリ

「別にそんなんじゃない。ただ僕は入り組んだ内容がどうやってたらロマンチックな話になっていくのか、どんな過程でなるのかヒジョーに興味があるだけだ！」

魅空

「確信犯じゃねーか！！」

キヨちゃん

「で？ 計6つの答えが出たけど、一番とか決めるの？」

魅空

「んー、それはタスクさんに決めてもらおう。今日は新しく分かった事が多過ぎる」

・アंकはお題系が苦手

・ガメルはとある猛獣王の純粹無垢

・カザリはロマンチスト

・キヨちゃん擬人化形態！

魅空

「それじゃあばいちゃー！」

【それ行けオー！s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『もう一人の自分を見てお互いにどう思う？』by 闇色の月さん

魅空1号

「力の1号（変態行動力技）！！」

魅空2号

「技の2号（変態行動テクニック重視）！！」

1号・2号

「2人で1人？ いや違うね。俺達は1であり2でもある！！ 同じ称号を持つ運命の双子と言ってもいい！！」

1号

「俺は俺で！」

2号

「俺は俺だ！」

1号

「本来ならもう一人の自分をみたら嫌がるだろう」

2号

「だが俺達は違う。嫌どころか自分が増えた事に喜びを感じる！」

1号

「何故なら1人でできない事が」

2号

「2人でならできるのさ」

1号・2号

「そう！ 例えば3ぴ」

以下自主規制。

『CLAW』S全装備をつけた名付けてヤンデレガメル・デイか何

かあるたびにメダガブリューとドツガハンマーとマグナギガでお仕置きかます若葉だったらどっちに愛されたい?』by 竜王の白翼さん

魅空

「また鬼畜質問……最近多い……フハハハッ……だが竜王の白翼さんよお……あんたあめえよ。どうせまた、俺が前回みたいになるのを期待してんだろ。だが甘い。あんたが提案したヤンデレガメル・デイ。致命的な欠陥がある。それは……ヤンデレガメルがバースじゃなつてことだ」

ヤンデレガメル・デイ

「うーん……うーん……う……ごげない……よおおお……!」

魅空

「フハハハッ!! バースの頭部分、あれはバースヘルムードと呼ばれ、マスターサーバーという部分がある。マスターサーバーには様々な機能があるが特に! バースの複雑なプログラム制御が必要な武装ユニットのコントロール時は、腕部と脚部に存在するコミユニケーターと連携し、並列処理を行うという機能が存在する! つまりCLAW'Sは最低でもマスターサーバーがなければ意味なさない! フハハハッ盲点だったな竜王」 顔の横を投げ付けられたメダガブリューが通り過ぎる

若葉

「直ぐに調子に乗るの、貴方の悪い癖っスよ?」

魅空

「……すみません。(あのガブ斧、俺のなのになあ……)」

若葉

「一応ドツカハンマーもいつときます？」

魅空

「お願いだから止めてください」

ガブ斧はメダガブリューの事だよ！

A. いやあのね、俺が無類の美少女好きって言うてもね。性格にデカ過ぎる腫瘍あつたら流石に嫌よ？ 竜王の白翼さんに聞くけどさあ、例えばあんたの目の前にめっちゃ好み娘がいても、性格がめっちゃ酷ければ萎えるでしょ、そうでしょ？ そこんとこ理解して欲しいなあ。つーわけで答えは、やっぱどっちも嫌！ こんな質問をした竜王の白翼さんは罰としてキャラメル5個口に入れた状態で、マヨネーズを嚼る刑に処す！ 嫌だつたらお前んとこの女キャラを、裸にしてダブダブワイシャツ着せて撮影会だコノヤロー。裸ワイシャツとかワイシャツのボタンを外している大胆な女ってエロいよね！

『フヨウへ、魅空は変態で女好きだけどどう思う？』by優也（闇夜の黒鳥さん）

フヨウ

「こんな質問来る度に思うけど…みんな魅空の一部しか見てないよ。魅空がアレなのは仕方がない事だと思っよ、アंकが言ってたもん。男はみんな女が好きって、夜はみんな風間大介か左翔太郎になるって言ってたもん」

魅空

「なるほど、女好きとスケベって言いたいのか」

フヨウ

「それに魅空だつて、昔は自称普通の女好きだつたんだよ？ でも女好きつて言うわりには、基本的に私の近くにしか居なかつたな。そのあと告白された時は……うん、これは流石に……言うの恥ずかしい……かな。でもコアメダルを手に入れた時から急に変わっちゃつて、何かを隠すようにあんな風になっちゃつて……その後直ぐフラれちゃったり……ね。でも本当は」

ガンガンガンガンッ！！ 魅空が壁に頭突きナウ

フヨウ

「ええっ!？」

魅空

「やめろおおお!! 例えお前と言えそれ以上過去関係を暴くなあああ!! あああああああ!!!!!!」

フヨウ

「ごめん! ごめんなさい!! 謝るしもつ言わないから止めて!! もつオデコが描写できない見た目になつてるよお!!」

『東方キャラにそつちのグリードを寄生させてるが選んだ基準は何だ?』 byウヴァ (鳴神 ソラさん)

魅空

「え、んなもん簡単だよ。答えは以下の通り!」

カザリ

「……………」 虎の妖怪の星に憑依。トラ!

ガメル

「……………」 大地なんちゃらを操る能力を持つ天子に憑依。重力操作、地中ソナーを持つサゴーズに近いと思ったから、安直な考えだと笑えばいいさ！ サゴーズ…サゴーズ！！

魅空

「因みに緑のコアメダルを、リグルことバグボーイ（虫小僧という名の女の子）に入れた事もあるぞ。その時はアングのメダルも入れて、巨大グリード暴走態になったけどね！」

因みにネタバレ。コアメダルが入る人。

アングINフヨウ

ウヴァってだれそれ

カザリIN星

ガメルIN天子

メズールINフヨウ

紫のメダルはゲフンゲフン

『俺へ楽しい時はどんな時？』 byガメル（鳴神 ソラさん）

ガメル

「うっ…いろいろあるけど最近は（ニヤリ）ヤンデレ眼

魅空

「……………!!!?」 背中に寒気を感じた。

『魅空は半グリードということですが、食事はどうしてるんですか？ 毎朝耳たぶとか?』 by タスクさん

カザリ

「っ誰のだよ!? そのネタ分かる人殆どいないっすよタスクさん!!!」

1号・2号

「俺たち2人でインパクトモーション。略してインモー」

カザリ

「何やってんの!?!」

1号

「さあカザリも一緒にいってみな! インモーってさ!」

カザリ

「誰が言うか!」

魅空

「一応俺の飯は普通だぜ。まだ味覚あるからな。ま、たまにカザリの耳たぶ舐めたり齧ったりするけど」

カザリ

「そーゆー事は言わないでよ! 勘違いされるでしょ!」

魅空

「耳たぶや耳を舐められたカザリは『はうん…! (ビクンビクン』

と言つ」

カザリ (赤面)

「やめろおおおお!!!!!!」

ガメル

「あれ? でもみあってちゃんとしたグリードじゃないのに、たまにセルメダルでるよね?」

魅空

「そりゃでるよ」

カザリ

「いやでないから。味覚感じるくらいならセルメダル必要としないから。なのになんで出る?」

魅空

「だってセルメダル食ってるし」 セルメダルぽりぽり

カザリ・ガメル

「……………は?」

魅空

「ぽりぽりぽりぽりぽり」 セルメダルを食っている

ガメル・カザリ

「うそおおおお!!?」

カザリ

「いや僕らもセルメダル食べてるようなものだけど! そんな口か

らばりぱり行くのははじめて見るよ!？」

魅空

「うーんコンソメ味」

ガメル

「味あるの!？」

カザリ

「あ……ホントだ……!」

*

読者の皆様、アンケートに答えていただきありがとうございます!

結果は作者的には予想外でした……。

一位・魅空・15ポイント

二位・ヤンデレガメル・11ポイント

三位・リュウガ・4ポイント

魅空とリュウガは予想してましたがヤンデレガメルは……。なんだろう、ネタキャラの勢いやバ過ぎる。何はともあれありがとうございます! 次回からこの三人は罵倒されます、若葉に。

魅空とリュウガは無理だろうって? フフ、そこは大丈夫ですよ。この2人には致命的な弱点があるのだから。魅空は過去を暴かれる

のを極端に嫌い…リュウガは…まだ本編で明かされていませんが？
火の付いたタバコ？を極端に嫌います。リュウガにとって火の付いたタバコは、人生最大のトラウマです。これ以上は流石に言えませんがね。というワケで次回！ 最初の標的はリュウガだ！

セリフのちょい足しって結構難しいb yアंक(後書き)

さて次回。そろそろ竜王の白翼さんキャラでやろつかないと思う今日この日頃。でも魅空の性格をコンボ別に分けたら面白いと思うんだ。まあどつちやるかは、テイラノ・セルのコイントスで決めよう。

それでは次回も宜しく御願います！

帰ってこさせられた！ カメンジャイ！！ b Yリオン（前書き）

【宣伝】

【仮面ライダーエターナル〜風都を守る永遠の戦士〜・著：ベルトさん】

魅空

「エターナル見たときからちょっと思ってたんだけどさ」

進也

「はい」

魅空

「お前らW系ライダーって、メモリどっから出してんの？ ゾーンで呼び出すとか、エクストリームとかファンングみたいに自分で来るわけじゃないじゃん」

進也

「禁則事項です」

魅空

「いや別にいいだろ、そんなぐらい」

進也

「いいえ、禁則事項です」

魅空

「それ貫くつもりか」

進也

「はい。禁則事項です」

魅空

「（怒）（ビキビキ）」

帰ってこさせられた！ カメンジャイ！！ b y リオン

若葉

「……………」 自宅で何かを待つ

魅空 (髑髏お面)

「お疲れー」

若葉

「あっ、お疲れ様っス」 どうやら魅空を待っていたらしい。あの一件で地味に仲良くなったこの二人

魅空

「はあ…またあいつらだよ…」 面倒そうに若葉の前に座る

若葉

「そっスねえ…またしょうこりもなく」

魅空

「つかアレから全然たってないじゃん。まだ前々回じゃん」

若葉

「なんでもゲストが来るから、やる事になったって聞きました」

魅空

「マジかあ…じゃあまた長くなるじゃん。最近全然ショートじゃねーよ。最初2〜3ページの短い奴だった筈なのに、いまじゃ8ページとかだよ…おいこれ基本セリフオンリーなのに…文章構成立力ないね！」

若葉

「確かに」

魅空

「もうそーゆーの気にするテンションじゃねーんだよ。あー、またクソつまない回になるぜコンチクショー」

若葉

「……………もうウダウダ言つのやめませんか？ さっさとやりましょうよ。アレやんなくちゃ出てこないだろうし」

魅空

「そつだなー。じゃあ早速……………トオー」

若葉

「わー、やーめーてー」

魅空

「フハハハハッ、私の名は鬮體お面。お前は今から私の……………なんかこつ……………あれになるのだー」

若葉

「いーやー」

?????

「待てえーい！ー！」

魅空・若葉

「（あんな棒読みのもくるんだ……………）」

ヴォルフ

「仮面ライダー！ ヴォルフ！！」

リオン

「仮面ライダー！ リオン！！」

鎧王

「仮面…ラ……ライダー、鎧王…」

歌舞鬼

「音撃戦士！ 歌舞鬼！！」

樹枝鬼 (じゅえき)

「音撃戦士！ 樹枝鬼！！」

リュウガ

「仮面ライダー！ リュウガ！！」

エターナル

「仮面ライダー！ エターナル！！」

ヴォルフ

「7人そろって！」

カメンジャイ

「カメンジャイ！！」

魅空・若葉

「増えてるううう！！？」

魅空

「なんか三人ほど増えてる!? 1人知り合いで二人増えてる!?!」

若葉

「え、誰!? リユウガさん以外誰!?!」

樹枝鬼

「ネタバレの樹枝鬼です」

エターナル

「ゲストのエターナルです」

リユウガ

「紅一点のリユウガちゃんです」

ヴォルフ

「7人そろって!」

カメンジャイ

「カメンジャイ!?!」

魅空

「名乗りもうやらなくていいよ!! 結局樹枝鬼って誰だ!?!」

樹枝鬼

「ネタバレなんで詳しくは言えないです」

魅空

「じゃあ何で出て来た!?!」

樹枝鬼

「だって着ぐるみダメだって……あつ!!！」

魅空

「お前あいつか!？」

若葉

「それよりもゲストのエターナルってまさか!？」

エターナル

「エターナルこと、上野進也です」

若葉・魅空

「やっぱりか!!！」

若葉

「感想でベルトさんにカメンジャイなるの止めてもらったのに、なんで結局入ってるんでスカ!？」

エターナル

「いやあ、最初は写真だけのつもりで来たんですけど、なんか狼みたいなライダーさんに『Youやりたいならカメンジャイ、入っちゃいなよ』って進められて入っちゃいました」 明るく笑いながら

魅空

「ライウましか狼」 ヴォルフのマスクを掴む

ヴォルフ

「いやあ、戦力になる人が入りたいてって言ってたら、入れるっきゃ

ないでしょ。アハハハハ」

魅空

「アハハハじゃねーよ！ おまつ、感想の場で一回とめてたろ！？」

ヴォルフ

「それほど魅力的な存在だったんだ彼は（キリッ）」

エターナル

「ありがとうございます！」

魅空

「なんつだこいつ。メンバー増えたから調子に乗ってやがる！？あとエターナルもありがとうございますって言ってんじゃねーよ！」

若葉

「本来ならストップ係りの詩織さんは何やってたんですか！？」

リオン

「所詮自分は、やくたたずのエセライオン野郎です」

若葉

「前々回やりすぎたあー！！！」

樹枝鬼

「まあまあ（笑）」

魅空

「なんだこいつ。めっちゃKYなんだけど、腹立つ」

エターナル

「で、俺は何をすればいいでしょう？」

魅空

「何もしないでいいから帰ってくれ」

エターナル

「ええ！？」

魅空

「何もせずに帰る。それがお前にできる最良な選択」

エターナル

「そんな、折角来たのに……」

若葉

「そもそもカメンジャイなんかにかっこいいとか思っちゃダメッス。この人達に関わったらヘタレるっス」

ヴォルフ

「おい、止めるお！！ 新人に変な事を吹き込む」

若葉

「貴方が喋るのを止めてください。黙ってください。というか……喋るな黙ってる」ゴゴゴゴッ！

ヴォルフ

「ちよっ、同じ狼なのにそんな……」

若葉

「名前に狼があり、変身するライダーのモチーフが狼だけでしょ
う？ たかがそれだけで狼の同類とか言わないでください。虫酸が
走る」

ヴォルフ

「…………ごめんなさい」

若葉

「分かればよろしい」

ヴォルフ

「…………なあ、若葉ってホントになんでああなった？」 小声

リオン

「知らないよ。というか知ってたら苦労してないよ」 小声

リュウガ

「あら、お二方知らない感じ？ この作品のコンセプト」

ヴォルフ

「コンセプトなんてあったのか、こんなのに」

リオン

「感想の7割にカオスとかかかれてるのに？」

ヴォルフ

「もう作者、カオスが栄養源とかいってるのに？」

リュウガ

「コンセプトというか、キャッチコピー？ キャッチコピーは『オリキャラですら、キャラブレイク』」

ヴォルフ・リオン

「……………マジで？」

リュウガ

「マジで」

ヴォルフ・リオン

「……………か…仮面3のアホオオオオオオ！！」

若葉

「五月蠅い！」

魅空

「あーもうまたグダグタだよコンチクショー。お前らあれな、今日オールで説教だ！ 覚悟しとけ！！」

ヴォルフ・リオン

「勘弁してください！（魅空はどうでもいいけど、若葉は嫌だ！）」

魅空

「おい、将斗。今日は帰れないって保護者（メルカバ）に連絡しとけ」

鎧王

「……………はい」 一旦部屋をでる

エターナル

「従うんですが鎧王さん!？」

若葉

「私、栄養ドリンク買ってくるっス!」

リュウガ

「やる気まんまんだねえ」 ちよつと嬉しそう

ヴォルフ・リオン

「いやあああああ!!!」 トラウマ再臨

そして夜はふけていった。部屋には疲れて眠る若葉と、心身困憊している6人（1人は幸せそうだった）の仮面ライダーが居た。なぜ6人か、答えは若葉の良心。若葉が気を遣ってエターナルだけを逃がしたのだ。その時エターナルは、6人の仮面ライダーが正座している姿を見て、

「シユール……」

と呟いた。

歌舞鬼

「うーん、俺が居る必要なくね?」

*

【オマケ：将斗はやらん!! やらんぞおお!! byメルカバ】

ゴクウ

「あれ、どうした兄貴。青い顔して（もとから群青色だけどな）

」

メルカバ

「今……将斗から連絡があつて……今日はもう帰れないらしい……」

ゴクウ

「ほう、誰かの家にお泊りかい？ 大将の仲がいい奴は、狼夜か詩織だな。あら？ でも狼夜はホームレスだし、詩織のとは……ある意味アレだしなあ」

メルカバ

「犬崎の家に……居るらしい……」

ゴクウ

「犬崎……？ ああ、若葉っていう女のところが……え？ 大将が女のところにだとお！？ うっそマジで！？ あの女っ気のない大将が！？」

メルカバ

「……う……む……」 小刻みに震える

ゴクウ

「そっかそっかあ。大将もついにその時が来たかあ。明日は赤飯たかなきゃな！ なあ兄貴！！」

メルカバ

「……さん……」

メルカバ

「うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ゴクウ

「落ち着けええ！！」

その後、犬崎家を襲撃しようとしたメルカバをゴクウがなんとか止めた。その代償として、ゴクウは人間で言う肋骨を三本折る大怪我をした。

【それ行けオー！s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

カザリ

「だけど今回はゲストが来てくれたから、まずはそっちの紹介しよう。ベルトさん著であり、好評連載中『仮面ライダーエターナル』風都を守る永遠の戦士』からこの二人」

進也

「エターナルの上野進也です」

里美

「ヒロインの松下里美です。今回は足りなさそうなセルメダルを上げるついでに、来ちゃいました！」 味つきセルメダル

カザリ

「……まあ、無駄だと思うけど、一応ありがとう」

進也

「え、無駄って…なんでですか？」

里美

「せっかく持ってきたのに……」

カザリ

「理由、聞く？」

里美・進也

「はい」

カザリ

「セルメダルは元々足りてるんだ。僕以外」

進也

「え？」

カザリ

「元々魅空が持っていたセルメダルは82547枚。最近色々あつて127038枚に増えた」

里美

「そ…そんなにですか」

カザリ

「魅空のセルメダルの使用方法はメダジャリバー、ライドベンダーの燃料変わり、スナック感覚ではりぱりエトセトラ…めっちゃうちゃ使っても急にメダル不足にはならない。魅空、ガメルは燃費悪いからセルメダルを定期的上げるけど…僕には…」メダル不

足、そして頬を伝う一筋の涙

進也

「なんでメダル不足に…カザリさんにも上げればいいのに…」

里美

「やっぱりこのセルメダルを全部カザリさんに…あれ!? セルメダルが無い!？」

魅空

「フハハハハッ! 大量のセルメダル、簡単にGETだぜ!！」

進也・里美

「ああっ!」

カザリ

「やっぱり出たか…」

里美

「返してください! 貴方大量にセルメダル持つてるじゃないですか」

魅空

「えー、どうしちゃおっかなあ、返しちゃおっかなあ。うーんでも札束や硬貨（メダル）はいくら持つても重くないって言うし、やっぱり返さない! あー、あとさっきカザリにも上げればいいって言っただじゃん。メダル不足になっても別に大丈夫だし」

進也

「いやグリードなんだし、メダルは欲しいでしょう?」

魅空

「いやいや、本当にやばくなれば『セルメダル』が欲しいって強い欲望で結構なんとなかるから。もう無理っばかったらしょーがなくメダルやるし」

進也

「貴方はカザリさんをなんだと思ってるんですか!？」

魅空

「あーそれ聞いちゃう? ま、いつか。これ本編じゃないし、ゲームしないから言っちゃっても」

里美

「え…何を?」

魅空

「なにつて、俺のホ・ン・ネ。所詮グリードなんて? 物? つしよ? カザリは実際、メダルの成る木。ちよつとこづいたり、指示を出せば楽にセルメダルを手に入れられる道具。ガメルとか愛でるのだから、俺のキャラを保つ為のピースだよ。単なる暇潰し、理解できるかな? ま、あんたらみたいなの、最後幸せになれるキャラには無理かな。しょーじき、俺は最後の最後まで幸せなんか手に入らないだろーし。だったら堕ちるとこまで堕ちるだけヨ」 久しぶりに最低モード

進也

「そ…そんな…」

里美

「酷い…カザリさん大丈夫ですか…？」

カザリ

「うん…なんとなく分かったから…でもそうやって心から心配されると…あつたかいんだね。はじめての経験だよ…」 2つの意味でちよつと泣いた

上野進也、松下里美。カザリはこの二人との出会いで、人間のあたたかさを知った。

叶うなら、ベルトさんみたいな人が書く作品に出たかった… by カザリ

ベルトさん、なんかすみません。

『俺へ、今欲しい物はある？』 by ガメル (鳴神 ソラさん)

ガメル

「うーん……」

魅空

「基本的には何でも大丈夫だぞガメルウ。金ならいくらでもあるから」 空き巣、泥棒チヨロイチヨロイ

ガメル

「じゃあねえ」

魅空

「応っ！」

ガメル
「地球」

魅空

「 (@ _ @ :) ? ? 」

ガメル

「地球が欲しい」

魅空

「諦めよつか。そんなこと言っていると、ウルト マンに怪獣と間違われてピチユーンされちゃうぞ」

ガメル

「え〜! ?」

魅空

「諦めてホント。ハイパーク スター、ブレイ グリフォン上げるから」

『僕へ今読んでる本って何?』 by カザリ (鳴神 ソラさん)

カザリ

「本なんか読んでる暇があったら、セルメダルをより多く稼ぐよ」

ガメル

「カザリこの本なに?」 小説を2つ持って

カザリ

「ちょ、それなんで持つてるの!？」

ガメル

「みあが持つてけって」

カザリ

「あ…あの野郎おおお……」

カザリが今読んでる小説。

【MORSE - モールス -】上・下

舞台は、雪に閉ざされた田舎町。学校でのいじめに悩む孤独な少年・オーウェンは、ある日隣家に引越して来た少女・アビーと知り合う。オーウェンは、自分と同じように孤独を抱えるアビーのミステリアスな魅力に惹かれていき、何度か会ううちに2人は仲良くなり、壁越しにモールス信号で合図を送りあうようになる。しかし、時を同じくして町では、残酷な連続猟奇殺人事件が起きていた。(Wikipedia様より引用)

つまりはホラーと少年少女の切ない恋愛模様を描いた作品。映画もした。今、仮面3が一番読みたい小説。

ガメル

「やっぱり恋愛小説か……ふっ」

カザリ

「ガメルに鼻で笑われた!？」

『こちらのカザリさんのコスプレ写真を贈ろうと思いましたが、これ

「についてどうおもいますか？」 b y海道海里 (カイ・R・銃王さん)

カザリ

「ついに僕関係でこんな質問来たか……というかなんで僕はどんな作品でもこんな扱いなんだ」

アंक

「オーズ本編でのお前見てこい。そこに答えはある」

カザリ

「アंक、君も結構やってるだろ。何故君は標的にされない」

アंक

「俺だってそれなりの扱いだ。だが、俺は視聴者に感動も与えていたからなあ。何より仮面ライダーオーズがあそこまでヒットしたのは、他の仮面ライダーシリーズに存在しないであろうキャラのおかげ。つまりこの俺、アंकだ!!!」

カザリ

「今関係ないが、やっぱり仮面ライダーオーズには僕みたいなおもいきり悪役ができる立場のキャラが居たから、あそこまでヒットしたと思うんだ。つまりこの僕、カザリのおかげだ!!!」

アंक

「あ？ 調子に乗ってんじゃねえぞ、オーズ本編であんな惨めな終わりを迎えてくせに。それに今はお前 (全てのカザリを含む) のコスプレの事だろ、カザリちゃん (笑)」

カザリ

「あの出来事でどれだけのカザリファンが泣いたと思ってんの？
それにコスプレ？ 魅空とか錬矢とかみたいな危ない奴に強要され
ない限り、やるわけないじゃない。あつちの僕も簡単にするわけな
いじゃない。馬鹿なの？」

アंक

「作者権限って言葉、知らないのか？ というか、魅空どこいった
あの馬鹿、こういった類いの質問はあいつだろ。おいガメル」

ガメル

「みあ久しぶりに最低モード？ になったから疲れたって。寝るか
ら起こすなって、起こしたら顔面の皮引き裂くってさ」

アंक

「あいつ……職務放棄しやがった！」

『緑のメダルのグリードが「このままでは済まさん！」とか言いな
がらホラーっぽく出てきたらどうする？』by仁（闇夜の黒鳥さ
ん）

ウヴァ

「お前らあああああああ！ 今まで散々馬鹿にしやがって！
魅空とかの性格ならまだ分かるが、カザリ、アंक、ガメルうう！
！ お前らはそれダメだろっ！！ 昔よくメダルウヴァい合ってた
ろ！」

カザリ

「えーと……どちら様ですか」

アंक

「新入りのクセして、偉そうに…」

ガメル

「はじめまして！」

ウヴァ

「はいダウトオオおおお！！ お前らホント……このままでは
済まさんぞおお！！ そしてちよつとみない間に、女みたいになり
おつて！」

カザリ・アंक

「あゝ あん！？」

アंक

「……済まさないってんなら、あいつなんとかしろ」

ウヴァ

「あいつだと？」

魅空

「さつきから五月蠅いんだけど緑の人。寝起きなのにイライラさせてんじゃねーよ。ウヴァ状態なのかコノヤロー」 フヨウに起こされた

ウヴァ

「ウヴァ状態！？」

ウヴァ状態。調子に乗ってる、強気の発言が目立つ人物の心情を表す。例）「あの緑の人はまさしくウヴァ状態だ」

ウヴァ

「さつきから何故俺は緑の人って言われているんだ!？」

魅空

「済まさないとかほざいてるみたいだけど、安眠妨害された俺もすまさねーぞゴラア!! 本編に出てないオリジナルコンボでぼこる……」と思ったがやめた。今適当に思いついたオリジナルコンボで殺つてやる」

《イルカ! クジラ! セイウチ! イルージウチーイルジウチ!》

生物分類上はイルカとクジラに差はないけど、ちっちゃい事は気にするな、それわかち (ry)。

ウヴァ

「適当臭が凄いんだが!？」

オーズ・イルジウチコンボ「使用時間僅か5秒で生まれたこのコンボを舐めるかよ!」

ウヴァ

「やはり適当じゃないか!！」

オーズIC

「イルカの音を使って空間を認識する力や、クジラの超音波と、セイウチの牙の力、見せてやる!！」

ウヴァ

「適当に負けてたまるかあああ!！」

1分後

ウヴァ

「負けたああ!?!」

オーズIC

「勝ったああ!?!」

『そっちの僕……魅空とフヨウが、自分の子ども的な位置だった場合、どうする?』byカザリ (フロストさん)

カザリ

「いや、なにこれ? ちょっとした鬼畜質問? フヨウならまだしも、魅空とか……」 取り敢えず妄想してみる

『』はカザリの脳内。そしてフヨウと魅空は年齢を下げています。

フヨウ

『おかあーさん!』

カザリ

「いやこの時点でおかしい! お母さんじゃないし! どっちかというとお父さんだし!」

フヨウ

『おとうーさん!』

カザリ

『ん、どうしたんだい?』

フヨウ

『えへへー、呼んでみただけー』

カザリ

「もしこれが魅空だったら……」

魅空

『おーい親父ー』

カザリ

『ん、どうしたんだい？』

魅空

『呼んでみただけだったの。バーカバーカ！ 馬鹿が見るう！！』

カザリ

「（^^^#）（ピキピキ。…落ち着け、落ち着け僕。イツツ
クール、イエス」

魅空

「おーいカアザリイ」

カザリ

「……………！（ビクウ）」

魅空

「ん、どした？」

カザリ

「来るなあ！！ 僕に近づくなこの不良息子！！ フシャー！！」
既に妄想限界

魅空

「あ？ なんのことだよ」

『カザリよ、フヨウがマジギレした所……見てみたいと思わないか？』 by 仮面3

カザリ

「フヨウがマジギレする事ってあるの？」

魅空

「いんや、基本あいつは何があってもキレない。基本的に何をしてもキレない。……ある言葉、それ関係の事を馬鹿にしなければ、絶対にキレる事はない」

カザリ

「ある言葉って？」

魅空

「教えられるわけねーだろ。……俺に関係してるしな」

今思えば、あいつが本気で怒ったのはアレが最初であり、アレが最後だった。俺の事で怒ってくれたのは嬉しかったのは、あの時のフヨウはとても恐ろしかった。顔を真っ赤にして、血が出る程唇を噛み締めて、人に痛みを与えた事が無いであろう拳を腫らして。怒ったフヨウは、相手の奴らが泣いて謝っても止まらなかった。偽善の善玉という皮肉を言われた事があった彼女は、暴力の塊になっていた。脳が絶えず情報を与え、筋肉が動き、血潮が巡り、心臓が鼓動

し、思考が駆け巡る生物。フヨウは様々な個の色を見せる生物が大好きだ。だけど、人は簡単に変わる。都合のいい二面性を持つている。俺が教えてやったオセロみたいに、簡単に白から黒になる。俺は黒しかない不良品のコマ、あいつはきっちり白黒に分かれてるコマ。だから俺は、本当のフヨウを知った時、真の愛情を持った。黒から白に戻ったフヨウの笑顔。顔に返り血が付いた彼女の、いつも俺に向けられていた笑顔を見た時、本当の愛おしさを知った。不良品が、完成品に恋をした。彼女の黒に惹かれて、彼女の白に惹かれて、彼女の惨めな部分的に惹かれて、彼女の矛盾だらけの白黒に惹かれて。

カザリ

「いや長いよ！！　たいして文章力ないのに頑張るなよ！！　読者今、絶対鼻で笑ってたよ！！」

魅空

「ま、そーゆーわけだから余計なこというなよ？　マジギレしたフヨウは0.2秒の間に人一人殺せるから。多分。じゃー俺は寝直すから」

カザリ

「……………フヨウがそんなになるわけないだろう。よし怖いもの見たさだ。やってみよう」　謎の手がカザリにカンペを渡す

カザリ

「なんだ、簡単な言葉じゃないか。こんなので本当にフヨウが本気で怒るのか？　まあいいや、やってみよう」

*

帰ってこさせられた！ カメンジャイ！！ byリオン（後書き）

……若葉の罵倒はやっぱり、一つの話でやります。だって絶対長くなるんだもの。ショートじゃないんだもの。

さてと、今回は竜王の白翼さんのキャラでやるつもりです。そしてその後、ちよつと真剣に一話書こうと思います。なのでまたアンケート。どっちが読みたいですか？

No.1.『Greedy than anyone else.』
魅空が主人公。彼がオーストライバーを手にした時の話。

No.2.『彼女の鈴は紅く白く美しく』。リュウガが主人公。彼女の過去と日常に少し触れる。リュウガの本当の姿もちよつとでるよ！

このアンケートで、リュウガと魅空、皆さんがどっちに興味を持ってるか分かってしまいますねえ（笑）

それではよろしく願いします！

アメリカンって言葉にそんな凡庸性ねーよ！ by士（前書き）

【宣伝】

【仮面ライダーディフェル〜世界の覚醒者〜・著：竜王の白翼さん】

リュウガ

「そういえば、今Wの世界なんだってね。どう？ ガイアメモリシステム」

士

「やっぱり斬新でカッコいいぜ！ カードデッキとか携帯電話とかいろいろあるけど、USBメモリってなかなか無い変身ツールだと思うー！」

リュウガ

「まあ、メダルとかスイッチもそうだけど。ところで、うちにもガイアメモリシステムで変身する子いるけど知ってる？」

士

「詩織さんことリオンだろ？」

リュウガ

「そうそう。そのライオン君がさ、士ことディフェルことカクテン君とさあ」

士

「カクテン君ってなに!？」

リュウガ

「覚醒天使君、略してカクテン君。それは置いといて、ライオン君が君と闘ってみたいそうなんだよね」

リオン（惨殺本能）

「アハハハハハハハヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ
ヤ!!!」

士

「……………え、最初からその本能で？」

リオン

「ヒュペル・テロ」

士

「うわあああああああ!!! 殺られるううう!!!」

ヒュペル・テロは簡単に言えば相手を殺さなくする力。だからどんなに死ぬような拷問しても、なかなか死なないから、長時間楽しめるゾ byリュウガ

最初に言うておく、竜王の白翼さんすいません！

アメリカンって言葉にそんな凡庸性ねーよ！ b y 士

昔々、いややっぱそんな昔じゃなくて、もうちょっと現代……いやいや近未来？ にある三人の少年少女が居た。本当なら様々な仮面ライダーの世界を旅しているのだが、今回は何故か足止めを食らっていた。そう、何故かね！ 別に最近ハイーヨーヨーにはまった奴のせいとかじゃないからね！
まあなんにせよ、なんやかんやで？ 変な世界？ に閉じ込められている三人に、ある異変が起きていた。

それは… ちょっとした？ 崩壊？ であり？ 混沌？ だった。

天醒士、日々野美莉、向井聖麻。この三人に襲い掛かった混沌とは……。

*

美莉

「はい向井君、あーん」 ケーキあーん

聖麻

「ん」

美莉

「あつ、鼻にクリーム付いてるよ」

聖麻

「ん？」

美莉

「えいつ」「クリームを指でとり、舐める

聖麻

「ん、わりい」

士

「……………」

説明しよう！仮面ライダーディフェル〜世界の覚醒者〜の本編では、

美莉 士好き

士 鈍感なムツツリスケベ

聖麻 特になし

であるがこの世界では何故か、

美莉 聖麻好き

聖麻 悪い感じはしてない

士 最近邪魔だと思われはじめた

な感じになっているのだ！

士

「（どうしてこうなった！？ この世界に来て早3日、初日にも違和感あつたけどこれ完璧おかしいだろ！？ 俺でも気付くぞ！！
なんで聖麻にフラグ立ったんだ？ そんな兆候無かったじゃん！
あ、あ、あいつらイチャイチャしやがって！ 奴らの背景にイチャイチャって文字が見えるぞ！ ナニコレ怖い！）」

聖麻

「あつ、そつだ士」

士

「な、なんだよ」

聖麻

「お前、魔王倒していい」

士

「なんでだよ！！ 何故に魔王！？ そんなの居るわけ」

美莉

「居るって」

士

「居るんだ！ なにこの世界！？」

聖麻

「俺が聞き込みした結果分かったことなんだが、この世界には『魔王ガ・メール』という存在に支配されかけてるらしい」

士

「魔王ガ・メール！？ なんかオーズに似た名前の奴居なかった！

？」

聖麻

「その魔王ガ・メールが現れたせいで、人々の間にある異変が起きたんだ。それは性格（キャラ）の崩壊と混沌……」

士

「崩壊と混沌……？」

その時、士に電流が走った。

崩壊⇨ブレイク

混沌⇨カオス

つまり

性格（キャラ） 崩壊⇨キャラブレイク

混沌⇨そのまんま

全ての⇨キャラブレイクとカオスの世界。

士

「（このおかしな現象はこの世界の、魔王のせいかあああああ
！……！）」

聖麻

「と……うわけで、いってら」

「!!」 目にちよつと涙ためながら

士は哀の雄叫びを上げながら走った。走って走って走り続けた。三回目の雄叫びが止む頃には、士は川にたどり着いた。

士

「ちくしよおおおおおおお!!! 俺完全に厄介払いされてんじゃねえか!!! 魔王退治つてある意味勇者だけど、厄介払いのいいわけだろこの状況だとおおお!!! しかも世界を支配しようとしている魔王を1人で倒せと!? あんたらどんだけ鬼畜メガネ!!! メガネパーツ無いけども!!!」

???

「川に向かって叫ぶとか、青春してるね、少年」 川から聞こえる謎の声

士

「!?!? だ、誰だ!!!」

こめり

「誰だと言われても、俺は河城こめり。見ての通り? 河童? だ。今の電気自動車もビツクリの、低燃費ハイブリッド河童だ」

士

「.....」

こめり

「なぐんだその目は? まるで着ぐるみを着てる痛い奴を見るような目で河童を見やがって」

士

「……………いや、あんた着てるじゃないすか」

こめり

「俺は低燃費ハイブリッド河童と言えど、昔ながらの河童スタイルを守る河童だぞ？ 着てるもんなんか……………ねえよ」

士

「沢山河童河童言ってもらったところアレですけど、活字で読者には分からないですが俺には見えてますよ。あんたもろに着てるじゃないですか……………」

こめり

「着てるもんなんか……………ねえよ」 川から出てきた

士

「簡単にあんたの見た目言えばアレですからね、荒川河川敷村で村長やってる小 旬みたいですからね」

こめり

「ヒト……………いや、河童の身体的欠点を言つと嫌われるぞ……………?」

士

「身体的欠点とか認めてるじゃないか!! あんた自分で認めてるじゃないか!!」

こめり

「ちっげーよ。俺が認めてるのは俺が河童であることと、地球は青く丸く美しく」

士

「あんた完璧に荒川のアレにハマって、村長をリスペクトしてるコ
スプレイヤーだろ!!」

こめり

「はあ……しょうがない……証拠みせてやる。ホラ」 甲羅から写
真を取り出す

士

「ツインテールの娘とエセ河童がWピースで写ってる」

こめり

「ちよおまっ!」

士

「誰ですかこの娘」

こめり

「そいつは河城にとり。俺の親戚だ」

士

「あなたはホームセンターで親戚は家具店って……凄い名前の一
族ですね」

こめり

「そいつも河童だ」

士

「いい加減嘘言つの止めるよコスプレ河童」 胸ぐらを掴む

こめり

「ハッハッハッハッ、止めるよ、伸びるだろ。マジだって。にとりは恐らく、二次元界では一二を争うほど有名な河童だ」

士

「さつきからなんなんだ！ だからもう嘘は」 後頭部に堅い物を突き付けられ口をつぐむ

???

「貴様もさつきからなんなんだ。送るぞ、遠いところに」

士

「……えーと…今俺…僕の後頭部に当てられてる物はなんですか？」

???

「現世界最強クラスの威力を持つハンドガン、S & amp ; W M 500」

士

「（が…ガチの武器だあああ！！ や…殺られる！ なんだこの感覚。怪人と戦う時よりすっげー怖い！！現実味ある恐怖！）」

こめり

「やめとけ、サク」

???

「ですがこめり殿！ この様な無礼な輩は…」

こめり

「サク、この距離だと貫通して俺にも当たるから。冷静になって」

???

「申し訳ありません!!」 S & a m p · W M 5 0 0 をしまっ

こめり

「少年、お前も離してくれ。いい加減戻らなくなる」

士

「申し訳ありません!!」 ちらつと後方をみる

???

「なんだ」 身長220cm

士

「デケエ!!」 そして顔色わるっ!!」

こめり

「そりゃそうだ。サクはゾンビだからな」

士

「ええっ!?!」

サク

「サクリファイス・A (アングレー) ・ジャグラード」

士

「どっかで名前聞いたことある!!」

サク

「こめり殿、頼まれていた物です」

こめり

「おお、ありがとな」

士

「（魔王にゾンビにエセ河童……なんなんだこの世界）」

テ〜テ〜テテ〜

士

「なんだこのヤル気の無い音。タジャドル？ タジャドルなの!？」

サク

「む、この音」

こめり

「お釈迦だな」

士

「お、お釈迦!？」

お釈迦（魅空）

「おいーす」

士

「つてあんたかよ!! 一番お釈迦に似合わないだろ!!」

お釈迦・魅空

「あゝ？ なにこいつ。しよっぱなから失礼なんだけど」

士

「長い金髪でお釈迦とかありえないだろ！」

お釈迦・魅空

「金髪はかんけーねーだろバカヤローがよお！！ お前あれだぞ、かの有名な西遊記のあの人だって実は欲深い人なんだぞ！ 偉いほど偉い（エロい）んだ！」

士

「後半関係ないじゃないか！」

こめり

「よーお釈迦。久しぶりだけどどした？」

お釈迦・魅空

「おーこめり。アレだ、魔王の魔力がはびこるこの世界に、救世主たる勇者が現れた」

こめり

「マジか!？」

お釈迦・魅空

「マジだ。伝承どんぴしゃだ」

士

「あの一、伝承って？」

サク

「昔からこの世界に伝えられている言葉だ。『魔王がこの世に現れ

た時、恋愛フラグを友人にウヴァわれ厄介払いされた者が勇者となりて、悲しみと怒りの矛先を魔王に向け八つ当たりとして魔王を滅する』と」

士

「（…………アレ。アツレ……………！
！？？　もしかしてそれ俺！？）」

こめり

「んで、その恥ずかしい勇者は誰？」

士

「（恥ずかしいと言わないで、既に恥ずかしいから！！　これはばれない内に逃げよう！　絶対に馬鹿にされる！）」

お釈迦・魅空

「そいつw」　笑いながら士を指差す

士

「笑いながら指差すな！」

こめり

「えっ、マジでww　おまつ、厄介払いされたの？　www」

士

「だああああ！　笑うなあああ！！」

お釈迦・魅空

「まー、ぶふうw、そーゆーことなんで魔王倒しにいつてらっさい
い」

士

「魔王は倒しに行くつもりだったけど、取り敢えず笑うな！」

こめり

「まーまーそんなキレイなよ。アメリカンが逃げるぜ？」

士

「アメリカン!？」

サク

「イエス、アメリカン」

こめり

「ユーライクアメリカン？」

サク

「オーイエスアメリカン」

こめり

「ずっとアメリカン？」

サク

「オールアメリカン」

こめり

「オーもっとアメリカン！」

士

「いや全く意味わかんない！ どういう意味でアメリカン使ってる

の!？」

お釈迦・魅空

「アメリカンには無限の可能性が」

士

「ねーよー!」

お釈迦・魅空

「あーもう五月蠅いウザイキモい。さっさと行けよ魔王退治。ぶっ
ちやけ俺も怖いんだよあの魔王」

士

「言われなくても行くよ!」 お釈迦達に背を向けて歩きだす

こめり

「……………」 無言でついていく

サク

「……………」 無言でついていく

士

「なんでついてくるの!？」

こめり

「面白そうだから」

サク

「こめり殿あるところに私は居る」

こめりが なかまに なった！

さくが なかまに なった！！

士

「超いらねえええ！！」

お釈迦・魅空

「そして！」

魅空・こめり・サク

「次回、予告！」

士

「続くの！？」

新たな仲間を手にした士の、この世界での旅が始まった。そして最初に辿り着いたのは魔法使いが住む村。

フヨウ

「魔法使い設定がいかされるのははじめてだな」

そこで士達は怪物と闘う事になる。

士

「こいつ完璧にキン スライムじゃねーか！！」

更に明かされる秘密。

お釈迦・魅空

「なにげフヨウはEカップ強あるからな…」

そして士の中で揺れ動く想い。

士

「勇者が巨乳好きで何が悪い！ むしろ、勇者だからこそ巨乳好きと言っても過言ではない！」

次回『仮面ライダー兼勇者だって巨乳が好きby士』

ぶっちゃけこれの8割は『勇者ヨシヒコと魔王の城』と『荒川アンダーザブリッジ』のパクリです！

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

カザリ

「ってちよつと待って！ フヨウ、胸Eカップもあつたの!？」

フヨウ

「うん でも驚く事かな？ 私より大きい人って居るし」

若葉

「？」 Fカップ

キヨちゃん

「？」 Gカップ

カザリ

「……………ぐっ (ギリツ。ハッ、何故僕は悔しがっているんだ！
！」 Dカップ

『俺へ、何やってるんだ？』 b yウヴァ (鳴神 ソラさん)

カザリ

「さっ、質問ですよ緑の人」

ウヴァ

「お、おのれえ……」

魅空

「っかこいつやることあんのか？ 基本的に登場しないんだから
よ」

アंक

「ということは…ニートか」

カザリ

「ニートだねえ」

魅空

「ニートうー！」

ガメル

「ニート ニート」 意味わかってない

ウヴァ

「ち…ちくしょおおおおおおお！…！！」 泣きながら逃げた

メズール

「最終回のせいか、ヘタレになってるわね」

紫のグリード

「アハハハハハ！ 無様をとおりこして惨めだねえ！」

『ガメルへ、将来の夢はある？』byメズール（鳴神 ソラさん）

ガメル

「地球の支配者」

魅空・カザリ

「（ ; ）」

ガメル

「えっ？ だめ？」

カザリ

「怪人としては間違っただけでもない！」

魅空

「もうダメだうちのガメル。早くなんとかしないと」

『魅空に質問。某猫型ロボットの道具であるバイ インで1分置きに倍になるヤンデレガメルを愛せる？』by竜王の白翼

魅空

「だから無理だっていつてんだろーがバカヤローがよあ！ 多分闇夜の黒鳥さんとの同類でも無理だから！！ つーか簡単にヤンデ

「！」

カザリ

「……だれそれ。普通、ミステリアとかじゃないの？」

魅空

「ふっー乙ww」

カザリ

「？」

魅空

「朱鷺子つてのは、大妖精、小悪魔に続く名無しキャラだ」

カザリ

「でもなんで？」

魅空

「ミステリアより好みだから」

カザリ

「やっぱりそんな理由かよ！！」

『質問です。僕はよく顔はカツコイイのと言われるのですが、全然モテません。変態の何処が悪いのでしょうか？』by総司
(闇夜の黒鳥さん)

魅空

「フハハハッ、何時の世も変態 (天才) とは認められないものさー！」

カザリ

「うっわぁ……笑い方が最近フハハハッに成ってきてるうっわぁ……」

魅空

「フーかぶっちゃけ総司。俺はお前キライ」

カザリ

「ちよっ！いきなりなにいつてんの！？失礼でしょ！」

魅空

「だってキャラ被ってるし」

カザリ

「そんな理由で!？」

魅空

「バツキャロー！キャラかぶりは重大な問題だぞ!!」

カザリ

「世の中に変態キャラはごまんといえるから!」

アंक

「それはそれでダメだろ」

『緑……ふと思いました、植物系グリードってなんでいないんでしょうね?』byタスクさん

別に質問ではない感想での一言…やってみようと思ったのでやっち

やいました

《ラフレシア！ ハエトリグサ！ カーテンフィグツリー！ ラフ・トリ・カーテ・ラフトリカーテ！》

植物系グリード・ヤブル

ヤブル

「ヒヒヒハハハハ！ もう緑は俺の物お、これからは若草色の時代い！ イエー」

ウヴァ

「緑は俺の物だ！ 昆虫系にこそ緑がふさわしい！」

ヤブル

「あんた一つ間違ってるう。クワガタ緑じゃない、黒光りい。アハ
ン」

ウヴァ

「……………あつ。ええい五月蠅い。お前の頭臭いんだよ！」

ヤブル

「これ、ハエが喜んで飛び込む臭い。そして俺レベルになればあ、全昆虫が飛び込み俺の栄養！ ヘイヨー」 本気

ウヴァ

「ぬわあー！ なんだコレは！ 物凄く惹かれる！」

ヤブル

「ヘイFU〜 ウイイイ〜！」 勝利の雄叫び

この後、ウヴァはなんとか救われました。

今回は前回出た哺乳類のグリードでもだそうかな…？

カザリ

「まあ、若草色なのはハエトリグサだけなんだけどね…」

コアの色

・ラフレシア (赤緑)

・ハエトリグサ (若草)

・カーテンフィグツリー (茶緑)

アメリカンって言葉にそんな凡庸性ねーよ！ by土（後書き）

超展開でごめんなさい。

さて今回はリュウガちゃんのお話……ですが、オーズが最終回を迎えてしまったので、アレをやるうと思えます。それが終わればリュウガ、次にヒモと言われてキレルカブキ、カザリの告白、米倉ツインズの日常をやる予定です。

いい加減にリュウガのバイトのアレやんなきゃ…、あつ竜王の白翼さんのはいつかに続きます。

それでは次回もよろしくお願ひします！

結局オーズではサゴソコンボが一番好きby仮面3

今までこんな奴らにてこずっていたとはな。ハッ。by緑の人

魅空

「出たよ、ウヴァ状態」

アंक

「この後あんな事になるのは当然だなあ。なんせウヴァ状態だし」

メズール

「ガメルも上手く行ったからって、ウヴァ状態になっちゃだめよ？
死亡フラグだから」

ガメル

「うん！」

ウヴァ

「orz」

お見せしよう。これが800年前の王が初めての変身に使った十枚目。タトバコンボだ。by鴻上会長

アंक

「おい、お前何回タトバ使った？」

魅空

「あっ？ なんて言わなきゃいけねーわけ？」

アंक
「フヨウ」

フヨウ
「みーあっ」

魅空
「……………ちっ」 脳内で数える

メズール
「そういえば、あの時代では全然見なかったよね。タトバコンボ」

アंक
「タトバコンボはオーズにとって、代名詞と言っても過言ではない。この時代に来てからはメダルがないからよく使っが……………」

魅空
「……………あつ、あの時代で俺、タトバ三回しか使ってないワ」

アंक
「予想してた数より遥かに少ない……………」

魅空
「フハハハハッ、タトバ存在知ったのって、ガタキリバとラトラーター知ってからだワ。しかもタトバよえーし、使うタイミングねーし。タトバ使うぐらいならタキリーターとかラキリゾとかタカウドルとか使っし」

フヨウ
「弱いとか言っちゃダメだよ！ 最終回頑張ってたんだから！！」

魅空

「フヨウさん。その数分後見てみなさい。タカトラバッタ、パッキンってなるからね。みんなノーリアクションで話進めてたけど、タカトラバッタパッキンいったからね。唯一のリアクション、アंकが眉を動かしたただけだからね」

因みに魅空がタトバを使った状況。

一回目・たまたまなった。

二回目・色々あつて嫌々なった

三回目・アंकを後ろからぐっさり

テレビで800年前の王がやったときは、ガチでびびった。

見たまえ、あのオーズの力をby会長

魅空

「緑の人フルボッコWWW」

アंक

「ハッ、面白い事に成ってたなW」

メズール

「ウヴァWWW」

ガメル

「弱いWWW」

ウヴァ

「まだ笑うか!!」

俺は…俺は嫌だあ！ うへえ……うつつ……!! by緑の人

ウヴァ以外の皆

「これは笑うしかない」

ウヴァ

「(、；；、)」

今日の分の、アイスよこせbyアंक

魅空

「いきなりだがお前ら。フヨウの苦手な食べ物が何か知ってるか？」

ガメル

「好き嫌いはダメ」

フヨウ

「いや、嫌いなわけじゃないんだけど…できれば遠慮したいなあつて…」

魅空

「フヨウが苦手な食べ物…それは……アイスだ!!!!!!」

殆どの人

「アイス？」

魅空

「アंकは現在同様、昔フヨウに憑いていた。そしてアイスの旨さを知った、オウム野郎はアイスをばかぐいしたのさ。結果、アイスによるダメージは全てフヨウに行くのでフヨウはアイスを極力食べなくなつたと」

メズール

「でも憑いてる時はグリードが意識の主導権を得るから、お腹をくだしてもアंकにダメージいくんじゃあ……」

フヨウ

「だってアंक、そういう時ばかり意識切り離すんだもん……」

殆どの人

「うっわー」

アंक

「やめる！ そついつ目で見るな！！ 旨いもんは旨いんだからしよつがないだろー！！」

これって……真木さん？ by 知世子

キヨちゃん

「うう……あんな格好……もうお嫁にいけない……」 擬人化形態

アंक

「いくきだったのか」

メズール

「フロストさんのところの、オーズの坊やならもらってくれるんじ

「絶対違う。絶対に違う」

お前がやれって言うなら、お前がホントにやりたい事なんだよな。

アंक：いくよby映司 タカ！ クジヤク！ コンドル！ by
アंक

フヨウ

「ねえアंक。アंकがやりたいことってなに？」

アंक

「取り敢えず、魅空のどてっばらに穴を開ける。昔のちょっとした
礼だ」

フヨウ

「もう！ そんな危ない事じゃなくて、もっとこう……ないの!？」

アंक

「ない。そもそも只の命のないメダルの塊が、欲望を持つこともお
かしいだろ」

フヨウ

「そんな悲しい事言わないでよ！ アंकっていつつもそう！ よ
そよそしい態度って人から遠ざかって、そしてカッコ付けてるから
800年前の王様にも魅空にもメダルとられちゃうんだよ！」

アंक

「さらっと言っな……軽く黒歴史なんだからよ……」

フヨウ

「別にカッコわるくてもいいじゃない……弱さを見せてもいいじゃないな

い…流石に緑の人みたいになったら引くけど」

ウヴァ

「ヲイ」

フヨウ

「命がない…？　じゃあ私と過ごした時間は？　命なんて…あるって適当に言っただけじゃあないんだよ。？そこに居る？ってことが重要なんだよ…！」

アंक

「……………！！！」

ウヴァ

「おいなんだこれは。マジで茶番なんだけど」

アंक

「そうか…悪かったな」

フヨウ

「うっん、大丈夫だよ」

アंक

「俺のやりたいこと…やりたいこと……………お姫様だっこ（フヨウにしたい）？」

魅空

「どんな欲望だしてんだああああ！！！！　今までだってたけどツツコムわ！！　どんな欲望提示してんだああああ！！！！！」

フヨウ

「いいよー!」

魅空

「いいの!?!」

アंक

「(えっ!?! マジ、キタコレ!)」

フヨウ

「アंकがやれって言うなら、アंकがホントにやりたい事なんだよね」 アंकに接近

アंक

「お…おっ…ってっお!?!」 まさかの逆お姫様だっ!

フヨウ

「龍騎の方の最終回でアंकは×××になるけど、それまでは私がアंकを守ってみせる!?!」

アंक

「(ヤダ……力強い腕!?!)」

フヨウはどう聞き間違えてこの行動をしたのか不思議に思ったアंकだったが、不覚にも逆お姫様だっ!?!でドキッとしてしまった為ツッコめなかった。

そっだ。お前達と入る間に只のメダルの塊が死ぬとこまで来た。こ

んな面白い、満足できる事があるかbyアंक

魅空

「はいはい。名言乙」

アंक

「なんだその素っ気ない態度は。ああ、そうか。お前に名言なんて無理だからなあ。妬いてんのかw」

魅空

「あゝあ？ なにいつちゃってんのかな、この鳥頭ちゃんは。別に無理に名言いう必要なくね。読者がいいと思ったならそれでいくね？」

アंक

「ふっ、負け犬の遠吠えってやつか」

魅空

「え？ なにお前。一発ぶん殴りたいの？ もしくは蹴りたいの？」

アंक

「お前は焼かれないか？」

魅空

「フハハハハッ、今のは宣誓布告と受け取った。やってやるうやんけワレ、あゝあゝ！？」

アंक

「グチグチ言っていないでさっさとこいやゴラア！！ 最終回の感動を今ここで再現したらあ！ お前がギルでなっ！！」

魅空

「こいやぁ！ おらこいやぁー!!」

他にも色々名言あったけど、一番気になったのはなんでアングのタカ・コア、パッキーンってならないで割れただけなんたるby仮面3

アング

「最終回の演出と言ってしまえば全て片付く」

いつか…もう一度…by映司

魅空

「長いようで短かったな、オーズ」

フヨウ

「最初は批判されてたけど、最終的にカッコいいって言われるところライダーマジックだね」

魅空

「だな。思いつきで生まれた俺達オーズキャラも、読者さんの間では有名になったし。オーズがなければ俺達は居なかった」

フヨウ

「だから…終わっちゃうのさみしいね。ありがとう！ 仮面ライダーオーズ！」

魅空

「んで、次回からフォーゼ。宇宙ライダーか」

宇宙ライダーはやっぱりスーパー1だ！ スーパー1を知らずして
宇宙ライダーは語れない！

フヨウ

「あれ？ 今幻聴が…？」

魅空

「気にしたら負けだ。しかし……フォーゼねえ……」

《Three Two One》

???

「変身！」

魅空・フヨウ

「!？」

フォーゼ

「フォーゼキタアーーーーー！！ 俺の時代、きちやきちや来ち
やうよおーーーーー!!！」

魅空

「なんかめんどくさそうな奴キタアーーーーー!!！」

*

〈収録後〉

魅空

魅空

「そうだカザリいねーじゃん！ あいつどこだ!？」

メズール

「そこで膝かかえてブツブツ言ってるわよ」

アンク

「どうしたカザリ!」

ウヴァ

「最近、少女漫画やらバストサイズを気にしたりと少女化が進んでしまい、凹んでいるらしい。俺はあれをOTU状態と名付けた」

フヨウ

「どういう意味?」

ウヴァ

「落ち込んだ奴はみなウザイの略だ」

フヨウ

「 (;) 」

ガメル

「カザリ大丈夫?」

カザリ

「……………」

かざりは しんだめでだまっている。

かざりは ただのほうしんじょうたい のようだ。

魅空

「おいやべえよやべえよ！ こいつがこのままだと、このコーナー
終わるぞ！」

アング

「ああ……！ カザリはこのコーナーの八割のボケにツツコミを入
れている。カザリがツツコミをできなくなってしまったら……！」

ウヴァ

「ボケ×ボケ。ボケとボケが化学変化を起こして崩壊するな」

フヨウ

「どうすれば……」

メズール

「どうするもこうするも、カザリにツツコミを入れなくなる状況を
作ればいいじゃない」

レギュラーメンバー

「……………！」「目から鱗な顔

メズール

「あら？ まさかホントに気付かなかった？」

魅空

「そうか……その手があったか……！」

アング

「しかし今のカザリは、生半可なボケにはツッコまないぞ」

魅空

「……………手はある。だがアंक、緑の人。お前らの協力が必要だ。そして、プライドを捨てる覚悟も」

アंक

「まさか……………」

ウヴァ

「ツッコミ復活と言えど、アレをやれというのか！？ 無茶だ！
下手をしたら、一生重荷を背負うことになる！！！」

魅空

「それでも！ カザリ不在のせいで12月31日前にこの作品を完結させるわけにはいかない…！ 頼むアंक……………そしてウヴァ！」

アंक・ウヴァ

「！！！！！」

フヨウ

「魅空達は何をしようとしてるの？」

メズール

「私の予想が当たっていれば、恐らくプライドの高い彼らにはもっとも苦痛な事をしようとしてるわ」

フヨウ

「……………？」

メズール

「アंक、ウヴァ、そしてオーズの坊やはプライドが高い。坊やは一度変態（ホンモノ）になるためにプライドを捨てて、より強固なプライドを得たわ。そのプライドすら打ち砕く…恐ろしい業」

フヨウ

「そんな…そんなのダメだよ！」

メズール

「止めちゃダメよ！ 止めてしまったら、彼らの覚悟を踏み躪る事になるわ！」

フヨウ

「……………っ！」

魅空

「行くぞコラア！」

アंक・ウヴァ

「応…！」

魅空

「亀崎パンにつまっているのは、チョコ、カスタード、生クリーム
のどれだ？？」

アंक・ウヴァ

「そんなの……………」

魅空・アंक・ウヴァ

「ゼーんぶじゃないとイヤ…っ…！」

フヨウ

「……………ん？ んん？」

魅空 みつちゃん

「あ〜っ、カザリ君おっひさあ〜っ！！」 敢えて君づけ

アंक アンコ

「も〜っ、チョー心配しんだからねっ！ あんまり皆に心配かけちゃダメだゾ」

ウヴァ うーちゃん

「ちよっと見ない間に雰囲気変わったね！ 明るい感じだったのに、すっかりクールって感じ！ ヤダア、カザリ君カッコいい〜」

フヨウ

「……………メズールさん、解説お願いします。なんで魅空達の顔が乙女チックにってるか分からないです。私、頭痛いです」

メズール

「あれは亀崎病と言って、脳内が女子化する病気の一種よ。亀崎というのはカチューンの女子憧れのメンバー。あの病気は禁断のワードを言うことによつて、イースト菌の妖精にメタモルフオーゼできるわ。『亀崎パンにつまっているのは、チョコ、カスタード、生クリームのだーれだ？』『ミラクル 亀崎 ルールル ルー！！』等。乙女心が理解できる・・・気がするらしいわ」

フヨウ

「えー……………」

ガメル

「ぶつちやけると、荒川アンダーザブリッジの亀有病のマルパクリだね！」

フヨウ

「えー……」

みっちゃん

「もう！ 何かいってよ、さみしいじゃない！ 一緒にお話しよう」

カザリ

「……………はあ……」 ジトオー……

亀崎病患者

「（人生の先輩が昨今の若者に向けるような目！）」

アンコ

「も…も…そんな隅っこに1人でいちゃダメエ！」

うーちゃん

「こっちで皆で亀崎談議しよーよー！」

みっちゃん

「そーだよ。1人じゃ……」

カザリ

「いや1人じゃないんでお構い無く。おいで、アルフレッド、ジヨンソン、吉田さん」

アルフレッド
「にゃ〜」

ジョンソン
「みゃ〜」

吉田さん
「わんわんお」

フヨウ
「（猫じゃない何かか混じってる!）」

うーちゃん
「へ…へえ〜……可愛いね…」

アンコ
「あっ！そ…そうだ、私ここにくる途中に凄い物見つけちゃった」

みっちゃん
「え、なにになに〜？」

アンコ
「ほらこれ四つ葉のクローバー！」

うーちゃん
「キヤツ、凄〜い！」

アンコ
「でしよ〜！ほらカザリ君も」
「カザリがクローバーを奪い、

食う

カザリ

「無機物以外みな食料」

みっちゃん

「へ…へえ〜……クールなのにワイルドなんだね……」

うーちゃん

「うづゝ ああー！」 セルメダルを吐いた

みっちゃん・アンコ

「うーちゃん!？」

ウヴァ

「俺は…もうダメだ……プライドがボタボタに……ふっ。例え一回
と言えど…お前に名で呼んで貰えて……うれしかっ……た… (ガ
クツ」

みっちゃん

「み…緑の人おおおー……!」

アンコ

「リタイア早すぎるだろおおおー!」

フヨウ

「私も帰っていいかな。頭痛い……」

メズール

「ダメよ。漢 (おとこ) 達の闘いを最後まで見届けなさい」

リュウガ

「意外と言葉攻めってイイネ！」

若葉

「馬鹿の集まりでスね」

『こっちのギルの擬人化姿はどうだった？』b yアंक (鳴神ソラ)

カザリ

「また魅空が反応しそうな……」

魅空

「フハハハッ、ないないない。アレ、女じゃないし」

カザリ

「いや、女でしょ。レベルの高い」

魅空

「最初から女じゃないじゃん。擬人化、もしくは擬態した姿じゃん」

カザリ

「……………は？」

魅空

「いやあ、擬人化嫌いってわけじゃないけど、性対象にはならないのよ。実際俺、キヨちゃんにムラムラしたことないし」

カザリ

「僕らもともとオスだけど」 ムラムラされた事あり

魅空

「憑依してる躰はもとから女だろう」

カザリ

「君の基準が分からないよ!! わかりたくもないけどね!!」

『デジモン系コンボはどうだった?』byカザリ (鳴神 ソラさん)

魅空

「なにがデジモン系コンボだコンチクショー!!」 メダルを叩きつける

カザリ

「いきなりなにやってんの!? 君にメダル使えないからってそんなこと...」

魅空

「そんなんじゃねーよ!」

カザリ

「じゃあなに!?!」

魅空

「俺がキレてんのは、なんでブラストモンのメダルないんだよ!!」

カザリ

「そんなどうでもいいことでキレてたの!?!」

魅空

「どーでもいいことじゃねーよ!!! ブラストモン無いってのは必要な事だ! ブラストモンはしゃべり方と性格が好きだ! シャウトモンなんかこうだ!!!」 明後日の方へ投げる

カザリ

「あゝあゝあゝあゝ!!!」

『今回はカザリに質問です。次の内、着るならどれ? 1、トラの着ぐるみ(顔面露出) 2、トラ縞のビキニ 3、I LOVE MIAと書かれたTシャツ』 by タスクさん

魅空

「そしてプレスオブファイア2のリンプーとかいうキャラの服もだ。さあ、どれ!」

カザリ

「1でお願いします」

魅空

「もうちよっと考え」

カザリ

「1でお願いします。1が一番まとものです。仮面3も絵で描いてみたら、1がいいです」

魅空

「なにこいつ……スッゴいつまんない」

カザリ

「（つまらないのが一番いい。つまらなければタスクさんも下手に動けまい！）」

魅空

「ま、全部無理矢理着せますけどね……」

カザリ

「!？」

『ぶつちやけ、魅空とアंक達の好みの女性ってなんだ？ フヨウは逆に男性な？』by 錬矢（フロストさん）

魅空・アंक

「聞くだけ野暮ってもんさ……」

魅空

「あ？ パクってんじゃねーよ」

アंक

「パクってんのお前だろうがよお！ あゝあ？」

メズール

「フヨウは？」

フヨウ

「うーん……バンチョーレオモン、黒龍頑駄無、流全次郎？」

メズール

「男らしい人ばかり…ね」

フヨウ

「うん」

魅空

「おい、なんで急に長ランきてんだよ」

アング

「お前はなんで短ラン着てんだ？」

魅空

「イメチエンだよ」

アング

「奇遇だな。おれもだ」

結局オーズではサゴソコンボが一番好きbY仮面3(後書き)

次回、リュウガの短編に挑戦！ 駄文注意！

彼女の鈴は紅く白く美しく(前書き)

ども、バトスピ楽しいよバトスピ、仮面3です。

十代後半にしてカードゲームにハマッてしまった……それもこれも
天秤造神リブラ・ゴレムのデザインが私にドストライク過ぎたのが
いけないんだ……。まさかはじめて買ったカードパックでリブラ・ゴ
レムが当たるとは。

そんな事よりも今回はリュウガちゃんのお話。彼女の過去にもちょ
っとふれちゃうよ。

では本編へGO！

彼女の鈴は紅く白く美しく

彼は教えてくれた。

止めて！ 止めてよ！

綺麗なモノは綺麗。美味しいモノは美味しい。普通な感性を持つて生活する事が、どれだけ大切で幸せな事か。

止めて盗らないで！ 大切なの！ 私の大切なモノなの！！

彼は私の英雄（ヒーロー）であり、大切なモノだった。でも、大切なモノほど無くしてしまう。大切な宝物はずっと眺めていたくなる、だから無くしてしまう。

離してよ！ ?ワシタカ?を離して！

私の場合は奪われた。あのおぞましいニヤケ面をして、吐き気がする臭いを出す?タバコ?をふかした男達に。

殺さないでえ……止めてよう……?ワシタカ?を…殺さないでよお…。

とても強かった?ワシタカ?。本来ならあんな奴らに捕まらなかつた。そして蹴散らす事もできた。だけど、彼には強い呪い（カーズ）があつた。ねっとり泥の様に身に巻き付き、力を出させなくする呪い（カーズ）。それは私。彼にとつても、私は大切なモノだった。嬉しいけど嬉しくない。私が彼を殺した。

いやあああああああ！！！！！！

彼を消滅させた呪い（カース）は、根源たる私にも数々の不幸を与えた。当たり前か。呪いは術者に返ってくるのが道理。

え…なに…止めてよ…コレも盗らないでよお…大切なんだよ…
…ワシタカが教えてくれた大切なモノなのお…！！

心の傷、トラウマの他に私に降り掛かった呪い（カース）は、彼が教えてくれたモノを消した。あのむせ返るタバコのせいで私は、味覚を失った。今喋れているのは奇跡だ。

あゝあゝあゝあゝあああゝあああゝ！！！！？

熱かった。とても、熱かった。

なんで？

当然だ。

なんでワシタカ、居なくなっちゃったの？

私のせいだ。

帰ってきてよ…もう1人やだよ…。

五月蠅い。勝手に言うな。

やだやだやだ！ ワシタカと一緒にじゃなきゃだあ！！

五月蠅い五月蠅い五月蠅い。

やっとシアワセになれたのに！　ワシタカも…一緒に居てくれるっていったのに！！

ウルサイ。

皆？やっぱり？死んじゃえばいいんだ。

五月蠅い…五月蠅い…！

死ね！　死ね死ね死ね！！

五月蠅い五月蠅い！

皆死んじゃえ！　タバコ吸う奴も！　私から大切なモノを奪う奴も！　私自身も！　死んじゃえ！！

*

「五月蠅い！！！！」

怒声と共に、屋根裏の狭い部屋の中心に敷かれている布団から、掛け布団をはねのけて起きた。ここは彼女の自室だ。この家の持ち主から無許可で作った彼女の城。彼女の怒声に城が少し揺れた。家の持ち主は寛大な心で許してくれたが、お仕置きとして彼女の頭に大きなタンコブを作る事になった。上半身だけを起き上がらせた状態の彼女は息が荒く、ドツと汗をかいている。額にある玉汗が頬を伝

い幾つかの筋を描いた。汗に濡れた彼女の顔に髪が張り付く。若干の鬱陶しさを感じながら汗を拭い、髪を払った。息を整えながら寝起きの頭で現状を整理する。そして直ぐに、自分は悪夢にうなされて飛び起きた事を理解して憂鬱になった。

「はあ……夢って残酷……いや分かり切っていることだけどさ……」
所謂、最悪の気分だ。彼の事を思い返したわけではない。ただ過去の自分を無理矢理見せつけられる、嫌がらせのような夢。最悪の気分にはかならないし、他の感情が湧かない。息は整ってきたが、未だ動悸は激しい。少しの間、バクバクいつている心臓の音をBGMにぼーっとしていると、全身が汗で濡れているのに気付いた。躰がダルいからあまり動きたくないが、ずっとこのままでは気持ち悪いので鞭を打って立ち上がり寝間着を脱いだ。寝間着は家の主に用意してもらった、簡易的な黒いTシャツと短パンだ。今のダルい体調では、肌に張り付く服を脱ぐのに少々苦労した。ついでに下着も脱いで全裸になる。汗に濡れた裸体ではやはり寒い。部屋に置いてあったタオルで躰を拭いた。ふと眼の端に、部屋の隅に置いてある全身が映る鏡が見えた。鏡に映る彼女の裸体。彼女の豊満な胸やしまった肉体は男性を簡単に魅了させてしまうだろうが、それよりも目立つモノがある。それは躰中にある傷痕。今では薄くなっているが、それでも目立つ。顔にも少し傷痕はあった。どれにもいい思い出はない。昔は紅かった彼に褒められた長髪も、今では真っ白の白髪だ。麗しい19歳の自分の躰をみていると、気が滅入りそうなるため息を吐きながら鏡から目を離して、前髪をすきながら着替えを手にとった。下着を着ながら、良い気分の切り替えになるものは無いか考えた。

「オオカミ君を弄ろうか……それともライオン君にちょっかいだそっかな。ヨロイ君は…手を出したらバードさんが五月蠅そうだね」

苦笑しながら独り言を続ける。既に切り替えは始まっているのだ。独り言を言うことで、気を紛らわせている。寝間着とさほど大差のない服を着て、布団の上にペタンと座った。何をして気持ち切り替えようかと、長い白髪を弄りながら考えたが、いい案が思いつかない。ふと、紅魔館の門番に会いに行こうかと思った。多分素顔で会いに行けば、門番はかなり驚くだろう。もしかしたらひっくり返ってしまうかもしれない。その姿を想像したら、自然と笑みが零れた。だが会いに行けない。まだその時期ではない。彼女の行動は浅はかなモノが多いように見えるが、大半が様々な策を考え抜いての行動である。まあ、たまに浅はかな以外のなものでもない行動もあるが……。腕を組みながら、何かしようか悩んでいた彼女の脳内に、一つ案が生まれた。

「…そうだ……人里に行こう」

と、何処かで聞いた事のあるセリフを言った後の動きは速かった。衣装ケースから適当に着物を取り出し、羽織った。一応、人里に行くのでカモフラージュのつもりなのだが、ただ着物を羽織っているだけなのでカモフラージュの意味をなしていない。腰帯をしているので、大胆に開いた着物からは、Ｔシャツと短パンが丸見えである。鏡で格好を確認して、よし！　と言うと部屋にある小さい机から、紐を通してネックレス状にしてある？　鈴？　を取り出した。ビー玉より少し大きくて紅い鈴を、彼女は大切そうに首に掛けた。これは彼が残してくれた、唯一の形がある大切な物である。鈴に手を当て、2〜3回リンリンと鳴らした後部屋を出ようとした。

「あつと…忘れ物！」

鈴の次に大切な物を忘れていたのを思い出して、急いできびすを返

した。まずは部屋に放っておいた、さほど大切ではない小さい手鏡。次に物として存在している物では、2番目に大切な物を探した。見付けたすのに3分くらいかかっただろうが、大切な物は枕の下にあった。なんでこんな所にあつたのか、まったく思い出せない。そして大切な物　黒の籠のシンボルがある、薄い四角形の箱を短パンのポケットにしまい込み、足取りはまあまあ軽く部屋を出た。

*

賑わいがある人里の通りで、彼女はある意味目立っていた。彼女を見た者は恐らく3つの意味で振り向むいていた。

1、おおっ、美人…！

2、うわっなんだあいつ、傷だらけ…？

3、誰かに似てる？

目立つのは嫌いじゃないが、好きでもない。それに彼女の場合目立ち過ぎたら、少々厄介な事になる。それを理解していないのか、彼女は通りにある露店で声を張り上げていた。

「うおおお！　おっちゃんコレ超ナウいよ！」

「だろ〜？　パネエだろ〜？」

子供の様にランランと瞳を輝かせている彼女の手には、『世界掌握』とだけ書かれたTシャツが握られていた。彼女が何気なくのぞいた

露店は、現代にある衣服を真似て作った物を売っていた。しかしデザインがアレなせいか、売れ行きはあまりよくない。だが、彼女にはドストライクだったようだ。現在彼女は『世界掌握Ｔシャツ』を本気で買おうか悩んでいる。

「ネエちゃん美人さんだからね。今買ってくれたらオマケでもう一つつけちゃうよ」

そう言つて、露店の店主は『次元崩壊』と書かれたＴシャツを彼女に見せ付けた。

「えっ、マジで!？」

彼女好みのＴシャツが２つ。彼女は高らかに買った！ と言い放つた。センスの悪さは目をつぶって頂きたい。因みに彼女が支払いに使った金は、家主の財布から抜き取った物である。だって働いてないんだもの。彼女は非絶賛無職なので、主な収入源は家主の財布であつた。その後露店の店主と他愛ない会話を少しして、露店をあとにした。買い物を終えて道を歩く彼女の中で、ある想いが浮かんだ。彼が死んでから、こんな想いをまたできるとは思つてもみなかった。

幻想郷に来る前は、作り笑いと偽りの感情で笑うことしかできなかった。彼に教えてもらった不幸せと言う気持ちしか感じなかった。多分彼の遺言が無ければ、簡単に死んでいたかもしれない。彼の遺言、それは？成すべき事をするまで、死ぬな？。当初彼女はこの無責任な言葉をまったく理解しようとしなかった。いや、今も殆ど理解できていない。彼の遺言を無視して、後を追おうかと思つた事もあつた。だが彼は無駄な事を彼女に教えた事は無かつた。その事を思い出した彼女は、彼の言葉の意味を、自分が成すべき事を探す事

を決めた。そしてなるべく人と関わらない様に旅をしていたら、この地にたどり着いた。今思ったらとても素晴らしい奇跡である。かけがえのないモノと、また出会えたのだから。ここで初めてあった人は人ではなく、妖怪だった。幻想郷の誕生に関わった凄い妖怪らしく、自分とは違う次元の存在。本来なら関わりすら持つてはいけないレベルの身分の違いだったが、妖怪は彼女の？友人？になつてくれた。彼を除外したら、初めての？友人？。あの時は興奮のあまり、2日くらい眠れなかったのは、最早いい思い出だ。それからも様々な人と出会った。自分の世界の畜生共と比べのも失礼なほど？良い奴ら？。妖怪の従者やその友人。この世界を生きる人々。そして自分の様に外から来た少年達。姉殺しの咎を持つ青年、話し相手がイマジンしかいなかった少年、実験対象とされていた少年。元々彼等も別世界の人間だったが、彼女がこの世界で手に入れた力で呼び寄せた。この行動は成功の様で、彼等も生き生きと毎日を生きている。そうそう、彼も居た。彼女が未来から呼び寄せたが、あまり仲が良くない青年。彼女は青年が嫌いで、青年も彼女が嫌い。でも彼女はそんな青年との関係も悪くないと思っている。悪友と戯れるみたいで、楽しいと言えば楽しい。

「そこのおねーさん！」

いきなり、嫌いな青年と似た声が彼女を捕えた。いやこれは似ていると言うより、本人の声である。

「へいへいへいへいへい、どうもでえーす」

声に反応して振り返った彼女は、予想通りに居た青年の姿とセリフに『うわっウゼエ』と素直に思ったそうな。ニヤニヤ顔で近づいてくる青年は、彼女が誰なのかまったく分かっていない。まあ基本的に姿を隠している彼女なのだから、当然か。だが油断はいけない。

声色や仕草、癖等の判断材料は複数ある。ここは早くとんずらしたいが、この男が簡単に逃がしてくれ訳がない。

「……………」

「あららどつたの黙っちゃってー、あつもしかして驚かしちゃった？」

驚いて動揺していると勝手に勘違いしてくれたのは好都合だ。その演技をしていれば、乗り切れるチャンスがくるかもしれない。だって世界は、都合が悪い時は都合が悪く、都合が良いときは都合が良いのだから。それにこの男の性格なら、彼女に都合が良い事が起きる可能性の方が高いだろう。この青年が善行する確率なんて、サイコロを振って20回連続で1がでるくらい低い。困っている様な演技をして約48秒。どうやら今回は予想通り、彼女に都合が良かったらしい。

「こおらああああ！！！」

ドドドド！ と、彼女も驚く様な勢いで、人里で人気の寺子屋の先生が走ってくる。しかも鬼の形相で。青年が現われてからの時間差を考えたら簡単に答えは導きだされる。先生は青年を追ってきたのだろう。何故なら先生は視線の照準を青年に合わせ、青年は先生を見てヤバイといった表情をしているからだ。また青年が先生に何かをしたのだろう。先生は青年が行うセクハラの標的なのだから。

「あー、もう来ちゃったよ。じゃあおねーさん！ 今度縁があつたらデートでもしよーぜ！ もしくはいきなり本番でもオールオケエ！ アデューー！」

青年は捨て台詞を言った後、彼女にウインクを贈って逃げる為に走りだした。結構必死なのか、なかなか速い。既に31Mくらい離れていた。そして直ぐに彼女の横を、先生が通り過ぎる。通り過ぎた時の勢いで、彼女の長髪が揺れた。

「逃げるなあああ！」

「誰も俺の走りを止められない！」

もう見えなくなってしまうのに、二人の掛け合いは聞こえてきた。通りの人も、何人かは惚けている。急に喧しくなって、急に静かになる。まるで嵐が去ったみたいだ。青年は今回、先生に何をしたのかな。青年が先生にした悪戯を考えたら、クスリと笑みが零れた。こうやって何気なく笑えるのも、また幸せである。

*

通りを抜け人里も抜けて彼女は今、幻想郷のどこかの森に居た。目的は特に無しに森林浴を楽しんでいた。因みに先程露店で買った物は、鏡の中の相棒に頼んで自室に持って行ってもらった。昔あの時代に居た頃は、ここまで自然に囲まれるなんて想像もできなかった。彼女の時代、世界では目に入る有機物は全て食料と思わなければ、生きていけるものではなかった。自然を気にしている暇は無かつたし、目を奪われるほど自然は無かつた。だから幻想郷に来たときは自然の多さに感動したものだ。歩きながら木々などを眺めていると、木の枝を忙しく移動しているリスが視界に入った。彼女は足を止めて移動するリスを眺めた。この時彼女は何を思ったか。普通の感性を持つ人間なら、カワイイなどの感情を持つのだろう。だが

彼女が持った感情は、口の端から零れた涎が代弁してくれた。彼女はハッと我にかえり涎を手の甲で拭った。

「はっ！ ヤバイヤバイ。昔みたいに食べちゃったら、動物愛護団体に怒られちゃうよ」

昔はとにかく食える物は食わなければ死んでしまうような生活をしてきた。だから今もたまにその時の感覚で、？やってはいけない事を？やっちゃってしまいかける場合がある。洒落にならない事を、やりかけてしまう場合が。リスを視界から外して急いで、別方向に向かつて歩きだした。野生で見つけた生物を衝動で食おうとするならまだいい、しかしあの時の様に人を。

「うん……？」

真っ黒に塗り潰したくなる様な、それでも彼女の日常だった過去を思い出し掛けていると、ふと何かの悲鳴に近い声が聞こえた気がした。特に目的も無いし、立ち止まっていたら黒歴史を思い出しそうになるので、彼女はなんとなくいるかわからない声の主を探す事にした。

*

声の主は、15歳を過ぎたくらいの少女だった。だが少女一人ではない。少女を取り囲む様にして立つ三人の男も居る。この場面、特に探らなくてもこの後何が起こるかだいたい分かる。大抵の男は性欲を持って余しているものだ。男三人はニヤニヤ面で少女で囲んでいる、やはりアレしかない。ちょっととした危ない空気を感じ取った彼

女は直ぐに4人に接近した。

「へーい、君たちなにしてんのー？」

彼女のいきなりの登場に、男達はビクリと反応した。変わって少女は、最初は男達の様に驚いた表情をしていたが、直ぐに安堵をした様な顔になる。やはりそういう状況か、思わず納得してしまった。男達は顔を見合わせて何かを相談した後、一番身長が高い男が彼女の方を見た。

「いやね、俺たちちよつとこの娘とお話してただけっすよ」

絶対嘘だろ。内心で毒づく。

「へー、面白そうだねい。私もませてよ」

「……………別にそんな面白い内容じゃないんで」

「ありやりや？ 面白くもない話を、よくこんな所でできるよね」

ここは森の中。あまり近くに人を喰う妖怪が出ない場所と言えど、あまり長居したいと思えない。これで、彼らは考えが足りないのがわかった。彼女がいたずらっ子が悪戯を成功させたような顔をして、男達を挑発する。すると男達の顔に少し力が入る。

「何が言いたいんすか？」

男の声に少々刺がある。簡単に苛々してくれた。彼女が今闘っている敵もこれぐらい単純だったら楽なのに、そう内心で愚痴を零した。

「何が言いたいねえ……君たちも言いたい事、本音。というか本心だね。その娘にしちゃおうとした事、ぶっちゃけちゃったら？」

男達が少女にしようとしていた事、恐らく複数による強姦。彼女にはこの予想が間違っていない自信があった。あのニヤニヤ面が、？ 奴ら？にそっくりだ。彼女も女の躰が金になると知った時、なんとあの醜い面を見た事か。彼女が右手の人差し指を立てて、言葉が詰まっている男達の変わりに口を開いた。

「言えないようなら、私がいつちやうよーん。多分君たちってさー、その娘をれいぼうしちやおうとしてたでしょ！？」

彼女の言葉に、男達の表情は一気に強張った。少女に関しては涙目になりながら、うんうんと首を縦に振った。まるで心強い味方を手にしたかの様に。しかしその表情も、彼女が次に言うセリフに凍り付いてしまう。

「ま、嫌いじゃないけどね。そーゆープ・レ・イ」

「!?!」

今度は少女の顔が強張った。当然か。味方だと思っていた、突然現れた女性。助けしてくれるかと思っていたのに、彼女の発言がまた絶望を呼んだ。うってかわって表情を柔らかくしたのは男達だった。もしめんどくさそうな女が来たと思ったが、どうやら同類らしい。もしかしたら自分達よりもご立派な性癖かもしれない。ニコニコと笑顔で近寄ってくる彼女に、男達は緊張を解いていた。よく見れば能天気そうな女だ。顔や、服から出ている素肌から見える傷には少し引いたが、女としての身体は悪くない。寧ろ良い方だ。子供の様な笑みをした彼女は、男の1人にぐつと顔を近付けた。白髪頭のせいで、

彼女の紅い瞳がより目立つ。まるで吸い込まれそうなその瞳は、男を見つめているとふと生気を感じない暗い色をした。

「けどお、君たちみたいのって……大っ嫌いなんだよね」

そう、言い切ると彼女は素早く動き、目の前にいた男の左胸部、詳しくは心臓部と背中側の同位置あたりを、両手の親指、人差し指、中指で少し強めに突いた。左手で心臓部あたりを、右手で背中側を。彼女が指を引き楽な姿勢に戻ると、男は一瞬うっとな唸なり、ガクガクと足を揺らしてついには膝をついた。

「……………?」

更に男は胸を押さえ、ゼエゼエと喘ぎはじめる。呼吸も不安定になり、大量の汗をかきはじめた。そんな男を見下して、彼女は指をゴキリ……と鳴らす。

「人間、いや大半の生物に存在する筋肉の塊、心臓（心筋）。数ある筋肉の中でもその強さは突飛している。決められた回数鼓動し、生物の肉体を支えるポンプ。シヨックなどで止まる場合もあるが、形がちゃんとしていれば、マッサージ等でまた直ぐに鼓動する筋肉の塊。そんな強靱さを持つ心臓だけどお、ちよっと鼓動のリズムを乱してやるだけでこのとおり」

そういった彼女は、また幼い子供の様な雰囲気に戻っていた。男は苦しみを訴える悲鳴を上げる。

「くるしいよねー。不安定なリズムで鼓動する心臓じゃあ、うまくポンプが機能しない。躰が常に欲しがらる、新鮮な酸素を含んだ血液が流れにくいからねー」

ケタケタケタ。彼女は笑う。

「さーで、それじゃー君達。そー私の気分を害した君達だよー。そこで苦しんでいる彼みたいになんりたくなかったら、とつとかえりなさい。彼と同じ目にあいたくなかったらねいん？」

右目を閉じて、彼らに愛らしくウィンクをした。だが男達は、背中に強い寒気を感じた。彼女の背中に、巨大な黒龍の影が見えたかの様に。男達は情けない声を出して、苦しんでいる男を抱えて逃げに行った。その無様な姿を見て彼女は、大声で笑う。あの男はかなり苦しんでいたが、多分大丈夫だろう。彼女は心臓に、三本指で強い衝撃を与えただけだ。簡単に言えば、簡易版心臓マッサージ。必要の無い心臓へのマッサージは、害にしかならない。だがちゃんと力加減をしたから、大丈夫……多分。

*

男達が消えた後、少女も彼女に礼を言っつて帰っていった。何度も何度も頭を下げて礼を言っつて来られた時は、ちよつと困つてしまつた。しかし、あんな奴らを見ていたら昔を思い出しまいかけた。奴らの醜いニヤニヤ面を見ると、あの言葉を思い出す。

？この世に、神も悪魔もいない。存在するのは、どちらにもなる人間だけ？

よく大層美しい理想を掲げる人間だが、大抵は自分達が考えている悪魔と大差がない。それを理解していないのも、哀れだ。そもそも

悪魔も神も、人間が得意の妄想で生み出した産物。

『神よ！ 何故貴方に尽くしてきた私を助けてくださらないのですか！？ 私を見放すのですか！！』

己の運の無さを神のせいにする。時の運が味方しなかったのも、神のせいにする。

『俺のせいじゃない！ 悪魔に唆されたんだ！』

自分の悪い行いを、悪魔のせいにする。この世の悪業のほとんどを、悪魔のせいだ。

所詮この世に、悪魔も神もない。居るのは人間と、人々の都合のいい逃げ口上だけだ。

「あつ、悪魔いたねえ。ごめんよレンちゃん…」

ついさつき悪魔の存在を全否定をしたが、友人に悪魔を模した怪人が居たのを思い出し、空に向かって謝罪した。悪魔も神も、本来は存在しなかった。だが、人間の思念が集まり、この世に生み出された。そういえば、この世のどこかに人間の思念が集まる場所があると、聞いたことがある。悪魔も神も、もとを正せば人間。おかしなものだ。悪魔も神も、昔は興味が無かったが、彼の言葉で少しばかり興味を持った。

『いるか分からない存在でもいいじゃないか。いるかわからない存在に感謝したり、恐怖する事で、俺は感謝も恐怖も忘れないでいる』

この言葉も、当時は理解できなかったが。彼は時々、理解するのが難しい事を言つて困らせる時がある。まあ、そんな所も好きだったわけだが。昔には嫌な思い出ばかりだ、しかし、かけがえのない彼との思い出も確かにある。だから、過去を全て断ち切りたいとは思わない。彼女が考えにふけていると、ポケットに入れていた手鏡がもぞもぞと動いた。

『ねーねー、僕お腹すいたよー』

「おっと、そういえば最近、君にご飯上げてなかったね。こりゃウツカリウツカリ」

『こーゆー飼い主が、ペットの儂い命を散らしていくんだ』

鏡の中から話し掛けてくる相棒の皮肉を、彼女はアハハと笑いながらスルーした。だがいつまでもスルーしたら、頭からガブリといかれそうなので、相棒の食料を手に入れる為の準備をする。まず手鏡と黒くて薄い箱　カードデッキを取り出した。カードデッキを手鏡に翳すと彼女の腰に、ベルト型のカードデッキホルダー『Vバックル』が装備される。そしてVバックルの中心部に、カードデッキを装填した。するとシンボルが発光し、彼女を幾つもの影らしきものが包んだ。

「さーてと、行きますかね」

彼女の躰は、黒が主体の鎧に包まれた。龍を模した黒い西洋鎧、そして鉄仮面にある複眼は赤く、少々つり上がっている。鎧の騎士となった彼女は手鏡から、もう一つの世界『ミラーワールド』に飛び込んだ。

彼女は、仮面ライダーリユウガは、今日も大好きなこの世界の為に策を巡らせ動を成す。

*

昔の偉い人は言った。それが誰だったか、名前は覚えていない。私の記憶を書き留めているノートにすら、記されなかつた偉い人の言葉。人の人生は爆裂水晶の様な物だと。元から美しい水晶に、敢えて罅を入れた事により美しさをます爆裂水晶を人間の人生に例えた言葉である。だけど私は、人間の人生は泥の団子に例えた方が良いと思う。握り締めて力を加えるほど硬くなり、磨くほど黒光りに光りをます。途中で崩れてしまう事もあるけど、その崩れやすさが人間に近いと思う。人間の人生は泥団子。歪で指の形がある泥団子、綺麗な球体の泥団子、色々ある。私は綺麗な爆裂水晶より、歪で泥臭い泥団子でありたい。

なんとなく思いついたネタ。

宇宙空間に存在するコズミックエナジーという未知のエネルギーを引き出し、マテリアライズ（物質化）させる力を持つ【アストロスイッチ】。そしてアストロスイッチを制御するコンソールの役割を果たす【フォーゼドライバー】。この2つを持った少女が、天野学園に転校してきた事により物語のページが捲られる！

天野学園購買部で働く青年、上河静也。

静也

「転校生って…君かな？」

天野学園にアストロスイッチとフォーゼドライバーを持ち込んだ、天然パーマ転校生少女、嶋崎星奈。

星奈

「私はこの学園に、超健康体を探しに来たのだ！」

星奈と共に転校生してきた、極道？片桐組？若頭、片桐十兵衛。

十兵衛

「すみません姐御おお！ コロッケパン売り切れてやしたあ！！
任務遂行に失敗した詫びは俺の小指でエンコ詰めて…！」

この三人が出会った時、宇宙が来る！ アストロスイッチ、オン！

《ROCKET ON!》

静也

「あの、超健康体って？」

星奈

「うむ、宇宙空間では虫歯一本あつては許されないのだ。勿論大気圏突破も、超健康体じゃなきゃ無理なのだ。お前は知らないかな？
超健康体、つまり宇宙に行く素質が有る者を」

静也

「なんで宇宙関係かはしらないけど…僕も健康といえば健康だよ。ここ5年くらい風邪引いたことないしね」

星奈

「…………マジで？」

静也

「マジで」

星奈

「…………いきなり超健康体発見なのだぁぁ！ よぉーし十兵衛！ あいつ拉致！」

十兵衛

「承知！」

静也

「ええっ!？」

星奈

「明日から特訓なのだ」

《LAUNCHER ON!》

星奈

「ここが我等が活動基地！ 18代目ルナ・ベースなのだ！」

静也

「見た目は完全に子供の秘密基地レベルだよ！ しかもなんで橋の下に作ったの!？」

十兵衛

「姐御は橋の下とかにウキウキする達なんだ」

静也

「子供思考！？ しかも18代目？」

星奈

「それは…転校とかでアレだったし…：…台風とかで壊れちゃったり…：…エキセントリックな子供達に乗っ取られたり…：…」

十兵衛

「あのガキ共…：…将来絶対に後悔させてやる」

静也

「十兵衛君が言つと洒落にならないからやめて！」

《DRILL ON!》

静也

「十兵衛君つてさあ」

十兵衛

「好きだ」

静也

「もしかして星奈ちゃんのこと」

十兵衛

「超好きだ。半端なく好きだ」

静也

「くいぎみで来たね」

十兵衛

「そんなくらい好きだって事だ。なんせ姐御は、俺の恩人だからな」

《RADAR ON!》

静也

「な…何あの怪物!」

星奈

「躰に蛇使い座……ついに追ってきたかゾディアーツ」

静也

「ぞ…ゾディアーツってなに? 僕聞いてないよ!」

星奈

「だって言ってるないもん。それよりも、今こそ超健康体の出番かもしれないな、いや、フォーゼの!」

十兵衛

「おまちくませえ。奴にフォーゼはまだ早い。ここは俺が!」

星奈

「…大丈夫か?」

十兵衛

「上等でさあ!」

《THREE TWO ONE ERROR》

星奈

「……………おい。ちょっと口開ける」

十兵衛

「……………」

星奈

「やっぱり虫歯あるのだ」

十兵衛

「すみませんんんん！！！！ やはり俺は、飴の無い生活なんて考えられませんっ！！！」

星奈

「くっ……………ここはやはり、出番なのだ超健康体！」

静也

「えっ！？ 無理だよ僕じゃあ……」

星奈

「ええいつべこべいうなのだ！ 変身したら多分大丈夫だから！」

静也

「あつちよつと！ 無理矢理やめっ！」

《THREE TWO ONE》

星奈

「おおっ！ すごいぞ超健康体！ フォーゼになれ」

フォーゼ

「フォーゼキタアーーー！！ 俺の時代い、来ちゃ来ちゃ来ちゃうよー！！」

星奈・十兵衛

「テンションが違っちゃってレベルじゃねーぞ！！？」

『仮面ライダーフォーゼ 飛翔する超健康体！』 近日公開………はしない！

オールネタです。はい、すみません。

【仮面3の低レベルグリード作っちゃおーぜ！】

《ドール！ ジャッカル！ オオカミ！》

犬系グリード・サズ。

歌は思い付かなかった。

ガメル

「メズールー！」

メズール

「どうしたの？」

ガメル

「こいつ！ こいつ飼っていい！？ 野良犬拾ってきた！」

メズール

「ガメル、前から言ってるでしょう？ 動物に限らず生物を育てるのは大変だから、簡単に拾って来ちゃダメって」

ガメル

「ごめん……でもこいつ懐いてくれたから……」

メズール

「うーん……犬とかなら、許してあげない事もないけど……」

ガメル

「こいつ犬だよ？」

メズール

「んー犬っていうか……」

サズ

「わふうん」

メズール

「グリードじゃない？」

ガメル

「犬だよ！」

サズ

「わおーん」

メズール

「いやグリードだよな？ 仮面3が考えたグリードってろくな奴いないから、凄く心配なのよね」

ガメル

「えー、飼いたい飼いたい！ こいつ飼いたい！」

サズ

「わふわふ！」

メズール

「私的には凄く嫌だわ。でも……」 チラッとサズを見る

サズ

「わふ？」

メズール

「この子だったら…大丈夫かしら？」

ガメル

「ちゃんと育てるから！」

メズール

「……しょうがないわね。いいわよ」

ガメル

「いいの！？」

メズール

「ええ」

ガメル

「やったあ！」

メズール

「ふふ、あんなに喜んじゃって。あのグリードも可愛らしく見えなくとも……」 サズに触ろうとした

サズ

「わうん」 手を弾いた

メズール

「？」

サズ

「なに触ろうとしとんじゃワレえ……」

メズール

「!?!」

サズ

「ワシに触っていいのは、ブラザーの一員だけじゃあ……次気やすく触ろうとしたら凹ますぞボケ」

ガメル

「サズおいでー」

サズ

「わふー」

メズール

「ガメル、やっぱり前言撤回していい！？　すごく危険な感じがするから！」

彼女の鈴は紅く白く美しく(後書き)

どうや？ レッツゴーでまともに書いた事あんまりないけど、酷い
だろ？

まあ、今回でリュウガこと彼女が過去に、何を体験したのかだいた
い分かっていただければ幸いです。

さーて次回はガチで探せ！ 君だけのライダー48のパロディをや
って、そのまた次回はカザリ回、そのまたはカメンジャイでもやる
うかな。

今回は将斗が女になって登場か…うん、悪くないbyメルカバ

今回はネット版オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー〜ガチで探せ！ 君だけのライダー48〜のパロディです。だから正座と血液型のは、基本的に適当ですのでご了承くださいますようお願いいたします。

どうみよ〜、ここでははじめまちて！ キバットバット・ルネサンス、ルネだによ〜。

獅子座のA型のあなちゃ！ あなちゃは仮面ライダーリオンです！ 真面目で礼儀正しく、優しくもありゆけど、ちゅよい多面性がありゆよ！ テールグリーヴァ（たてがみ）が光って複眼の色が変わったらちゅうい！

*

ある日、あなちゃは結婚の許しを貰うために、相手の親にあいにいきましゆた。

詩織

「将子さんをお嫁さんにください！」 結婚相手役

将斗改め将子

「……………しお…り…」 まさかの女役

でも、そのお父さんは…。

だりえもが予想できりゅメルカバだった！

メルカバ

「楯神よ、お前は有名な薬師の下で働いているが、まだ所詮、弟子の段階だろう。そんな収入面の問題がある奴は、例え楯神といえ信用できない。それにまだお前は遊びたい年頃。そんな奴に将子はまかせられん。結婚は反対だ！」この人だけガチ

正論をいわれちえいいかせにやい二人。

メルカバ

「結婚は二十歳を過ぎて、2〜3年はやりたいことをやり、資金を貯めて心の整理をつけてからだ！ 結婚は反対だ！ 断固認めん！ というか、将子が嫁に行ったら寂しいから認めるわけがない！」
ちよつと本音出た。

ちやいあくの事態だ！ でも、あなちゃはリオン。こんな危機はこうして乗り越えりゅよ！

《RAIINESS!》

将子

「……………!？」 部屋と詩織がいきなりリオンになった事を驚く

リオン

「僕は本能を司る獣の戦士、仮面ライダーリオン！」

メルカバ

「何故いきなり変身!？」

リオン

「お義父さん！ 娘さんの結婚を許してください！」 力押しの
闘争本能

メルカバ

「だから駄目だと言っている！ 計画性の無い結婚は破滅しか呼ば
ない！ そもそも結婚はみとめーん！！」

リオン

「確かに今は計画性が無いと思われても、仕方ないけど……けど、
僕は確かに将子さんを愛しているんです！！」

メルカバ

「愛は確かに大切だ……だが愛を語る前に、計画を持って！！ そし
てさつきから、お義父さんと呼ぶな！」

リオン

「くっ……ならこの本能で！」

テールグリーヴァ発光。闘争本能から捕食本能へ。捕食者なら攻め
るだけでなく、一歩ひいてみな。

リオン

「……お義父さんが仰るとおり、計画性がありませんでしたね。解
りました……残念ですが、今回は諦めます」

メルカバ

「ふんっ、やっと解ったか。まあ、いつ来ても許さんがな。それと
お義父さんと呼ぶな」

リオン

「だけど…だけどやはり僕は将子さんはあきらめ切れません。だから、いつかお義父さんが考える条件をクリアできたと思った時、また来ます…！」

メルカバ

「なんと来たところで結果は同じだ」

リオン

「そうかもしれないませんが…僕は将子さんを愛しているんです！！その事実は何年何十年たっても変わりません！」 一歩引いてまた押す

メルカバ

「幾ら愛があつても将子はやらん！！ そもそもお前からお義父さんなんて呼ばれた無くないわ！ 私は将子からお父さんと呼ばれたいのだああああ！！！！ 将子いや将斗と出会って早数年、私は将斗に親のつもりで接してきた。私の自己満足で親代わりをしてきたが…：… 将斗が徐々に心を開いてくれた！ とても嬉しかったが…：… 不満が一つある。なぜ将斗は一度もお父さんと呼んでくれんのだあああ！！ 何故だ何がいけないのだ！？ いいじゃないかお父さんの一言くらい！ お前達どう思う！？」 欲望 爆 発

リオン・将子

「えー…！」

メルカバは難攻不落&お父さん欲強し。

さっしゅがメルカバだにえ！ 正直過保護過ぎるとかお父さんと呼

ばれたいとか、本心がキモいにえ！ ありえ、リオンことじゃなくてメルカバね話になってりゆきが……ま、いつきゃ！さて次はリオンとの相性だよ！

リオンの相性のいいソウルフレンドライダーはヴォルフ。逆に相性の悪いデビルライダーはラハブ（フロストさん作）。何故相性が悪いのかは、フロストさんのところのコラボを見てね！ 詩織がお嬢ちゃんといわれたかりゃ！ もしあなちゃが女性なら、恋人にはスカル、結婚には鎧王がオススメだよ！ さあ、あなちゃだけのライダーを探せ！

*

こっからはちゃんと調べてキャラに合うのを調べました。ただし、ソウルフレンドライダーとか適当。

いよお、モンキーイマジンのゴクウだ。あ？ お前なんて知らないつて？ おいおいそいつはひでーな。

さーて射手座でO型のアンタ！ アンタは仮面ライダーヴォルフだ。人懐っこく明るくてみんなのムードメーカー、だが考えるよりまず動く性格と変な所で発動する警戒心の高さがたまに傷だ。それでも認めた奴には面倒見が良くなる、子供っぽさも皆のお兄さんのなタイプだ！

『カードライダーズ・ポーカーバトル』

仮面3のところにいるカードライダーズが、意地とプライドと退屈を

かけて、ポーカでバトルだ！

銀髪の完璧メイドが変身したギャレンの手札は………すげーぞフラッシュだ！

ギャレン

「（これなら…時間を止めて手を有利に入れ替えなくても大丈夫かしら）」

永遠の薬師が変身したカリスは………おお、やったなストレートだ！

カリス

「（まあまあね）」

蓬莱ニートが変身したアビスは…なんてこった！これが真の遊び人が引き寄せる運か、フルハウスう！

アビス

「（アハハハ！運すらも私の下僕よ）」

みんなすげーぞ。ヴォルフは………おっと、なにもできちゃいねえ。いわゆるブタだ。

ヴォルフ

「（アツレーー！？俺ってこんなに引き運なかったっけ！？つべーよ、これマジつべーよ！！こっとなったらアレを…）」

大ピンチ。どうするヴォルフ？

さあ！運命の時だ！

ん？ 皆カードを出したのに、ヴォルフだけカードデッキに手を伸ばしているぞ？

おっ！ あれは、アクセルベントを越えるヴォルフ専用のカード、クイックベントだ。

《QUICK VENT》

ギャレン・カリス・アビス「……………はあ！？」

ヴォルフ

「うっしっしっしー！」

どーゆー事だ！？ さっきまで良い手だったギャレン達の手札がブタになり、最悪だったヴォルフの手札が……………な、なんだってー、ロイヤルストレートフラッシュだ！

ギャレン

「ちよつと！ これイカサマでしょう！？」

カリス

「どう考えても、貴方が高速で動いて手札をすり替えたわね……………」

ヴォルフ

「し、知りませーん！ 俺の手札は最初からコレでしたー」

アビス

「嘘言っつてんじゃねーぞテメーごらあ！ クイックベントって鳴った瞬間、手札が引っ張られる感覚確かにあった！」

ヴォルフ

「ちっげーよ！ 俺じゃねーよこの馬鹿あー！！」

子供っぽく駄々を捏ねたり、どうやっても勝ちたいというガキっばさ。流石はヴォルフだ！

次は、君だけの運命のライダーを探せ！ のコーナーだ。ヴォルフの親友、相性のいいソウルフレンドライダーはリオン、逆に相性の悪いデビルライダーはオーディン。もしもあんたが女なら、恋人にはリュウガ、結婚には龍騎がオススメだ。さあ、あんただけの運命のライダーを探せ！

*

どうも皆様方、大型猫系グリードのザンにございます。

蟹座のB型の貴方様は仮面ライダー鎧王であります。マイペースで自分の身内や大切なものは何が何でも守る性質があり、その反対に敵だと感じた人には徹底的に攻撃するところもあります。好き嫌いが激しい性格ですな。大勢の人に好かれなくてもいい。わかってくれる人にだけわかってもらえればいい。本当に大事な人がいればそれでいいというタイプでございます。

【とある日のオー・s収録現場】

魅空

「こんな作品が、感想を63件も貰えているのは、あるキャラおか

げだと俺は思うんだ」

アंक

「ほう、興味深いな」

魅空

「この作品が感想が貰えているのは読者のご好意と、あるキャラおかげ……、そのキャラは基本的には変態行動とボケだが、いざとなればツッコミもしリアスにもなれる。そして本性はどす黒い……そのキャラの名は……」

アंक

「なるほど、リュウガか」

魅空

「あー確かにそうだね。変態でボケだけど、たまにツッコミやるし、前回とか珍しくシリアスだったしねー！ってそおおおおおい！
！ おしいけどそっちじゃねーよ！！ 確かに類似点多いけども、あいつどす黒くねーから！ 純粋な馬鹿だから！！ つーかそのキヤラ俺えええ！！」

アंक

「お前のおかげで感想が貰えてると、はっ」

魅空

「なに笑ってんだコノヤロー！ 風切羽切るぞゴラァー！！」

アंक

「やれるもんならやってみろ……！！」

魅空

「ああやったらあー！」 乱闘勃発

あーこちらから、喧嘩はいけませんぞ！ ああこのままでは、オー、
Sの収録が出来ず他の共演者様にご迷惑が！

と、その時！ 収録現場のドアが開かれました！

鎧王

「……………ま…てえ…」

魅空・アंक

「か、仮面ライダー鎧王」

強い癩癩を持って生まれた将斗殿は、幼い頃両親を殺害した過去があります。そして危険と判断され閉じ込められ、退屈で孤独な人生を過ごしおられました。そんなある日、将斗殿の目の前に光る球体が。そう、それがメルカバ殿との出逢いであられました。契約したメルカバ殿は、親御様をあまりしらない将斗殿の親代わりとして共に生活をしていました。そして、将斗殿の願いを、メルカバ殿は過ちを犯しながら叶えたのでございます。それが二人が鎧王となる、ビキーンズナイトであります。

ゴクウ

「ちょっとまで！ 俺は！？ 俺だって大将と契約してんでしょ！」

メルカバ

「まあ、新参者だからな」

ゴクウ

「そんな！ 大将もなんか言っつてよ！」

鎧王

「……………ZZZ……………」

ゴクウ

「寝とるがな！」

メルカバ

「あー、またこんな所で寝て…まったくしょうがないな。おぶつていくのもいいが…しょうがない。将斗よ、躰借りるぞ」

《PANZER FORM》

鎧王PF

「死してなお、神の御心が届く場所へ」

ゴクウ

「ちよ、いきなり何物騒な事言っつてんの!？」

鎧王PF

「ふむ、電王系ライダーなら誰しもが持っている前口上を、取り敢えず言っつてみた。本編では一回しか言っつてないがな。将斗も一応持っつているし」

魅空

「俺らもあんな頃があつたなあ……………」

アング

「いや無いだろ。つるんでいた時はあつたが」

魅空

「それもこれもお前が裏切ったせいだ……」

アंकク

「いや裏切ったのお前だろうっ!! 俺後ろからぐっさりいかれたぞ!!」

魅空

「うっせーなごらあ! お前はよう、人の女に手を出しやがって!」

アंकク

「はっ、?元?だろ」

魅空

「……………」

《プテラ! トリケラ! ティラノ! プットティラーノザウルスー!》

アंकク

「おい、無言で変身すんな! とうかお前、コンボ耐性弱い筈だろ!?!」

オーズPC

「いーんだよプトティラは! 本編ではいろいろあって、コレだけは無制限で使えるようになったから!」

アंकク

「いや本編そこまで行ってないだろ!」

むう、喧嘩はおさまるところか、悪化してしまいましたな。まあ鎧王殿達は自分達の世界を作り上げるのが得意ですから、仕方ありませんな。

さて次は、貴方様の運命のライダーを探せ！ のコーナーです。

鎧王殿の親友、ソウルフレンドライダーは王蛇殿。逆に相性の悪いデビルライダーはオーズ・ガタキリバ。もし貴方様が女性なら恋人にはナイト殿、結婚ならブレイド殿がオススメです。さあ、貴方様だけのライダーを探しましょう！

*

『それ行けリュウガちゃん』

アंक・魅空

「ちよつと待て！　なんかタイトルがおかしいだろ！？」

リュウガ

「むっふっふっふ！　今回の質問は一つだけ、しかも私に来てるからだよ！　私の時代キタアーーー！！　フッフウ！」

魅空

「止める！　お前、俺たちの数少ない出番をウヴァう気か！？」

リュウガ

「いや結構出番あるくね？」

アंक

「おまつ、今までレギュラーだったカザリがいまんとこ一度も出てないんだぞ!？」

リュウガ

「だってしょうがないじゃないかあ」

魅空

「似てねえ!」

アंक

「この作品のカザリにも、やっとファンっぽい人がついたってのに……」

リュウガ

「なるほど、あの人か……」

『リュウガに質問。ここに煙草吸ってる金髪な人造人間（仁）がいるけど、どうする?』by 優也（闇夜の黒鳥さん）

リュウガ

「タバコはイクない。いやマジで。あと不良とかで、タバコ使って根性焼きする子いるけど、あれもイクない。熱い、特に舌はダメ。へたしたら喋れなくなる。だから私の近くでタバコを吸う奴は、タバコを蹴って消す」

魅空

「ぶっちゃけタバコより、お前の蹴りの方が危険だと思う。前、お前に蹴られたとき木々を薙ぎ倒しながら俺飛んでいったぞ」

リュウガ

「私の変身解除時の蹴りの威力は7・5トン」

魅空

「真顔？ で嘘ゆーなよ」

リュウガ

「黙れ不人気！」

魅空

「不人気ってワケじゃねーよ！ 前回のアンケートは結構接戦だったろーが！」

リュウガ

「だったらもっかいアンケートする！？ それで白黒つけちゃう！？」

魅空

「ああやったらあー！！」

と、言うワケでアンケート。『もしも仮面3が、リュウガと魅空の素顔を公開するならどっちがみたい？ まあ、パソコンないんで実際は公開できませんけどね』。

リュウガ

「これでどっちが人気か不人気が決まる……」

魅空

「でもこれ、読者の誰かが感想でやってくれなくて、表がタメにな

「だったらどーすんだ」

リュウガ

「そのときは仮面3がコイントスで決めます！」

魅空

「ヲイ」

今回は将斗が女になって登場か…うん、悪くないbyメルカバ（後書き）

というわけで、ある意味どっちが人気かを決めるアンケートを宜しくお願いします。

しかし、今回はオグマでもやりたかったな…。でも合うような正座とかが……。

次回も宜しく御願います！

仮面3とこのカザリは地味に評判が良いbY魅空

魅空

「なあ、カザリ」

カザリ

「なに？」

魅空

「お前、K O Iするならどんな状況がいい？」

カザリ

「……ハア？」

魅空

「もしくは、告白するならどんな感じがいい？」

カザリ

「いや、急にどうしたの？」

魅空

「『想い歌・著：カザリ』って物を思い出してな。現物がもう無いから、ちよっと気になってよ」

カザリ

「止めて！ 黒歴史を引っ張りださないで！ あれはグリードカザリの過去じゃない！ 寅丸星の過去なんだ！」

魅空

「なんで？　なんでガメル？」

魅空

「それは、ガメルが唯一『想い歌・著：カザリ』を読んだからさ」

ガメル

「仮面3つて書いてあるトモダチマスクを被った人に、読んどけて言われたから読んだ！」

カザリ

「それ仮面3じゃねーか！」

魅空

「罪袋ならぬ、仮面3袋か。じゃあガメル、カザリが理想とする告白の状況、もしくはセリフを再現してみてちょ」

ガメル

「りょーかい！」

カザリ

「やめろおおおー!!」

*

……あつ、やっと来た。指定した時間より30分も遅いよ、もう。何してたの？　……ふうん、そうなんだ。えつ、用件はなんだつて？　そ、それは……さ（照）あのさ、僕達知り合ってから結構立つよね。そして色々あった……。……うー、なんか恥ず

かしいな。よし、もう簡単に言う！

カザリ

「いや言わせねーよ!?!」

魅空

「あー、なんだよオメーヨオ。なに邪魔してんだよ。迫真の演技だったよ。ガメル、迫真の演技過ぎてちよっと引いたよ?」

ガメル

「(ノノノノ)」

カザリ

「照れてんじゃねーよ! こっちはある意味 (ノノノノ) の状態だよ!」

魅空

「別に (ノノノノ) でもいいじゃねーか。そーゆーお前を見て、喜ぶ人だっているんだぜ……? 主にタスクさんとか」

カザリ

「言い方を変えればタスクさんしかいないじゃないか!」

魅空

「おまつ、下手したらあの人。仮面3キャラそっちのけでカザリ好きだぞ多分」

カザリ

「好きになってもらうのは嬉しいけども、あの子の質問、精神を内角低めに抉ってくるんだよ。最近じゃあ、僕血涙ながしたぞ!」

ガメル

「俺の存在感の無さよりマシだろ」

カザリ

「ちよつ、いきなりマジトーン止めてよ！ びっくりしたなもう！ 君仮面3のところでは、幼い系のキャラで通してるんだから！ アクセントが伝わりにくい小説で俺だとなんか、なんかがごっちゃになるから！」

魅空

「ガメルー、あんま俺とか止めようか。なんか、俺もなんかあれになるから」

ガメル

「あい」

カザリ

「というか、なにこのハイペース。もう疲れた……精神的に」

魅空

「なぜ、こんなハイペースかしりたいかねダッチ フ」

カザリ

「ダッチ フじゃないし!!」

魅空

「じゃあ……ラブ ル？」

カザリ

「ラブ ルでもねーよ！ ああもう！ 君久々に卑猥語連発するねえ！」

ガメル
「ラブ ル？ ダッチ フ？」

魅空
「知りたいかね？」

カザリ
「教えんな！」

魅空
「カザリ美少女型愛玩ペットが欲しい方は此方まで！ ×××」

カザリ
「卑猥アイテムの販売か！？ 早くハイペースの理由教えてよ」

魅空
「それは……俺がイライラしてるからさ」

カザリ
「イライラ？」

魅空
「この会話を覚えているか？」

*

リュウガ

「黙れ不人気！」

魅空

「不人気ってワケじゃねーよ！ 前回のアンケートは結構接戦だったろーが！」

リュウガ

「だったらもっかいアンケートする！？ それで白黒つけちゃう！？」

魅空

「ああやったらあー！」

と、言うワケでアンケート。『もしも仮面3が、リュウガと魅空の素顔を公開するならどっちがみたい？ まあ、パソコンないんで実際は公開できませんけどね』。

リュウガ

「これでどっちが人気か不人気か決まる……！」

魅空

「でもこれ、読者の誰かが感想でやってくれなくて、表がタメになつたらどーすんだ」

リュウガ

「そんなときは仮面3がコイントスで決めます！」

リュウガ

「ハァーハツハツー！！ みたかこらあ！ これが私の人気さ！
かー！ーっ！！ テンションマジあげばよー！！ アンケートや
つてくれた人の前で脱いでもいいよ！！」

カザリ

「あつ、リュウガ」

リュウガ

「ヒヤハハハ、地の泥の味はどうだい魅空くうくん？ それが敗者
の味だよ！ 負け犬の味だよ！！」

カザリ

「うっわキャラ違う」

魅空

「フハハハハツ、そんな味は過去幾度も喰ろうてるわ！ しっかし
い、テメーに大差付けられ負けたってのは認めたくねえ！ つー
か認めねえよ俺。今日の歴史をボツシユートするよ！！」

リュウガ

「無理ムリ。この事実は消えないよ。この作品があるかぎり、
君は辱めを受け続けるのさこの不人気！」

魅空

「不人気じゃありまっせん。イラスト描いて貰いました。ちょ
つとは見てくれてる人います」

リュウガ

「残念でした。私だって描いてもらってるもーん！」

魅空・リュウガ

「詳しくはタスクさんの活動報告をチエケラ！」

カザリ

「今回タスクさんの名前よくでるね」

リュウガ

「あっ、そうそう。今回私出てきたのは、ペナルティを伝えにくる為だったのだよ」

魅空

「ハア？ ペナルティ！？」

リュウガ

「イツエース！」

魅空

「ペナルティって聞いてねーよ！」

リュウガ

「だって仮面3が急に思い付いたんだもの」

魅空

「ハアア！？ 。 。 # (ビキビキ」

カザリ

「で、ペナルティの内容は？」

リュウガ

「嫌われてる奴は約3話、出るの禁止」

魅空

「ワーーーーッツ!?!」

リュウガ

「むっふっふっ、次と次の次と次の次まで出れないから、せいぜい今回のオー・sを楽しみたまえよ。そりじゃ、アデュー!」

魅空

「あっ、待てゴラァ!」

カザリ

「……………」

ガメル

「……………」

魅空

「……………」

カザリ

「……………オー・s、行こうか」

魅空

「……………ちくしょう……………」

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコ

「ナーである！」

『オリキャラ達に質問だ。原作のライダーになれるならどれになりたい？』by仁（闇夜の黒鳥さん）

魅空

「初っぱなの質問オリキャラ全体じゃねーか！俺の影薄くなる！」

狼夜

「ファイズ」 中身が狼つながり

詩織

「タイガか西鬼」 猫科

将斗

「王蛇」 別世界のダチ公

イマジン、sはデイスる。

リュウガ

「龍騎」 なんとなく

フヨウ

「……ファム？」 なんとなく

若葉

「電王」 モモタロス等がなんかいい。

掩樹

「歌舞鬼さん！」 弟子

二号

「クウガ。もつといえぱペガサスフォーム」 R18目的

櫻

「興味はない」

赤音

「ZO」 なんとなく

飯純

「V3」 なんとなく

ジョージ

「ゾルダ」 拳銃ヤツホーイ

おばちゃん

「BLACK RX」 チートヤツホーイ

こめり

「J。宿敵は響鬼」 カツパの怨みじゃあああ!!

サク

「G4」 拳銃ヤツホーイ2

魅空

「お前ら淡々とやってんじゃねーよ！ 今俺すっごい影薄いからね！ 因みに俺はカブトになりたいとです！」 真のイケメンになりたい…！

『魅空へ質問。ノーマルフヨウ、アंकフヨウ、メズールフヨウ。この中で一番耳たぶを美味しく感じるのは?』byタスクさん

魅空

「どーせアंकのは鶏ガラ味だろ。つかあ、フヨウに憑いてんじやねーよアंक。鳥独特の臭いが伝染る」

アंक

「伝染すると書いて、うつると読んでんじやねえ」

メズール

「というか、タスクさんの質問高確立ギリギリよね。この作品の年齢制限レベル的な意味で」

フヨウ

「(*/＼*)」

魅空

「しっかしこの質問、どう答えればいいんだ…? 実証するのが一番だが、描写が大変な事に。メズール姐さんのは、魚介類の味が…」

メズール

「え?」 放水準備

魅空

「すみません」

フヨウ

「でも……どうする?」 正直やりたくない

魅空

「じゃあ、音声だけで行つとく？」

カザリ

「止める！ 逆に生々しいわー！」

A・やっぱり実証は無理でした。

『グリッド達へ、このヤミーからとれたセルメダルは取り込みたくないなっと思つのは次の内どのヤミー？ 1、カマドウマヤミー 2、カメモシヤミー 3、ゴキブリヤミー』 by タスクさん

殆どのグリッドの皆さん

「うっわー」

ウヴァ

「なんだその、うっわー、は！ いいじゃないか昆虫！ 子供達の憧れのまただぞ昆虫はー！」

カザリ

「いや…あの、緑の人。昆虫は昆虫でも、上の部類は敬遠される昆虫ですよ緑の人」

ウヴァ

「そうだが、ゴキブリはかなり清潔な昆虫だぞ！ といつかカザリ、お前敬語止める。距離を感じる！」

アंक

「俺はどうしてもならば、カマドウマヤミーがいい」

ガメル

「ベンジヨコオロギヤミーがいのの？」

アンク

「別名を使つな。軽く吐き気がする」

ウヴァ

「んだとゴリアー！！」

アンク

「カマドウマは、頑張ればバツタに見えるからなんとかなる」

カザリ

「ああ、鳥類はバツタ食べるからね」

ウヴァ

「食わせん！ 食わせんぞ！ 俺のバツタヤミーは食わせんぞおお！」

カザリ

「じゃあ僕もカマドウマヤミーかな……」

アンク

「たまにバツタ食べるからな。野良猫とか」

メズール

「じゃあ私もカマドウマヤミーで」

カザリ

「うん、魚がよく……」

ウヴァ

「食うか食わないかじゃないの！ セルメダルを取り込むか取り込まないかの問題なんだよ！ ああもう！ 俺の昆虫の部分が恐怖を感じている！」

アング

「誰にも憑依してないグリードが恐怖とか。というか、お前純度100%の昆虫だろ」

ザン

「と、なると自分もカマドウマヤミーになりますかね。自分も大型猫科なので」

サズ

「わん」

ヤブル

「俺はあ、オールでオケイ。アハン」

ヤブサカ

「おらあ、ほ乳類だけでもおーん魚も入ってからベンジョコオロギだあ」

アング

「あつ、そう言えばお前のクジラ、今冬の映画で出るな。というか、なんでお前の頭イルカ？」

ヤブサカ

「イルカは、時としてサメよりも凶暴なんだあ。おつかねえんだぞ」

カザリ

「へえー」

ウヴァ

「DAKARA！ 食つか食わないかじゃねーし、今冬の映画のポセイドンの話じゃねーし、そもそも食いたいならどれがいいかでもねーよ！ どれが一番嫌かなんだよ！！」

ガメル

「俺は昆虫より果物がいい！」

ウヴァ

「もう頭弱い奴ばっかりだコンチクショー！！」

A・皆カマドウマヤミーが良いそうです。

「魅空に質問です。『映司が変身した真のタトバコンボに対し、あなたは普通のタトバコンボで戦わなくてはなりません。おそらく絶命するでしょう。ただし勝てば願いが無限に叶い続けます。yesかnoでお答え下さい』」byk.iさん

カザリ

「これは…無理じゃないかな」

魅空

「フハハハハッ、不可能だと思うだろ！？ だああがあ、俺はやる。やっちゃおうよ！！」

《タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！》

カザリ

「珍しいね。君無謀な事は絶対にやらないで、傍観決め込むのに」

オーズTC

「無謀？ 確かに無謀だ。正攻法じゃゼッター勝てねーわ。だけでもだっけつど、この俺が、この魅空様が！ 正々堂々と闘うと思っ
てんのかなああー！！」

カザリ

「あー……」

オーズTC

「多分だれも覚えてないが、俺だつて作れるんだよヤミー！ いつもはセルメダル勿体ないから作らないけど」

昔、メダルを手に入れる度躰に入れてたから、一応ヤミーを作れるようになった。

カザリ

「だけどセルメダル自分で作れないから、強いヤミー作れないじゃん」

オーズTC

「それはいわんとして。だがあ、数で気を引く。そして俺には、皆忘れてるだろっけど魔審器がある！」

魔審器。厨二臭溢れるロストアイテム。簡単に言えば魔力とかなんやらか籠められた拷問道具。108個あったが、フロストさんと

この錬矢に1個上げた為現在107個。

オーズTC

「ここはレッツゴーだから無制限に使えるぜキャツホオオー！
！もっちろんやるぜイエース！！」

カザリ

「あっ」 何かを見つける

オーズTC

「他の作品のオーズより弱いと言われるんですけどあ、それなりのチートアイテムは持ってますよ！でも躰の中にしまってるからゴロゴロする。あと、日乾ししないとたまに臭い」

カザリ

「……………」 避難

オーズTC

「ハッハッハア！勝てば好いんですよ勝てば！世の中は強者が弱者を食う！世の中のせつ…………？」 背中ごしに肩を叩かれる

モノホン・オーズ

「……………」 ゴゴゴゴゴツ！！！！ ジャリ剣&ガブ斧装備

オーズTC

「……………」 えっ？

カザリ

「魅空、ガンバツ！」 本格的に避難

オーズTC

「おいちよつとまでごキャンッ!」

いやちよつまつゴブツ! はやははい来るのはやつギャヒン!!
無言、無言止めてこわいアヒンッ!!!!!!! ギャアアアア
アアアアアア!!!!!!!

《スキヤニングチャージ!》

A・やっぱ無理でした (笑)

『フヨウちゃん、同じバースとしてちよつと組み手してみるか?
大丈夫、間違つてもちゃんと映姫と小町が送り返してくれるから!』
by小十郎 (フロストさん)

フヨウ

「魔法を使つていいのなら」

アंक&魅空

「六天冥王 (シックス・ザ・プルートー) か」

カザリ

「うっわ厨二臭っ!」

魅空

「いやな、仮面3がおもいつきり厨二病な技を作つてみたいと思つてたら、フヨウが標的になった」

カザリ

「酷っ!」

魅空

「でも強いぞ？ こっちの時代に来る前にフヨウと闘ったんだが、その時に骨を約53本折られて、臓器が4つ破裂した」

カザリ

「その傷が完全回復してる君の方が凄いと思う。どんな魔法なの？」

アंक

「ある意味契約した精霊の召喚だ」

名前は最近決まりましたが、フヨウを考えた時からこの設定はありました。

魅空

「契約の代償は、悪意。だからフヨウは、ある時期から他人に悪意を持ったことがない。マジギレしても、悪意がない空っぽの状態だからな。逆にこえよ」

カザリ

「えっ？ なにこの感じ？ なにこのマジな感じ？」

魅空

「じゃあコメディ風に言うとフヨウは厨二病の塊ってこった。敢えてシリアスにいうなら、フヨウは悪意を持ってない存在なんだ」

アंक

「以下、六天冥王を形成する六体」

・六天冥王・獣絶王（ガルヴァ）

・六天冥王・鎧鬼王（ダキニ）

・六天冥王・貴銃王（ジエントルマン）

・六天冥王・呪猿王（コイコイ）

・六天冥王・梟女王（ストリガ）

・六天冥王・魔神王（オルク）

カザリ

「冥王って名前の奴一体もいないー!!」

魅空

「まつ、そこは仮面3の力不足っしょ」

『ふむ、そつちの俺達の戦闘力はどのくらいだ？因みに俺は湖の上を何の装備も無し走れる』byウヴァ（フロストさん）

魅空

「ハッハッハ、ぶっちゃけこいつら、緑の人以外雑魚です」カザリにコブラツイスト

カザリ

「いだだだだだだ!」

魅空

「緑の人とアंकはメダル全部復活してるが、こいつらメダル全部復活してないからな。しかもアंकは俺がまだメダル数枚持つてる

し。よく本編でカザリに指折られてるけど、あれは基本的にわざとくらってます。すぐ治るから」

カザリ

「説明しないで技解いてよ！」

魅空

「このままエロい事をしてもいいのよ？」

カザリ

「止める！ とうかフヨウの時は躊躇してたのに、なんで僕には躊躇しないの！？」

魅空

「いやだってお前、そーゆー立ち位置じゃん」

カザリ

「どーゆー立ち位置だ！？」

*

魅空

「……………畢っちまった」

カザリ

「なんで無駄にかっこいい漢字使ってんの」

魅空

「……………終わっちまった。あと……………二話くらいでれない……………！」

カザリ

「まあその……………アレだ。泣くな」

魅空

「泣いてねえよ！ 全然泣いてねえよ！！」 泣き

カザリ

「……………」

ネタの使い回しは勘弁してくれbyゴクウ(前書き)

今回も、ネット版オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー〜ガチで探せ！ 君だけのライダー48〜のパロディです。出るライダー達はあみだ……厳選なる審査で決めました。

ネタの使い回しは勘弁してくれbyゴクウ

いよお、モンキーイマジンのゴクウだ。いい加減覚えてくれたか？
あつ？ お前はいいからカザリ出せつて？ お前ら…。

さーて、O型で牡牛座のあんた！ あんたは仮面ライダーディフェルだ。ディフェルは好きな物にのめり込み、周りが見えなくなつてバカやっちまう事が多々ある。だが、逆境に強く、芯もしっかりとっていて筋を通し、自分を貫くぞ！ 言うならば、いつもはのほほんとしていてるが、相談とかはしっかりと聞いてくれるタイプだな。だけど知ってるか？ 牡牛座の奴つてな……大半がムツツリスケベなんだぜ！

『カードライダーズ・ポーカーバトル』

仮面3のところにいるカードライダーズとディフェルが、意地とプライドと退屈をかけて、ポーカーでバトルだ！

銀髪の完璧メイドが変身したギャレンの手札は……すげーぞフラッシュだ！

ギャレン

「（これなら…時間を止めて手を有利に入れ替えなくても大丈夫かしら）」

永遠の薬師が変身したカリスは……おお、やったなストレートだ！

カリス

「（まあまあね）」

蓬莱ニートが変身したアビスは…なんてこった！　これが真の遊び人が引き寄せる運か、フルハウスう！

アビス

「（アハハハ！　運すらも私の下僕よ）」

みんなすげーぞ。ディフェルは…おとととお、ワンペア。こいつあキツいぞ。

ディフェル

「（大丈夫だ…落ち着け。まだあの手がある。ガチで探せ本編でやったあれがある！）」

大ピンチ。どうするディフェル？

さあ運命の時だ！

ん？　ディフェルだけカードを出さずに、ライドブツカーヘヴンに手を伸ばしているぞ？　あっ、あれはディケイド系のライダーが持つ、影分身のカード、イリユージョン！

《ATTACK　RIDE　ILLUSION!》

ディフェルが3人に分身したあー！

ディフェル

「フッフッフ、これでシックスカード、スリーペ…えっ？」

ん、ディフェルの言葉を遮って他の奴らが立ち上がったぞ？　そし

ておのおのカードを取り出して…。

《TORNADO》

《BULLET/FIRE》

《SWORD VENT》

おお！ カリスの風の矢がディフェルの分身Aを貫き、ギャレンの炎の銃弾がディフェルの分身Bを撃ち抜いて消滅させた！ そしてアビスは何故か本体を攻撃…！！

ディフェル

「グハアッ！」

カリス

「だいたい予想してたわよ。貴方の行動」

ギャレン

「前回、イカサマをして認めなかったバカ狼がいたから警戒してたのよ」

アビス

「イカサマの罪は重い」

ディフェル

「＼(＾p＾)／」

うーん、これはディフェルらしい……のか？ なんか違う気がするが…まあいっか、だって士だし！ もうレッツゴーでは士の扱いこ

んなんだし！

次は、君だけの運命のライダーを探せ！ のコーナーだ。ディフェルの親友、ソウルフレンドライダーはスピリア ウィンディーネフォーム。逆に相性の悪いデビルライダーはオーズ（変態）。もしあんたが女性なら、恋人にはスピリア フラウフォーム、結婚にはディカエルがオススメだ。さあ、あんただけの運命のライダーを探せ！

*

どうも皆様方、大型猫系グリードのザンにございます。

さて、O型の蠍座の貴方様は仮面ライダーリバースでございます。蠍座は異性にモテる星座ともいわれ、それを裏切らない男前でございます。恋愛面でも一途であり、大らかです。しかし、感情のセーブが上手くなかなか怒りをみせませんが、一度怒ると手を付けられません。まるで暴走されるかの様に。怒らせなければ、引っ張ってくれる大人のお兄さんというタイプが、リバースであります。

ゴクウ

「兄貴ー、今日誰か来るって言ってたけど、誰が来て何をすんだよ」

メルカバ

「ふむ、今回はネット版オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー〜ガチで探せ！ 君だけのライダー48〜の、ラッキーフードのパロディをするんだが、リバースこと伊吹が協力してくれるらしい」

ゴクウ

「ってことはリバースは、ラッキーフードを受け取るライダー役でことか」

メルカバ

「そついう事だ」

リバース

「こんにちはー」

メルカバ

「おお、よく来たな伊吹。早速で悪いが、料理を準備やセッティングをするから座って待っていてくれ」

リバース

「はい」

メルカバ

「ゴクウ、行くぞ」

ゴクウ

「えっなに！？もしかして俺もやるの？」

メルカバ

「もしかしなくても、当たり前だろう」

ゴクウ

「マジか」

〜数分後〜

メルカバ

「待たせたな」

ゴクウ

「意外となんとかなった。そこで、リバースのラッキーフードついたら、やっぱこれだろ。スパゲッティしかない！」

リバース

「ゴクウさん…貴方料理できたんですか…？ 猿なのに！？」

ゴクウ

「猿の惑星観てこいや。猿への偏見なくすから」

メルカバ

「ゴクウよ、何故それを選んだ？」

ゴクウ

「だってそりゃあ、リバースこと健が奥さんと素顔で対面した記念すべき料理だろ。ある意味印象的だ」

リバース

「確かにそうですが…おいしいですね。貴方の料理には大事なモノが足りない」

ゴクウ

「あっ？ 足りないモノなあ？」

リバース

「はい」

メルカバ

「よし、次は私だな。私が用意したのは、スパゲッティだ」

ゴクウ

「なんだ、俺と一緒にじゃん」

メルカバ

「確かに料理は一緒だが、籠めているモノは違う」

ゴクウ

「はあ？」

メルカバ

「ああ、それは……」

リバーズ

「想い…ですね」

ゴクウ

「？」

メルカバ

「そう、料理は正確に調味料を加えるだけでは駄目だ。想いを加えることで、より高い次元に行くことができる。思いやりは、空腹に並ぶ最大の調味料。感情がない、相手を敬う気持ちが無い料理には物足りなさを感じるものだ。私はこのスパゲッティに、伊吹の過去の記念だけではなく、今食べてもらう彼の事を考えて作った」

リバース

「その通り！ やはり料理はただ作るだけじゃなくて、相手を想って作るべきです！」

メルカバ

「おお、お前なら解ってくれらると思っただぞ！」

リバース

「はい！」

ゴクウ

「……………なあ、大将。ここいつから料理小説になった？」

将斗

「メルカバは……………料理……………命……………をかけ……………てる」

料理は作る相手でもさしく千変万化。やはり男性が異性にモテるには、愛情が籠もった料理が必要ですね。料理は感情がよく表れる故。健殿の奥様が、彼を選んだ理由も、なんとなくであります。解るきもします。

さて次は、貴方様の運命のライダーを探せ！ のコーナーです。

リバース殿と相性が良いソウルフレンドライダーはスーパー1殿。

これは仮面3殿が、なんか相性いいかもー、と思っただけではありません。そして逆に相性が悪いデビルライダーはオーズ（変態）。

まあ……………これは……………いたしかたない。やり過ぎた過ちが多々。もし貴方が女性なら恋人にはミゼン殿、結婚にもミゼン殿。

リバースにはこれしか思い付かなかったぜ！ というか、これ以外

選んだら怒られる気がするby仮面3

*

こういった役職ではお初にお目にかかる。メルカバだ。本来ならばキバットバット・ルネサンスがこれをやるはずだが、仮面3があいつの喋り方を嫌っている為、私になった。

さて、O型の牡牛座のお前、お前は仮面ライダー逆鬼だ。今回はO型や牡牛座が多いが、気にしない事が賢い判断だ。O型によく見られるのは単調で短絡的な面だが、裏を返せば人の為に直ぐ行動にうつせる。さらに普段は抜けている面があるが、時折見せるシリアスな顔や大人びた雰囲気におちる女性も多数いるだろう。だがO型は嫌われる中年の代表格なので、気をつけるべきだ。今回出てきたO型で一番中年に近い、というか中年なのは逆鬼だな。やり過ぎ厳禁だ。

アंक

「いきなりだが、仮面ライダーオーズで根強い人気があるグリードは、やはりこの俺アंकだと思う。最終回のおかげかこのサイトで、主人公として扱われている作品が多数あるしな」

カザリ

「いや、人気があるのはやはり僕でしょう。あそこまで気持ちが良い程の悪役はなかないでしょ」

アंक

「いや、それはない。確実にお前は嫌われてる。悪役だけじゃ意味

このままでは鷹のフライングキャッチで子猫の儂い命が……。

と、その時！

サカキ

「待て」

アंक・カザリ

「か、仮面ライダー逆鬼！」

仮面ライダー逆鬼ことサカキは、戦国時代の音撃戦士である。ここでもたまに出てくる歌舞鬼と同じ時代に居た鬼だ。だがとあるきっかけで現代にタイムスリップしてきたのだ。但し、実年齢より若返つてた。そしてとある少女に出逢い……まあそれは自分の眼で確かめた方がはやいだろうな。

サカキは鬼だが、知ってる者ならば？牛？の印象も強いだろう。牛鬼になったり、ディケイドのFFRでまた牛になったりと色々大変な思いをしたからだ。ゾルダやゼロノスとはまた違う印象を持つ、隠れた牛の印象を持つライダーである。

アंक

「牛か……頑張れば牛のグリードが作れそうだな」

逆鬼

「いや作んなくていいから。めんどくせえ」

《バイソン！ バツファロー！ スイギユウ！》

逆鬼

「やりやがった！」

カザリ

「いやいや、流石に仮面3もアイディア不足で本格的にやらないから」

逆鬼

「しかし、ここの作者は変な情報やら知識は無駄にあるな…」

カザリ

「仮面3、昔友達がいなくて図書室の本の9割は読んだからね。知識だけはあるよ」

逆鬼

「仮面3は友達が少ないってレベルじゃねーぞ！」

アंक

「それに比べてお前は……リア充乙」

カザリ

「こゆいキャラにモテて幸せそうだね！ W」

逆鬼

「最後のWはなんなんだよ！？ そしてこゆいキャラはたまに怖いんだよ！」

カザリ・アंक

「こつちのこゆいキャラはウザいんだよ！」

ウザい人代表、リュウガ&変態。

逆鬼

「そう思うとこっちの方がまだマシだね！ ゲラゲラゲラゲラゲラ！」

カザリ

「そんな風に言っただったらもう一回、そっちに変態送り込もうか！？」

逆鬼

「断る。あいつが来るたび、女子キャラからクレームがめっちゃくるから」

アंक

「だけど逆に、お前らドSコンビはストレス発散にちょうどいいだろ？」

逆鬼

「まあね！」

正直、私もあの二人の相手はしたくないな。コラボの時、楯神が止めてなければどうなっていたか…、いやはや恐ろしい。だが、将斗に悪影響を与えるようならば、スイッチの入った若葉をそっちに送るぞ…？

既にフロストさんところの王蛇によって、将斗にはSとマヨラーの種子が打ち込まれています。

まあ、将斗に新たな友人を与えてくれた事には感謝はしている。礼を言おう。

さて次は、君だけの運命のライダーを探せ！ のコーナーだ。逆鬼の親友であるソウルフレンドライダーは王蛇。まあ悪友と言えはいのだから。逆に相性の悪いデビルライダーは、リュウガ。もしもお前が女性なら恋人にはキックホッパー、結婚にはキバがオススメだ。さあ、お前の運命のライダーを探せ！

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『みんなに質問。魅空のことをどう思ってるか魅空への渾身の一撃付きで教えて』 by 竜王の白翼さん

カザリ

「この質問は……どうする？ 魅空はまだ出れないよ」

アंक

「何言ってるんだ。こういう時の2号だろ。あいつはこういう場面の為に、生まれたんだからな」

カザリ

「あつ、そっか。そーゆー事なら2号とオリキャラキヤモーン！」

2号

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！！ イエイ、俺自身の登場は久しぶりだぜえい！」

狼夜

「そーゆーテンションが、俺とちよいかぶってて嫌い」 ハイキック

2号

「ぶぼっ!?!」

詩織

「主に全てがキモい」 スマッシュカット

2号

「おぶっ!?!」

将斗

「なんか……や……だ……」 上段疾風突き

2号

「べぶっ!?!」

メルカバ

「将斗に悪影響」 ピンポイントヘッドショット

2号

「へっ!?!」

ゴクウ

「流石に俺でもテンションが無理」 捻糸棍

2号

「おぼっ!?!」

リュウガ

「全てが嫌、マジで」 諸手猿臂飛び膝蹴り

2号

「あひん」

若葉

「ある意味震えが止まらないっス」 隼斬り

2号

「あふん？」

フヨウ

「えーと、私はパスでお願いします」

2号

「ちっ」

アंक

「死滅すればいいんだ」 真爆熱スクリユー

2号

「かぼすっ！！」

カザリ

「ほんっつとに消えて」 真グラディウスアーチ

2号

「ありがとうございますっ！……」

ガメル

「わーい！」 意味が分かってない

2号

「わーい！」

メズール

「セクハラは止めてほしいと思うわ」 ザ・タイフーンV3

2号

「ありがとうっ！！」

ウヴァ

「お前のせいでええ！」 天空落とし

2号

「ひぎゃんっ！！」

キヨちゃん

「私もパスで」

2号

「ちっ」

長いし、ネタもなくなってきたので、他の奴はディスプレイスる。

『しつもん、そっちの俺はお菓子や魅空関連以外で好きなのは何？』 byガメル (鳴神 ソラさん)

ガメル

「お菓子と欲望と金」

カザリ

「もう無理。もう限界。君は誰だ！？ ガメルって名前の何かだよ
ね絶対！！」

ガメル

「いいか、金は命より重い」

カザリ

「どこのカイジもどきだよ！？ いや言った人カイジじゃないけど
も！」

ガメル

「ザワザワ、ザワザワ」

カザリ

「口で言えばカイジっぽいと思うなよ！」

ガメル

「鼻と顎が長くなった

カザリ

「うおお！？ カイジ、もしくはアカギイラスト！？」

ガメル

「ようこそ、負け猫の諸君」

カザリ

「なに今回のガメル、カイジ一色！？」

「今回もグリード達に質問です。3ヶ月バイトしたらセルメダル1万枚もらえるとしたら、薪を手刀で割ることを要求されるような男気溢れるラーメン屋でバイトしますか？」byタスクさん

カザリ

「なにそれ超行きたくないんですけど」

アंक

「なにそれ超やりたくないんですけど」

ウヴァ

「知ってる人には地獄だな。超嫌なんですけど」

ガメル

「チヨォー！」

メズール

「私達、仮面3のところでは髪の毛がメダル3色に染まってからピョンチなのよね。超無理なんですけど」

ウヴァ以外メダル3色に染まっています。

カザリ

「あれ、そう言えば今日、リュウガがラーメン屋のバイトの面接に行くって……」

ガッシャアアーン!!!!!!

リュウガ

「いつてらっしやい緑の人」

ウヴァ

「嫌だああ！ このまま行ったら俺は確実にスカイヘゴーしてしま
う！」

カザリ

「薪を手刀で割るだけですよ、グリードなら簡単でしょう。ホラ、
緑の人本編でセルメダル沢山集めればコアメダルに匹敵するとか言
つてたじゃないすか」

ウヴァ

「止める！ 嫌だ…俺は嫌だあ！ うえへえ」

メズール

「あ、ヘタレモードに入ったわね」

森脇

「オラ、スキン！ サル！ もっと気合い入れて薪を作れ！」

魔王

「いや無理ですよ森脇さん…もう魔王手首ぶらぶらですもん！」

サル

「ちくしょう…酒飲んでえ…タバコすいてえ…ピチピチギャルの乳
揉みてえ…」

森脇

「うだうだ言っつてねえでさっさとやれや！」

魔王

「ひいーーーーー!!」

サル

「うきやーーーーー!!」

ウヴァ

「ほら！ 魔王とサルもかなりやつれてるじゃないか！ サルに關しては殴られて、ミツキー ウスみたいになってるぞ!!」

アंक

「いいから…行けって言うてんだろ!!」 ウヴァの背中を蹴る

ウヴァ

「ぬわああ!!」

森脇

「ウチは髪染めたヤツは出入り禁止つってんだろ！」 男氣溢れる
右ストレート

ウヴァ

「ぬわああああー!!!!!!!!!!」

ガメル

「おお…トリプルアクセル」

A・セルメダル少なくてもいいから、もっと優しい上司がいる職場を教えてくださいbyグリード一同。

『リュウちゃんってタバコ駄目みただけど、キセルとか葉巻も駄

目なのか？

あと一番好きなプレイを教えてください』b y 錬矢 (フロストさん)

リュウガ

「んー…ちゅーかねえ、タバコと葉巻の煙、詳しく言っちゃえば臭いが無理なのだよ。どーもあの臭い嗅いじゃう…とね。やーな思いうやらんやらが、フラッシュバックしちゃうわけなんですよ」

カザリ

「いや、シリアスになってるところ悪いんだけど…頭から血が流れてますけど」

リュウガ

「ハテ、ナンノコトヤラ？」 マスク貫通してダラダラダラ

カザリ

「さっき殴られて衝撃で血が噴き出してるよね。もう頭が複眼並みに真っ赤なんだけど」

リュウガ

「因みに好きなプレイは、意外にもちよいSMプレイだよ！」

カザリ

「ホントに意外だね。なんでさ」

リュウガ

「理由きいちゃう？ これを聞くにはノクターンに行くことになりますよ…？」

カザリ

「やっぱりいいです。ごめんなさい」

『カザリに質問。理想とする告白の状況で、一番良いと思う状況は何？』by美優（闇夜の黒鳥さん）

カザリ

「ハアア！？別にそんなんねーしい！！」

アंक

「お前、もう諦めるよ。他の奴らも知ってるんだからよ」

カザリ

「黙れ！鳥黙れえ！！」

アंक

「……………ガメル」

ガメル

「んー？短く告白して、直ぐチューとかも書いて」

カザリ

「ねええー！よおお！！
！」
「そんなの書いてねええー！よおお！！！！」

アंक

「見苦しい奴」

ガメル

「おお、哀れ哀れ」

ネタの使い回しは勘弁してくれbyゴクウ（後書き）

今回出てきた森脇ラーメンのキャラクターは、東谷文仁先生作：黒いラブレターという作品のキャラクターです。

キャラクターがこゆいなんてレベルじゃありません。東谷先生に比べれば、私のキャラクターなんてケチなオカンが作ったカルピスです。東谷先生が描くキャラクターの濃さは、銀魂並みかそれ以上です。99%の原液カルピスの様な濃さです。興味を持たれてお金に余裕がある方は是非、お手にとってみてください。

あの子なりに頑張ってるんですby詩織

キャラクター注意書でのコメント。

『ウラちゃんさん (仮)』 今回もレッツゴーから考えてみると。

一人目の飼い方に二人目の登場があるということは、レッツゴーでの登場があったということ。ならば、ヴォルフの人とリオンの人でしよう。パロディのやつに詳しく載ってましたし。

『最近人気急上昇してきてる人。やっぱディケイド系の説教が人気の秘密なのかさん (仮)』
『詩織しかわからなかった私はオワタ……』
ヴォルフの人なのは戦隊ごっこですぐわかりましたが名前が出なかった…

詩織はある意味印象に残ってます。

私が一番最初に知った貴方のキャラなので。

通常 月見狼夜II仮面ライダーヴォルフ。

一部の読者さん 月見狼夜<仮面ライダーヴォルフ。

もしかしたら 月見狼夜 仮面ライダーヴォルフ。

仮面ライダーヴォルフの方が方が印象が強い。

月見狼夜の方が影が薄い。

つまり、ヴォルフとして存在していれば、狼夜自身の存在はいらない。というかいなくても大丈夫。

狼夜

「こんちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおうおおおおおおおオオオオオ!!!
!!!」 ビルの屋上でシャウト

リュウガ

「ここでの、変身解いた状態でまともな登場が今回初のオオカミ君」

狼夜

「キヤラとして影薄かったら、生きてる意味ねーじゃん！ 死んでも生きてても一緒じゃん！！ ちくしょおおお！！ もう死んでやる！！ こっからダイブして死んでやるよ！ どーせ俺が死んだって誰も気にしねーよ！ ゆっくり達の世話はヴァンに任せて死ぬー!!!」

リュウガ

「そして現在修羅場なう。じゃすとなくう」

詩織

「馬鹿な真似は止める狼夜！ 君が死んでもなんにもならないぞ！」

狼夜

「ああ……確かになんもなんねーよな。誰も気付かないだろうし……」

リュウガ

「うわぁ……元気ボーイ性格の筈なのに真っ青だよ。テンションがペ

ンキみたいに真っ青だよ」

詩織

「だけど君が死んだら僕は悲しいよ！ 僕だけじゃない、友達の将斗や他の人達だって」

狼夜

「いや友達だけでも…将斗いねーじゃん…止める気すらねーよ…」

詩織

「将斗しかたないんだ！ 将斗は今回のテンションに、自分のキャラ設定じゃついていけないと判断して、涙を飲んで辞退したんだ！」

狼夜

「なんであいつ、こーゆー時は空気が無駄に読めるんだ！？」

リュウガ

「バードさん流、世渡り術ハンパねっす」

狼夜

「っーかりユウガはなんでいんだよ！」

リュウガ

「こーう、アレですよ。現段階で二人だけだったら、間がつかないからね。銀魂的に言う神楽ポジション」

狼夜

「お前じゃ定春ポジションも勤まらねーよ！ よくてジャスタウェイだから！」

リュウガ

「酷いニャー (T T)」

詩織

「ちょっとリュウガ、黙っててくれませんか？ ぶっちゃけウザいです」

リュウガ

「えー、折角新キャラ確立させようと思ったのに」 活動報告でタスクさんに、ある意味猫耳と尻尾の栄誉を与えられた

詩織

「タイミングを考えてくださいよ。ああもうイライラするなあ！」

リュウニャ

「リュウニャだにゃん。よろしくにゃん、にゃんにゃん^^・・
^||?」

詩織

「ウツゼエ。というか急に変身解かなくてくださいよ。しかも白い猫耳と尻尾付きだし」

リュウニャ

「しおりん、ここと口悪いにゃん ;」

詩織

「誰だつてそうなりますよ、貴方の相手は。仮面3の知り合いでも貴方と会話してイライラしないの、鍊矢さんだけですよ、たぶん。そして猫科関係は僕とカザリとザンだけで十分です」

ヴォルフの人&緑の人

「ハア……………」

緑の人

「最後にお前と話せて良かったよ。いい冥土の土産になったよ……
よっこらせ」 死のグレイゾーン突入

ヴォルフの人

「俺も赤い髪の死神にいい土産話を持ってましたよ……どっこいしょ」
死のグレイゾーン突入

詩織

「ちよちよちよ、ちよつと見ない間に状況悪化……ッ!!!!!!
何してんだあの昆虫ヤロー!!!! どっから湧いて出たんだ!?!
しかも緑の人の体色おかしいよ!?! 真っ青ってレベルを突破して
る青さだよ! あれは内面のテンションを表しているのか!?! あ
ゝあゝあゝあゝ! 狼夜の死までのグレイゾーンが、レッドゾ
ーンギリギリにいいい!!!! もうアレ、居眠り死神を通り越して、
ミニス力閻魔様に裁判を受けるレベルだよ!!!!」

リュウガ

「こうなったら切り札発動だよ!」 めんどくさいので元に戻った

ヴォルフの人&緑の人

「それじゃ、逝つきまーす」

リュウガ

「待つのだよオオカミ君! そんな事したらお母さんが悲しむぞ!」

狼夜

「はっ？」 踏みとどまる

緑の人

「え、あっ」 声に反応したけど結局落ちた

リュウガ

「だから、君が死んだらお母さんが悲しむぞ！」

狼夜

「あの、俺の両親ガキ頃、ダブルで死んでんだけど（いや待てよ…あの仮面3のことだ。この為だけに蘇生させる事も…あれ、俺に家族がもう一人いたような…？）」

故人、狼夜の姉・ジヨブ：仮面ライダー龍醒。ただし狼夜はトラウマにより、忘れている。

狼夜

「（まっ、いつか！）」

リュウガ

「ほらお母さんもなんか言ってくださいよ！」

霧雨魔理沙

「自殺なんて止めるんだぜ！！」

狼夜・詩織

「いやそれ、別の人のお母さん！！」

リュウガ

「えっ、違うの？ せっかく来てくれたのに」

魔理沙

「やってられないんだぜ」

詩織

「こっちのセリフなんだぜ！ 帰ってください！」

リュウガ

「ちえっ、じゃあ次の人ー」

詩織

「まだ居るの！？」

アリス・マーガトロイド

「もう……なんのよ」

狼夜・詩織

「それも別の人お母さんんん！！」

誰と誰のお母さんが、当ててみよう！

リュウガ

「じゃあ、ゆっくりけーねとかもいたけど、最後にこの人！ キヤモンー！」

ヴァンフェンリル

「……………」

狼夜・詩織

「人じゃねええええ!!」

ヴァンフェンリル。狼夜、もとい仮面ライダーヴォルフの契約モンスター。2メートルを超える狼のミラーモンスター。

詩織

「いやいや無理だよコレ! 説得無理だよ! だって仲良くしてる描写見たことないもん! 狼夜の過去編でも、ヴォルフをガン無視してミラーモンスター貪ってたもん!」

狼夜

「しかも俺、ヴァンと話せないし」

仮面3の龍騎では契約者とコミュニケーションを取るため、契約者とだけ会話ができます。しかし、外の世界から来た狼夜は契約モンスターと話せません。

リュウガ

「そこは大丈夫! さーヴァンちゃんこのわっかをよく見てね」

ヴァン

「…………… (コクコクッ)」

狼夜

「あいつ俺以外の言うことはよく聞くんだよなー。やっぱり嫌われてんのか (泣)」

リュウガ

「貴方は今から人間になる……………ワン・ツー・ジャ ゴォ!!」

狼夜

「それだめなタイプの催眠だろ!？」

ヴァン

「…………… (ポンッ)」

リュウガ

「おっしや成功!」

詩織

「なん……………だとおおお!？」

狼夜

「ヴァンがちっこい銀髪の女になったああ!? お前メスだったの!? フロストさんとこ紅い龍がメスだった事なみにビックリなんだけどっ!」

リュウガ

「私は知ってたよ。ドラぐもん (ドラグブロッカー) が教えてくれたからね」

詩織

「身長差が激しいんだけど、2メートルから150センチぐらいになっただけだ」

リュウガ

「それは……………ギャップ萌え? もしくは夜一さんが実は女だった!、的な」

詩織

「え……ええ……」

狼夜

「ヴ……ヴァン……」

ヴァン

「……………」

狼夜

「……………」

ヴァン

「……………(ぼっ)……………」

狼夜

「はい？」

ヴァン

「あ……あんまり見るな………恥ずかしい………だろ」

狼夜

「……………はあ？」

ヴァン

「お……お前に見つめられると、上手く話せない………できればそっちを向いててくれ………」

狼夜

「あっ、はい」

詩織

「……………もしかしてヴァンが狼夜に素っ気ない態度をしてた理由
って」

リュウガ

「どーやら極度の照れ屋さんだったからのようだねえい。オオカミ君
限定の」

詩織

「ええ……………ミラーモンスターが照れ屋さんって…ええ…」

ヴァン

「そ…その…なんだ。し…死ぬな！ 死んだらダメだ！！」

狼夜

「お前…」

ヴァン

「た…例え本編登場が魅空の次に多くせに影が薄くても、詩織や
将斗に比べて設定がありがちで目立たなくても、喋り方が殆ど通常
時の魅空と一緒に影の薄さに拍車をかけていても、狼夜やヴォルフ
って名前がかなり痛々しくても、脚が速いっていても赤音やリュ
ウガに比べたら悲しい結果になっても、喋り方や性格にあんまり特
徴無くても、幼児退行って唯一のアイデンティティーの存在が薄く
ても、実は身長が190センチもある描写が1回あったのに誰も気
付けてくれなくても、過去編の時感想が殆ど来なくて仮面3が狼夜
の出番が少なくなった過去があっても、正直仮面3もここまで影が薄
くなると想定してなくても、同じ狼関係なのにやっぱり女性の若葉
の方が需要があって読者の印象の残り方に差があっても、身長19

0センチ髪型ツンツンって ブレインのギャモンかよ (笑) っ
て仮面3が思っても、考えてみれば仮面3って兄弟で殺しあう話好
きだなーって最近気付いても……俺は狼夜に死んでほしくない！
だから今も昔も頑張っていたんだ！ 死なないでくれよ狼夜！」

狼夜

「……………」

ヴァン

「……………」

狼夜

「……………グボオッ！！」 吐血してその場に倒れる

ヴァン

「！！… な…なぜだ！？」

詩織

「いや君が言葉のナイフでズタズタにしたんでしょ！？ 精神を攻
められて吐血するってかなりのダメージだよ！ 後半殆ど関係なか
ったけども！」

リュウガ

「天然？ ヴァンちゃん天然？ 天然照れ屋さんって怖い」

この後、狼夜は永遠亭に運ばれ一命を取り留めたが、メンタル面に
深い傷を負った。

因みに気付いたらフェードアウトしていた緑の人は、ビルから落ち

ても死ななかつたが、メンタル面に深い傷を負い掛けていたので永遠亭に通院したという。

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！

『アंकへ。あなたはうちのアंकと同じく、仮面ライダーホークに変身出来ます。さて、オーズに八百年前の仕返しとかしますか？

あるいは、魅空にいつもの仕返しとかしますか？』 by k・iさん

アंक

「勿論、魅空だ。あいつ、王と殆ど同じ事しやがって……」

アंकは昔フヨウに憑いて魅空と行動してました。しかし、メダルが集まるとアंकの背中を、魅空のトラクローがぐっさり行きメダルを全部取られました。テレビで800年前のオーズが同じ事をした時、仮面3はかなりビビりました。偶然って凄いな。

アंक

「しかしあの時のあいつ…変身を解いたら右目が紫色に光り、紫の気みたいなものが出ていたんだ…？」 ネットバレ

メズール

「それより、仕返して何をする気なの？」

アंक

「ホークの力で魅空を捕まえた後、女がいない場所に1週間厳重に監禁する」

メズール

「たぶん、舌噛み切って自殺するわよ、あの坊や」

『カザリに質問。自分の理想の恋愛をみんなに暴露するか、ガメル（？）と5時間話し合うならどっちがいい？ちなみに前者を選ばないとガメルによる理想の恋愛音読が始まります』by 竜王の白翼さん

ガメル

「すたんばーいすたんばーい」 朗読本すたんばーい

カザリ

「おい止める。おいそこマジで止める。というかメダルの塊であるグリードが、恋愛？ ハハッ、へそで茶が沸かせるね」

ガメル

「……………」 カザリのへその辺りに水と葉を入れた急須を当てる

カザリ

「……………何をしてるの？」

ガメル

「だって、お茶沸かせるって言ったから」

カザリ

「言葉を鵜呑みにするんじゃない。そして暴露するより、君と話し合った方がいい」

ガメル

「なんで？」

カザリ

「人に言い触らすより、自分で吸収する方がいい。黒歴史だって自分で聞いた場合、悶えるだけですむんだから。だから僕は対話を選ぶ。そっちの方が…被害が少ない！ そうだろう！？ そうだな！」

ガメル

「最後自分に言い聞かせてる」

『オーズのコンボで好きなコンボは何？タマシーとブラカワニも含むからね』 byネス（鳴神ソラさん）

狼夜

「ラトラーター」 速さ繋がり

詩織

「ラトラーター」 猫科

将斗

「サゴーズ」 変身した色つながり

メルカバ

「タジャドル」 鳥類

ゴクウ

「シャウタ」 鞭が頑張れば棍に見える

リュウガ

「プトティラ」 恐竜⇨竜⇨龍

フヨウ

「タジャドル」 アンク繋がり

若葉

「サゴーズ」 サイは白、髪も白

掩樹

「ガタキリバ」 師匠と色がちょっと似てるから

二号

「シャウタ」 色々できそうだから

櫟

「興味はない」

赤音

「タジャドル」 色

飯純

「サゴーズ」 色

ジョージ

「シャウタ」 色々できそうだから

他にもいた気がするけど、気にしない。

『仮面3の知ってるアニメや漫画に特撮なのでこの人はこう言うキャラに似てるな』って事はある？』 byガメル（鳴神 ソラ）

魅空 800年前の王。行動が似てる。

詩織＝フィリップ。メモリの実験台、ただし詩織は無理矢理。詩織が使っているライオネスメモリは故人である双子の兄、理音（リオン）の脳が使われて開発された。

将斗＝フランドール・スカーレット。強い癩癩持ち、昔監禁されていた等々、微妙に接点が多い。まあフランドールは癩癩持ちじゃないけどな。フロストさんに言われて初めて気付いた。

後は……微妙に近いけど決定的に違う奴が多いです。

『グリードへ、もし自分の人間態を考えるなら原作の体か？それともオリジナルか？』byアंक（鳴神 ソラさん）

カザリ

「原作で」

ガメル

「俺は別にこのままで……」

カザリ

「だめだ、原作、あれがしっくりくる。オリジナルは面倒だし、なにより今の姿はだめだ。今の姿でメズールに懐いたら、ただの百合カップルにしか見えないから。大きいお友達ファンしか増えないから」

ガメル

「でも……」

カザリ

「でももへちまもない！ いいか！ 君の人気はメズールとセットだから、生まれてたと言っても過言でもない！ だけどどうした！？ ここではただの百合カップルだ！ どうするんだ！？ これはどうすればいいんだ！？」

ガメル

「ええ……」

『ガメルに質問。今回みたいいつもの子供っぽさが無くなるけど、自覚あるか？』by正（闇夜の黒鳥さん）

ガメル

「いえす・あい・あーむ！」

グリード一同

「（；）！？」

ガメル

「だってそうだろ。ここはグリードが多い、こつでもしなきゃ生き残れない…、ただでさえカザリ人気に勝てないのに！！」

カザリ

「えっ、ソレ気にしたの！？ それを気にした結果が、子供っぽさを捨てるという自分のアイデンティティーを放棄するという行動だったの！？」

アंक

「お前は頭のハンディキャップがキャラの特徴だろ！」

メズール

「いや完全には捨ててないわよね？ たまにちゃんとしてるわよね？」

緑の人

「とういかハンディキャップって失礼じゃないか？ まあガメルだからいいが」

カザリ

「早く元に戻るんだ！ 君は純粹キャラじゃなくちゃ……君のキャラを愛してくれた人達はどうなるんだ！？」

ガメル

「帝王に愛などいらぬ」

アंक

「ホントに誰だお前！？」

ガメル

「ただし！ 飴とかお菓子は欲しい」

カザリ

「欲望に忠実！」

ガメル

「トリック・オア・トリートー。お菓子をくれなきゃムッコロすぞ」

カザリ

「なんか違う！？」

ガメル

「さつきから五月蠅いんだよ！　この子猫とレッドホットチキンが！」

アング

「それどういう事だコラアアアア！　焼き鳥とかならたまに言われるが、レッドホットチキンは初体験だぞ！」

カザリ

「ツツコミだけでそこまで言われる覚えはないよ！」

ガメル

「邪魔なんだよ。俺の思い通りにならないモノは全て」

カザリ

「ツツコミがですか草加ガメルさん！？」

アング

「ツツコミがいらないうっていったらこの作品どうなるんだ！　ビュテイがないポーボボが聖鼻毛空間に入るようなもんだぞ！」

A・自覚症状めちやくちやありました。

『ガメルへ、覚えたい漫画の必殺技とかある？　例えば北斗剛掌波とか、キン肉バスターとか』 by タスクさん

ガメル

「かいざーうえーぶー！」

緑の人

「ぬわあああーっ！！！！！！？」

カザリ

「いきなりなんか出たああー！！ 緑の人おおお、は別に大丈夫か。で、なんか覚えたい技あるの？」

ガメル

「うーん……取り敢えず憑神覚醒は覚えたい」

アंक

「いつお前碑文使いになった！？ お前憑神（アバター） 持つて……」

ガメル

「来たれ再誕……っ！ コルベニクツツ！！」

アंक

「たああーっ！ 結構強い奴持つてるうう！！」

ガメル

「掃討の魔針！」

緑の人

「ちよ、また俺か！？」

ガメル

「凶つ神の裁き！」

緑の人

「ぬわあああーっ！！！！！！」

カザリ

「なにこれスツゴいカオス」

A・hackノG・U・をプレイした事がない人には、分からない技を覚えたいそうです。

『続いてカザリへ、セルメダル5000枚で恋愛シミュレーションゲームのシナリオを書いてほしいって言われたらやります?』by タスクさん

カザリ

「えっ、なにこれ、本日二回目? しかもなにこれ、僕に生き恥をさらせと。こーゆーのは自分の中で、楽しんで作るのが楽しいんだよっ! 他人にとやかく言われるよりだったら、矛盾だらけの方がまだいい。綺麗な恋愛より、辛く厳しくも愛が確かにある恋愛の方がいいじゃないか!!」

セル5000枚。

カザリ

「うっ……」

セル5000枚

セル5000枚

セル5000枚

カザリ

「じ……時給なら……」

A・時給で5000枚とかヤバイ。

『仮面3様のオリジナルキャラクターの方々に質問ですが、異性にして欲しい・やりたい事はなんですか？』byソラ『ヤンデレの対応の仕方を教えてくれ』byサカキ（フロストさん）

今回は特定のキャラクターで。あと、ヤンデレ対応は、逆に教えて下さい。

リュウガ

「緊迫プレイ……をやってみたい。男に」

詩織

「MとSが逆になった……だと……！？ あのドMのリュウガが……？」

リュウガ

「まあ、たまにはそーゆー時はあるよっ」 接近

詩織

「な、なぜ接近を……」

リュウガ

「ま、今周りにオスは君しか居ないし。と、ゆーわけで……ジュワッチ！」 ルパンダイブ

詩織

「に、やああーっ……！！！」

若葉

「私は男の人に、膝枕を試してみたっス…！」

二号

「ならば俺が」

若葉

「お断りします」

二号

「（；；；） ショボン」

将斗

「（眠） 「寝床を探して彷徨う」

若葉

「あつ、将斗さん…ってちょー!？」 寝床にちょうどいいと判断されダイブ

将斗

「ZZZZZ……」

若葉

「ええ〜…」 なんやかんやで膝枕

時森将斗、寝床にちょうどいいと判断した場合、人でもなんでも枕や布団として活用する。

狼夜

「俺の存在を分かって欲しい…あと存在を否定しないでほしい。異

性とか関係なく」

ヴァン

「だ…だから悪かったって」

狼夜

「え、何が悪いの？ 何が悪いと思ってんの？ 無意識に、しかも天然で俺の気にしてることの八割を言い当てたことを、悪いと思ってるの？ 思えてんの？ それとも思いたいと思ってるの？ 俺のライフをゼロにしてボタバタにした奴が、なにいつてんの？」

ヴァン

「は…反省してるってえ…だから機嫌直してって…」

狼夜

「え、なにそれ。言える立場じゃないよね。お前がそれ言える立場じゃないよね」

ゴクウ

「うわ狼夜超ウゼエ。女の子半泣きで謝ってんのにあの態度……、
どんだけ傷ついたんだよ」

リバース×オグマ、クロス記念！リバースのあの人がキタアアアア！ b y 赤辛

今回はカザリ好きに定評があるタスクさん作『仮面ライダー リバース』と、私作『仮面ライダーオグマ』とのクロス記念！ リバースのキャラがめちやくちやキャラ崩壊しながら登場！

最初に言うておく！ タスクさんすいまっっせーん！！

リバース×オグマ、クロス記念！リバースのあの人がキタアアー！ b y 赤音

赤音

「あゝ、ひまつ」

飯純

「いや、まともな登場一発目でそのセリフはどーなの？」

赤音

「事実だろ。つか無駄に歌舞鬼ネタ持ってきてても、読んでない人にはちんぷんかんぷんだろ？ だからうかつにボケかませねーんだよ」

飯純

「たしかにそうだけど……」

赤音

「あゝ、どつかにボケが転がってねーかなー」

飯純

「ボケ担当なら文句言ってるんで、ネタでも考えてよ」

赤音

「じゃかあしい。凹ますぞ」

飯純

「はいはい」

ピンポン。タクハイビンデース。

飯純

「？ なんだろ」

赤音

「つーか今の軽く歌舞鬼のキャラだよな。分かる人にしか分からない黒人だよな」

飯純

「なんだろ地味に重いし…デカイクロネコ マト箱だし。配達人はやっぱグラサン黒人だったし」 受け取ってきた。

赤音

「ちょっと開けてみ」

飯純

「よっこいしょ」 オープン

伊吹茜

「呼ばれてないけど！ じゃじゃっじゃ (ry) クローズ

赤音

「ん？ おいどした。急に閉めて。しかも顔が…」

飯純

「入ってる！ なんか入ってる！ リバース本編では絶対見れないテンションで入ってる！」

赤音

「入ってるって何が…」 オープン

茜

「今の……閉めないだろ普通……」

赤音

「確かに入ってるな……本編では見れないような、メツチャ低いテンションで」

飯純

「出鼻挫いてごめんなさい！」

赤音

「つか茜さん、なにやってんすか。貴方リバース本編で亡くなってる筈でしょ」

茜

「ふむ、そうなんだが、死んだ後死者が渡る様な川に行つてね。そこで、死神に出会って……」

*

小町

『へーいその幽霊』

茜

『おや、君は？』

小町

『あたいは小野塚小町。そんなことよりも、ちよつと米倉んち行く

『?』

茜

『いくいくー!』

*

飯純

「そんなウチくる感覚で!? 回想めっちゃ短いじゃないですか! つーか茜さんこんなキャラじゃなかったでしょ!？」

茜

「いやあ、健君と別れるのは辛かったけど、死んだらいろいろと解放されてね」 箱から出た

飯純

「解放されたつーか頭のネジぶっ飛んだだけでしょ!！」

赤音

「とゆーか茜さん死んでからだいぶたってるっすよね? 今オグマとリバーズのクロスしてるし」

茜

「はっはっはっ、死者が渡る様な川で箱詰めされたんだよ? 流石のクロ コでも、時間がかかるさ」

飯純

「なんで軽くク ネコ押し? つーか閻魔様は? ミニスカ閻魔様

はスルーですか？」

茜

「なんでもしゃくを子供に取られた別の閻魔様の、愚痴を聞きにいつているそうだ。死神が言っていた」

飯純

「なん……だと……？」

赤音

「やっぱり仮面3とこのは、原作キャラでも人脈ばねえ……」

茜

「はっはっはっ、何をいつているんだ。ここにも出たことがあるゲラサン悪魔の方が人脈が凄いだろう？」

赤音・飯純

「ごもつともつす」

飯純

「ん〜、まあなんであれよかつたんじゃない赤音。友達に会えて」

赤音

「確かに」

軽いキャラ説明・米倉赤音。戦闘力がセル完全体くらい。作品内に友達がいない。友達が別作品のリバースのキャラクターにしかないない。某友達がほにやら小説を読んで「お前ら友達集団じゃねーのかよ!!! 太陽に触れて蒸発しろリア充共がっ!!!」と、ガチで叫んだ。

茜
「確かに別作品の友人と出会えたのは感動的だが、残念なお知らせだ」

赤音
「？」

茜
「実は私はこのあと直ぐに、冥界の亡霊姫と一緒にヨネ ケっぼく看板もって突撃しなければいけないといけないんだ。というわけでそろそろ……」

赤音
「マジっすか茜さん!？」

飯純
「つか予定あるなんで僕達のところ……」

茜
「まあ……アレだよ。オマケ?」

赤音・飯純
「レッツゴーでもオマケ扱いかよっ!?!?!」

茜
「それじゃあ元気にキャラ崩壊してくるよ!」 サムズアップ

飯純
「アンタほんつとに大事なネジ外れてるよな!」

*

茜

「というわけで」

幽々子・茜

「突撃！ 別にお隣ってわけじゃないけど突撃して、晩ご飯紹介と偽ってご飯を貪り食う企画」

幽々子

「ドンドンパフパフ」

茜

「では早速、【激突】！！」

幽々子・茜

「ドォーンッ！！」 扉を蹴りやぶる。

若葉

「うつひゃい！？」

幽々子

「最初のターゲットは犬崎若葉さんです」

若葉

「な、なんでスカ急に！？ というか茜さんがなぜここに？」

茜

「なんだか皆同じリアクションをするね」

若葉

「そりああ茜さんリバーズ本編で…」

茜

「まあね。だから今回、ここでキャラ崩壊させにもらいにきたよ」

若葉

「ぶっ!?!」

茜

「いやね、もう私がリバーズ本編で出るとしたら（名前が）シリアスな場面ばかりだかね。たまにはキャラ崩壊しようかなと」

若葉

「くるところ間違えてますよ!」

伊吹茜さんは仮面3が無理矢理出してます。

幽々子

「で、ヨネケ的に晩ご飯を食べなきゃいけないので、晩ご飯はなに?」

若葉

「貴女は貴女で歪みないっすね!」

犬崎若葉晩ご飯メニュー。

1・ゴーン的なカップ焼きそば。

2・付属のワカメスープ。

終了。

茜・幽々子

「うわああ……」 痛い子を見る目

若葉

「や、なんでスカそのリアクション」

幽々子

「貴女若いんだからもつと栄養のある物を食べましょうよ……卵とかイクラとか、カズノコとかスジコとかタラコとか」

若葉

「卵に偏り過ぎでしょ!!」

茜

「それよりも私は幻想郷にカップ麺があった事に、驚いているんだが……」

幽々子

「しかし、本当にダメな若い子の晩ご飯ね」

若葉

「いきなり来て、人の晩ご飯狙っている人達に色々言われてる私って……給料日前は金銭的にキツイんスよ!」

茜

「まったく、そんなだとクロスに出ている男版の君にキャラ負けしてしまっぞ」

若葉

「喋り方が似てるだけで一緒にしないでください!」

幽々子

「ゴーンのキャベツって無駄にしゃきしゃきしてるわよね」もっしまもっしま

若葉

「なぜ予兆すら見せずに人の焼きそば食ってるんスか!? 私の最後の焼きそばあ!」

茜

「カップ麺などの化学調味料が多いものばかり食べていると、身に悪いぞ」ズズズズ

若葉

「そっついながらワカメスープ啜ってる貴女はなんなんですか!？」

幽々子

「御馳走様でした」

茜

「右に同じく」

若葉

「ああ…私の晩ご飯がああ…明日1日食べるものがないのに…」

茜

「もしかして天狗の仕事って低賃金？」

幽々子

「そんなに落ち込まないで。明日の半値印証時刻（ハーフプライスラベリングタイム）を狙えばいいじゃない」

若葉

「急にラノベの設定をこの世界にぶちこむのは止めてください…仮面もよく内容がわかってないのに…あと私の財布の中に 円しか入ってません…」

幽々子

「うわああ…」

茜

「そう落ち込むものじゃないよ。ほらソ ジョイ上げるから」

若葉

「ソ ジョイあるならそれ食べてくださいよ！ というかソ ジョイごときで」

茜

「ソ ジョイごときとはなんだ！！ コレには見た目以上の満足感と驚くほどの腹持ちの良さがあり、さらに低GI食品で」

若葉

「あれ！？ 今私怒られてる！？」

*

茜

「追い出されてしまった…。あの子の家にいた動く紅葉饅頭、美味しそうだったなあ……」 ソ ジョイもぐもぐ

幽々子

「やめたけで。流石にそれをやったらあの子泣くわよ」 カロー
メイトもぐもぐ

若葉は龍騎本編でゆっくりもみじを捕まえて、飼っています。

茜

「さて、次はどこにいきますか」

幽々子

「それはもう決まってるわ。それはここよ!」

イン・ザ・八雲さん家

幽々子・茜

「おこんばんわー」

藍

「あつ、お久しぶりです。幽々子様と……貴女は?」

茜

「どうも。夫やらが何回かお世話になりました。伊吹茜です」

藍

「ああ、リバースの方ですか。色々とお世話になっています」

茜・幽々子

「というわけで晩ご飯ください」 趣旨が奪うから恵んでもらうに変わっている

藍

「やつ、どういわけですか？ 時間的にお茶漬けぐらいしか出せませんよ」

幽々子

「冷静に対応してご飯くれる藍ちゃん大好き！」

「少女？ 食事中。そして終了」

幽々子

「ところで、こういう企画敏感に反応しそうな紫と は？」

藍

「絵で顔出したからって、リュウガさんの本名をさらっと言わないでください。リュウガさんと紫は、別の部屋に」

茜

「だったら挨拶をしに行かなくては」

藍

「あー……今は行かない方がいいかと」

茜・幽々子

「？」

藍

「今、ここでは別のベクトルの変態が、リュウガさんを説教に来てまして。遊び半分に覗いた紫様はそれに巻き込まれて……」

幽々子

「あ……」

茜

「だけでも、顔出しに行かなくては話が進まないだろう。あととある方の要望なので。お願いします」

藍

「……………後悔しないでくださいよ？」

*

メルカバ

「お前達はホントに分かっているのか！？ リュウガは様々な人物へのセクハラは勿論、年相応の行動といったモノがまったくわかっていない！ レッツゴーが始まった頃にやっていたバイトの話はどうなった！？ まったくその話を聞かなくなったぞ！」

リュウガ

「そ……それは仮面3があ……」

メルカバ

「だまらっしゃい！　ただでさえ暗黒龍騎士自宅警備員という、不名誉なレッテルを背負っているというのに……お前には危機感と緊張感というものが無いのか？　確実に就職活動をしている者の方が危機感をもつて、毎日を生きているぞ。お前は19らしいじゃないか。それでいいのか？　そんなので本当にいいのか？　お前は本編では重要な立ち位置に属するキャラクターなのだぞ。つまりは他のキャラクター達を裏で引っ張っていくのは勿論、その役目が来たときに物語自体を導かねばなるまい。そんなお前がこのていたら……許されると思ってるのか！？　只でさえダメだと言うのに、活動報告ですら『ふざけている』と言われるしまつ。もっと女らしく振る舞え！　変態発言を止める！　常に変身しているのを止める！　真面目に喋ろ！　しっかりしろ！　直ぐにバカな行動するのを止める！」

リュウガ

「……すみません。なんかすみません。もう、生きててすみません」

メルカバ

「私はそういう事を言ってるわけじゃないのだよ！！　最近の若者はいつもそうだ。直ぐに生きている事を悲観するわ、剩え生きててすみませんだと？　ふざけるな！　生きてる事に謝罪するくらいなら、謝罪しないように生きる！　それが無理ならば、謝罪しないで生きていける道を探せ！　無責任な事を言っていると私に憤りを感じたならば、責任を持って私も一緒に探そう！　それと八雲！　お前にも言いたい事があるぞ！　お前にもリュウガの様な発言が多々見られるぞ！　原作キャラクターでも重要なスポットのお前がだぞ！？　いい歳して何をしているんだ何をオ！　いままでお前の見せ場であつたとすれば、コーカサスになるときぐらいだ。他にはちよくちよくシリアスな場面だけだというのに、たまにやるコレで……」

…もうお仕舞いだよ！ 後半にならなくては出番がないというのに、
そんなんでどうするっていうのだ！？ ええ？ どうなんだ八雲よ！

紫

「…がんばってまずう…ゆがりんだってがんばってるんです…」
いい歳して泣いている

メルカバ

「いい歳して泣くな！ そして自分の事をゆかりん？ 私を馬鹿に
しているのか！！ お前達、いや貴様らはこの5時間と48分12
秒何を聞いていたのだ！！！！？」

リュウガ・紫

「じべんなざい…いい！！」

藍

「ほらね」

幽々子

「これは…酷いわね」

茜

「キャラ設定を完全否定。ここの作者の持ち味であるキャラ崩壊も
完全否定。キャラクターにとってはお門違いの説教。私は今、地獄
を見ているのか…っ！」

幽々子

「あれは友人としてほっとけないわ！ だって仕方がないことで怒
られてるんですもの！」

藍

「確かにそうですが、メルカバが言っている事はすべて正論ですよ？」

幽々子

「ぐう…！」

藍

「ぐうの音しかでませんか」

茜

「ならばここは、彼のキャラを逆手にとろうじゃないか（ニヤリ）」

藍・幽々子

「？」

茜

「彼は詩織ちゃん？ から先生と呼ばれているじゃないか。ならば先生と呼ばれたりするのは慣れていないはず。いやもうそれに反応するレベルだろうね。だからそんな雰囲気を作れば………ばれないんじゃないかなっ！？」

藍

「いやいやいや…それ無理でしょう…！」

幽々子

「やりましょっ！」

藍

「やるの！？ いやここは、やる、ていう雰囲気だったけども！」

メルカバ

「まったく貴様らは…」

幽々子

「先生！確かに説教も大切だと思いますが、いい加減文化祭に何をするか、決めなくていいんですか!？」

茜

「もう何回も延長しているじゃないですか!」

藍

「いや、会話の入り方それ！時期ズレてるレベルじゃないですよ!！」

幽々子

「私は焼きそばを作りたいですっ!」

茜

「え、私はスパゲッティがいいよ」

幽々子

「定番でしょ、焼きそば。スパゲッティって色々とキツイわよ」

茜

「それでも！私はスパゲッティがいいの!」

幽々子

「もー茜ってば、カレとの思い出の料理だからって、狙いすぎだぞっ」

茜

「てへぺろっ」

藍

「あんたら地味にすげーな！ これ連載一の茶番ですわ！」

メルカバ

「まあまあ、お前達。気持ちは分かるがまだまで。今は説教が先だ」

藍

「アレ！？ のっちゃうの！？」

リュウガ

「私は露出が激しいメイドカフェがやりたいです」

紫

「私は見た目が若ければババアって言われない世界を作りたいです」

藍

「紫様、それただの願望！！」

メルカバ

「貴様らに発言する資格はない！」

リュウガ・紫

「ひいっ！」

藍

「生徒差別！？ 生徒全てに、均等に怒ってくださいよ！ そのウ

「ザい生徒全員を！」

茜

「先生。リュウガちゃんがお腹が痛い（ストレスで）って言うているので、保健室に連れていってもいいですか？」

メルカバ

「保健の先生は現在出張中のため、連れていっても無意味だ。なので我慢してなさい」

藍

「変な設定付きですか!？」

幽々子

「先生。紫ちゃんが風邪っぽいって言ってます。紫ちゃんの年齢（高齢者）を考えると、風邪から肺炎を引き起こして重症になる事がありますので、どうしたらいいですか？」

紫

「いっほっいっほっ！」 ちよっと泣き

メルカバ

「咳が演技っぽいので、恐らく嘘だろう。放っておきなさい」

藍

「なげやり!！」

メルカバ

「お前達、いい加減にしないか。仮病なんぞで逃げられるほどのメルカバ甘くはないぞ」

リュウガ

「ちくせう……ド ツミたいな性格しやがって……」

メルカバ

「黙れフラ ス」

リュウガ

「そっち系統の変態じゃないもん！」

メルカバ

「ええい黙らんか！ まだ分からんようだな！！ 伊吹、西行寺も入れて説教5時間追加だ！」

茜・幽々子

「ナゼエ！？ OWO」

リュウガ・紫

「横暴だああ！！」

藍

「だから言ったのに……」

*

くキツチリ5時間後。そして白玉楼、ナウく

茜

「ふふっ……この歳で説教されると、結構クルもんだね……」

幽々子

「そうね……」

妖夢

「やっと帰って来たと思ったら、なんなんですかこのテンション。あと誰ですかこの人」

幽々子

「かくかくしかじか」

茜

「うしうしまうま」

妖夢

「なるほど、なんやなんやで拾ってきた霊とバカやったら、メルカバさんに本気で説教されたと。もう……やめてくださいよ。霊を犬みたいにホイホイつれて帰ってくるの」

クロ コに箱詰め去れる前に、幽々子に拾われてました。

幽々子

「名前を付けるなら、『茜空の烈風』ね」

妖夢

「いや、どんなネーミングセンスですか」

茜

「まあ色々合っているけどね」

妖夢

「で、この人どうしますか？」

幽々子

「飼いたい」

茜

「なるほど、私は犬感覚か」

妖夢

「幽々子様、それは失礼です。あとダメです」

幽々子

「あら、それじゃあこの子は家無き子になっちゃうわよ。貴女にそんな残酷な決断ができるのかしら!？」

妖夢

「もといた場所に返してきてください。あと彼女の意見も尊重しないと」

茜

「うーん…私は別に…、それに帰れるなら帰りたしいし」

幽々子

「何いつてるの!？ 確かに貴女が帰れば喜ぶ人もいるでしょう! だけど霊になった貴女と接触したら、ビックリして逝く人がいるでしょう! ゲンゾウじいちゃんとか。年齢を考えたら十分あり得るわよ! だって孫19よ!？」

妖夢

「いちいちクロス先を宣伝する止めてください！」

茜

「……………確かに」

妖夢

「納得しちゃった!？」

茜

「だったら私はどうすれば……………」

幽々子

「だったらYOUここに住んじやいなよ」

茜

「うーん……………」

幽々子

「美味しいご飯が毎日でるわよ」

茜

「私、ここに住む!！」

妖夢

「動機が不純ですよ!」

幽々子

「よーし住人が増えた事を祝って、今夜は宴会だー!」

茜

「おー！」

妖夢

「なんだか嫌な予感が…」

この後、妖夢の予感が的中し、凄まじい料理を作ることになった妖夢は重度の腱鞘炎を引き起こして、永遠亭に担ぎ込まれた。

茜は下手したら幽々子並に食える……と思う。

*

【それ行けオー・s】

これは、なんやかんやで来た質問にオーズ関係キャラ達が答えるコーナーである！ だけどぶっちゃけ、オーズに関係ない奴にも質問くるから、タイトル変えようかなって、仮面3は思ってるよ！

ガメル『そっちの俺たちにしつもん「料理は出来る？」』 by ガメル（鳴神 ソラさん）

カザリ

「必要ない……と言いたいところだけど、この躰になってからは食事が必要になったからね」

ガメル

「だけでも作れませんかっ！」

【裏設定】

アंक、メズールはフヨウに擬態して一緒に住んでおり、食べ物
フヨウが作って提供しています。ただしはたからみたら魔法使いと
グリードが同棲していると言うより、三つ子にしか見えません。擬
態って凄いな。因みにウヴ…緑の人もフヨウのお情けでペットとし
て飼われています。しかし、擬態はしていません。アंकがするな
とキレるから。そしてオリジナルグリード陣もマンションで一緒に
住んでます。

ガメル

「俺たちのは魅空が作ってくれるんだー」

カザリ

「あいつハイスペックなのか、低スペックなのか分からないよね。
まあたいてい美味しいとは思わないけどさ」

ガメル

「アレ？ でもカザリ、前にぼそつと『意外と美味しかったなー』
って言ってたなかったけ？」

カザリ

「ハア！？ そんなん言った事ないしい！！ ガメル何言ってるの
！？」

ガメル

「……………ふっ」

『そっちの俺へ、魅空以外で苦労している事はあるか？』 b y ア
ンク（鳴神 ソラさん）

アंक

「ぶっちゃけ、フヨウ」

フヨウ

「ええっ!？」

メズール

「最近、お隣の天道おばあちゃん家の庭の草むしりに行った時しかり、フヨウはなんでも首をつっこむから。私もここまでとは思って無かったわよ」

フヨウ

「え、そうかな。まだ今月は58件だよ?」 12月現在

アंक

「うう…思い出すだけで吐き気が…」

メズール

「一緒にいる事が多いから、姉妹によく間違われるし」

長女・メズール

次女・アंक

三女・フヨウ

アंक

「頼むからお前は自重しろ!」

フヨウ

「ほぼ条件反射だから無理ですっ！」

メズール

「この娘もブレないわね」

『リュウガさんへ。猫以外で動物の耳と尻尾を付けるなら何にする？』 by ネス（鳴神 ソラさん）

リュウガ（変身解除）

「何が似合うと思う？ まっ、このワタクシに似合わない物はないっすけどね！ 可愛くっでごめんね！」

狼夜

「じゃあ、豚の耳でも付けてる」

詩織

「サイの耳」

将斗

「トナ…カ…イ」

リュウガ

「うーん、ヨロイ君は季節的に分かるけどさ……オオカミ君とライオン君のはナニカナ？ すっっごい悪意を感じる」

狼夜・詩織

「だってなんでも似合っつて言っから」

リュウガ

「純粹気取ってるのか？ もう純粹キヤラはヨロイ君でお腹一杯なんだよおおお！！ 君らの本心言ってみろ！」

狼夜・詩織

「出番が多い奴は人気下がれ！！」

リュウガ

「ワーオ正直だなオイ！」

『フヨウってぶっちゃけ兩崎の方の魅空、2号のことをどう思ってます？』 by タスクさん

フヨウ

「まあ、ちょっとちっちゃくなくても魅空だからね。可愛い弟分みたいなの…かな？」

2号

「じゃあ可愛い弟分に、中学校ぐらいに習う保健体育を、実技で教えてくだ (ry」

アंक

「モロ『アーツ！』な部分指定してんじゃねーよ！ このダメンズ遺伝子が！！」 飛び膝蹴り

2号

「ゴチソーサマデスッ！！」

フヨウ

「アंक、あんまやっちゃダメだよー。魅空にかわりないなら、

攻撃してたら根負けしちゃって怪我するよー」

2号

「俺の心配は!?!」 暴行ナウ

アंक

「するだけ無駄だろ!」

フヨウ

「確かにねー」

2号

「たまにフヨウさんが優しいのか、そうじゃないのかわかんない!

ゴフツ!」 アंकの右フック直撃

『 皆さんリュウニヤさんを見た感想は!?!』 b y 総司 (闇夜の
黒鳥さん)

キャラー同

「ウザい」

リュウガ

「えっ？ お仕舞い？ マジで？ えっ、このコーナーで一番短い解答じゃね？」

キャラクター同

「だってそれしか思いつかない」

リュウガ

「フヨウちゃんとか優しいキャラも！？ ナニコレ！？」

フヨウ

「流石に…あれはちょっと…」

キヨちゃん

「無いわね」

リュウガ

「OH！ 久々に登場キヨちゃん擬人化形態！」

メルカバ

「お前は年齢を考えて行動しろおおお！！！」

リュウガ

「うわああああ！！！」

19歳も立派な大人であるbyメルカバ

『魅空さんへ。女百人連れてきたら、僕に何をくれますか？』by
光介（k.iさん）

タカカンドロイド

『タカ〜』

フヨウ

「魅空から解答が来たから、私が読んで答えるよ！ 『拝啓、光介様。この度はわざわざ私の様な者への質問、ありがとうございます。さて、解答ですが、貴方には私の奴隷という名誉を差し上げましょう』……だって！」

カザリ

「一瞬誰っ！？ って思ったけど、いつもの魅空だった。どうやら謹慎のせいで喋り方を忘れてたみたいだね」

アंक

「安心の魅空クオリティ。つかウツゼ」

ガメル

「なんかまた厄介な事になりそう」

『魅空、おまえに究極な質問をしよう。あと三話登場を延期する代わりに、女に憑いてるグリード全員がおまえを好きになる。そしておまえがいるところにやってくる。さあ、いいのかわいのかどっちだ？ 魅空一号、答える！』 by エクストリーム (k.iさん)

ゴリラカンドロイド

『ウホ！ ウホ！』

フヨウ

「はい、二通目でーす。えーと『拝啓、本編のトサカ頭似のエクストリーム様。女は自分で落とすか、無理矢理自分のモノにする方

が好きなので、私は自分の出番を減らす気はありません』だってさ
！」

アंक

「あんつの野郎…!!」

カザリ

「安心の魅空クオリティ。ウザさメガマックス!!」

ガメル

「というみあはどこから手紙を送ってるの…?」

k . i さん、ごめんなさい。

リバース×オグマ、クロス記念！リバースのあの人がキタアアー！ b y 赤辛

次回はついにあいつが帰ってくる！ 長い謹慎を経て再登場！
そして記念ってわけじゃないけど、『ネット版仮面ライダーオーズ
ALL STARS 21の主演とコアメダル』のパロディです！

魅空復活の記念でネタバレ覚悟の、紫グリードの本格登場です！
次回も宜しく御願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896u/>

レッツゴー仮面3 極・スピンオフ！ ショート茶番劇場2011

2011年12月11日21時49分発行